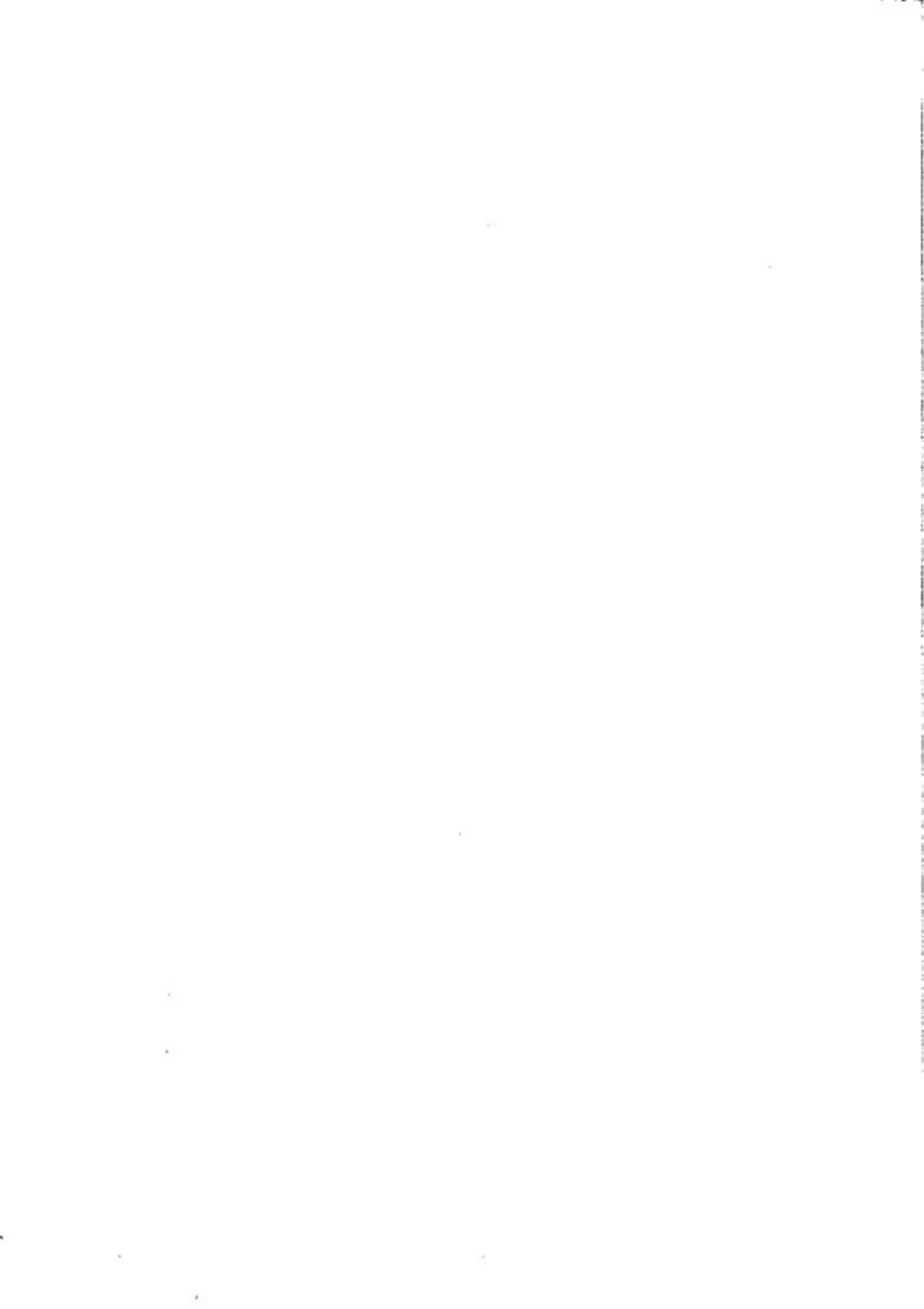


八尾市文化財調査報告22

八尾市内遺跡平成2年度発掘調査報告書Ⅰ

1991.3

八尾市教育委員会



正誤表

	誤	正
P 7-L 5	(1-478)	(90-478)
P 28--L 1	暗灰褐色粘層上面	暗灰褐色粘土層上面
L 8	29は椀状の	40は椀状の
L 7	28はやや外へ	42はやや外へ

はじめに

八尾市は生駒山地の麓から大阪平野にひろがっており、古代から人々の生活が営まれきた土地であります。そのために市域の大半が埋蔵文化財包蔵地であり、地中に遺跡が眠っていると思われます。しかし、ここ数年近郊都市の再開発が進められており、八尾市もまた例外ではありません。平成2年度の届出件数は600件以上にも達しようとしています。特に、古来より「高安千塚」の名称で知られてきた高安古墳群がある高安山から国道171号線周辺にかけての山麓部では開発事業が増加しており、本概要報告書にも高安山古墳群、大石古墳、水越遺跡、恩智遺跡等の調査が記載されています。その多くはこれらの開発事業に先立ち遺構の有無を確認するために行われたものですが、貴重な遺構・遺物が出土し、埋蔵文化財を保存することの困難さを痛感しております。本書が少しでも多くの方々の目にふれ、今後の埋蔵文化財の保存・活用の基礎資料として活用され、またより一層の埋蔵文化財に対する御理解をいただけるものとなれば幸いです。

最後になりましたが、これらの調査にあたり多大な御協力と御理解を頂きました関係各位に心から厚く御礼申し上げます。

平成3年3月

八尾市教育委員会
教育長 西谷信次

例　　言

1. 本書は、平成2年度に八尾市教育委員会が国庫補助事業として八尾市内各遺跡で実施した遺構確認調査の報告書である。
2. 発掘調査は八尾市教育委員会文化財室（室長　山中弘）が事業者に協力を求めて実施した。
3. 調査は八尾市教育委員会文化財室の米田敏幸、沼彌、吉田野乃が担当し調査にあたった。
4. 本書には、巻末に記載した調査一覧表のうち、特に成果のあった調査についてその概要を収録した。
5. 本書の作成にあたっては、沼、吉田、岡山清・((財)八尾市文化財調査研究会嘱託)が執筆を分担し、沼、吉田が編集を行なった。
6. 大石古墳の石室石材の鑑定については、市立刑部小学校教諭奥田尚氏にお願いした。また恩智遺跡の石器については橋本正幸氏のご教示を得た。記して謝意を表したい。

目 次

1. 久宝寺遺跡 (89-478) の調査	1
2. 久宝寺遺跡 (89-593) の調査	7
3. 東弓削遺跡 (90-002) の調査	11
4. 久宝寺遺跡 (89-342) の調査	13
5. 八尾寺内町遺跡 (90-38) の調査	15
6. 西部廃寺跡 (90-005) の調査	17
7. 水越遺跡 (89-559) の調査	19
8. 高安古墳群 (89-537) の調査	36
9. 高安古墳群 (90-96) の調査	38
10. 大石古墳 (90-221) の調査	40
11. 中田遺跡 (90-69) の調査	46
12. 中田遺跡 (89-540) の調査	49
13. 久宝寺遺跡 (90-246) の調査	51
14. 中田遺跡 (90-260) の調査	53
15. 恩智遺跡 (90-282) の調査	56
16. 東郷遺跡 (90-353) の調査	64
17. 中田遺跡 (90-330) の調査	66
18. 中田遺跡 (90-378) の調査	68
19. 高安古墳群 (90-381) の調査	70
20. 久宝寺遺跡 (90-397) の調査	82
21. 久宝寺遺跡 (90-398) の調査	84
22. 中田遺跡 (90-427) の調査	87
23. 渋川廃寺 (90-431) の調査	90
24. 中田遺跡 (90-412) の調査	93
25. 恩智遺跡 (90-457) の調査	96
26. 中田遺跡 (90-520) の調査	98

図版目次

図版1 久宝寺遺跡 (90-478)	第7グリット全景 土器出土状況
図版2 久宝寺遺跡 (90-593)	西側トレンチ 土器出土状況
図版3 八尾寺内遺跡 (90-38)	第1グリット 第2グリット
図版4 久宝寺遺跡 (89-342) 高安古墳群 (89-537)	第2グリット グリット
図版5 水越遺跡 (89-559)	第1次調査区 第1次調査区 S D02
図版6 水越遺跡 (89-559)	S D02出土土器 第2次調査区第3グリット
図版7 水越遺跡 (89-559)	第2次調査区第3グリット 第2次調査区 S P01
図版8 高安古墳群 (90-96)	土坑 土坑断面
図版9 大石古墳 (90-221)	石室出土状況 石室
図版10 大石古墳 (90-221) 中田遺跡 (89-540)	土器出土状況 第1グリット
図版11 恩智遺跡 (90-282)	第1グリット ピット 第2グリット 土坑
図版12 中田遺跡 (90-330) (90-378)	第2調査区炉状遺構
図版13 高安古墳群 (90-381)	日宝寺墓地3号墳全景 日宝寺墓地3号墳トレンチ
図版14 高安古墳群 (90-381)	日宝寺墓地4号墳トレンチ 日宝寺墓地4号墳出土石材

図版15	高安古墳群 (90-381)	口宝寺墓地 4号墳出土土器 - 1
図版16	久宝寺遺跡 (90-397) (90-398)	口宝寺墓地 4号墳出土土器 - 2 第1グリット 第1グリット
図版17	中田遺跡 (90-427) 渋川廃寺 (90-431)	土器出土状況
図版18	久宝寺遺跡 (89-478)	(89-593) 出土遺物
	中田遺跡 (90-260)	出土遺物
図版19	西郡廃寺 (90-005)	出土遺物
	久宝寺遺跡 (90-246)	出土遺物
図版20	水越遺跡 (89-559)	S D01出土遺物他
図版21	水越遺跡 (89-559)	出土遺物
図版22	水越遺跡 (89-559)	第1次調査区出土遺物
図版23	水越遺跡 (89-559)	第1次調査区、第2次調査区出土遺物
図版24	水越遺跡 (89-559)	第1次調査区出土遺物
図版25	水越遺跡 (89-559) 東郷遺跡 (90-353)	第1次調査区出土遺物 出土遺物
図版26	恩智遺跡 (90-282)	出土遺物
図版27	恩智遺跡 (90-282)	出土遺物
図版28	中田遺跡 (90-330) 高安古墳群 (90-381)	出土遺物 出土遺物
	恩智遺跡 (90-457)	出土遺物
図版29	久宝寺遺跡 (90-398) 中田遺跡 (90-427)	出土遺物 出土遺物
図版30	渋川廃寺 (90-431) 中田遺跡 (90-412)	出土遺物 出土遺物
図版31	恩智遺跡 (90-457)	出土遺物

1. 久宝寺遺跡 (89-478)

調査地 神武町17~23、38

調査期間 平成2年1月19~20日

1. 調査概要

本遺跡は、旧大和川の主流であった長瀬川流域に開かれた沖積地であり、繩文~鎌倉時代に至る複合遺跡である。本調査地の西方0.4km地点においては、当教員委員会が数次にわたって行なった倉庫建設に伴う遺構確認調査で布留式期に比定できる壺・壺・高坏等の土器を多量検出し、貴重な成果を得ている。

本調査は倉庫建設工事に伴い実施したものである。調査は、施行予定地において 2×2 mのグリットを12箇所設定し、GL-1.0~1.5m迄機械掘削した後、以下を機械と人力を併用し、GL-2.5m前後迄掘削を行なった。

調査地の基本層序は、第3回に示した通りで、盛土、旧耕土以下第1層暗青灰色~灰緑色粘質土、第2層褐色粘質土、第3層暗褐色~暗灰色粘土、第4層灰色シルト~砂層(湧水層)と大まかに分層すると4層に分層でき、遺物は第3層より最も多く出土した。出土遺物は弥生後



第1図 調査地周辺図 (1/13000)

期から庄内、布留と時期幅も広く多量で、非常に密に包含されており、第4層の灰色シルトが古墳時代前期の生活面と考えられる。又、各グリットの現地表から遺物包含層迄の掘削深度と遺物内容が時期的に一致することからみて、当該地では弥生後期から古墳時代前期迄にかけては、生活面がほとんど同一面であったことがうかがえる。

尚、各グリット土層模式図において、斜線部分は遺物量の最も多量に出土したところを示しており、レベル的には一定している。

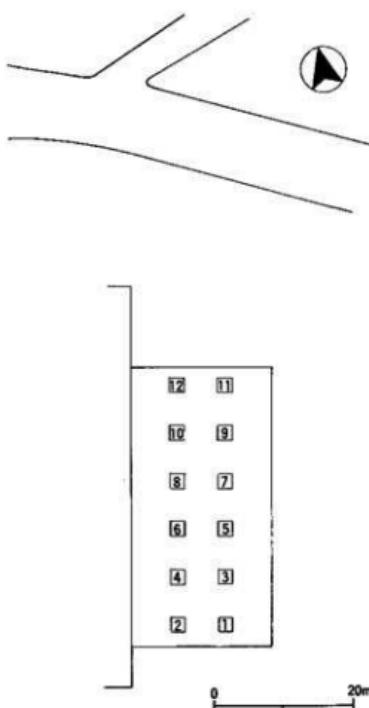
2. 出土遺物

今回の調査で出土した遺物は、弥生時代後期から古墳時代初頭にかけてのもので、特に庄内式期から布留式期に比定される壺の占める割合が非常に大きい。庄内壺は、生駒西麓産の胎土をもち、口縁部が鋭く屈曲し、端部はつまみあげる。しかし、そのほとんどが口縁部のみ残存するもので、体部において外面の細筋のタタキ、もしくは

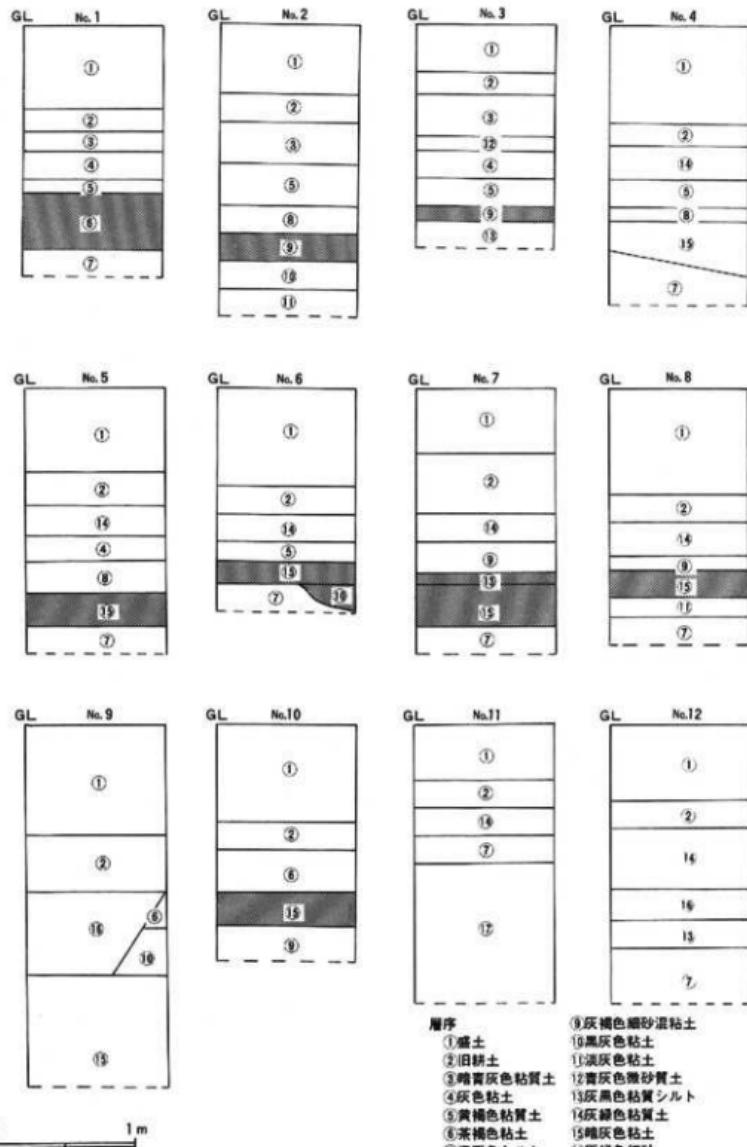
縦ハケ、内面ヘラケズリといった調整・技法が明晰にわかるものは少ない。一方、布留式壺では、口縁部は屈曲した後内湾して開き、端部が内側に肥厚するものとそのまま肥厚せずに丸く終わるものとに分類される。小型丸底土器は、丸底をもつと想われる半球形の体部より屈曲し、短く内湾気味に開く口縁部をもち内外面をヘラミガキ調整する。その他の器種では、壺・高杯・鉢等がある。

3.まとめ

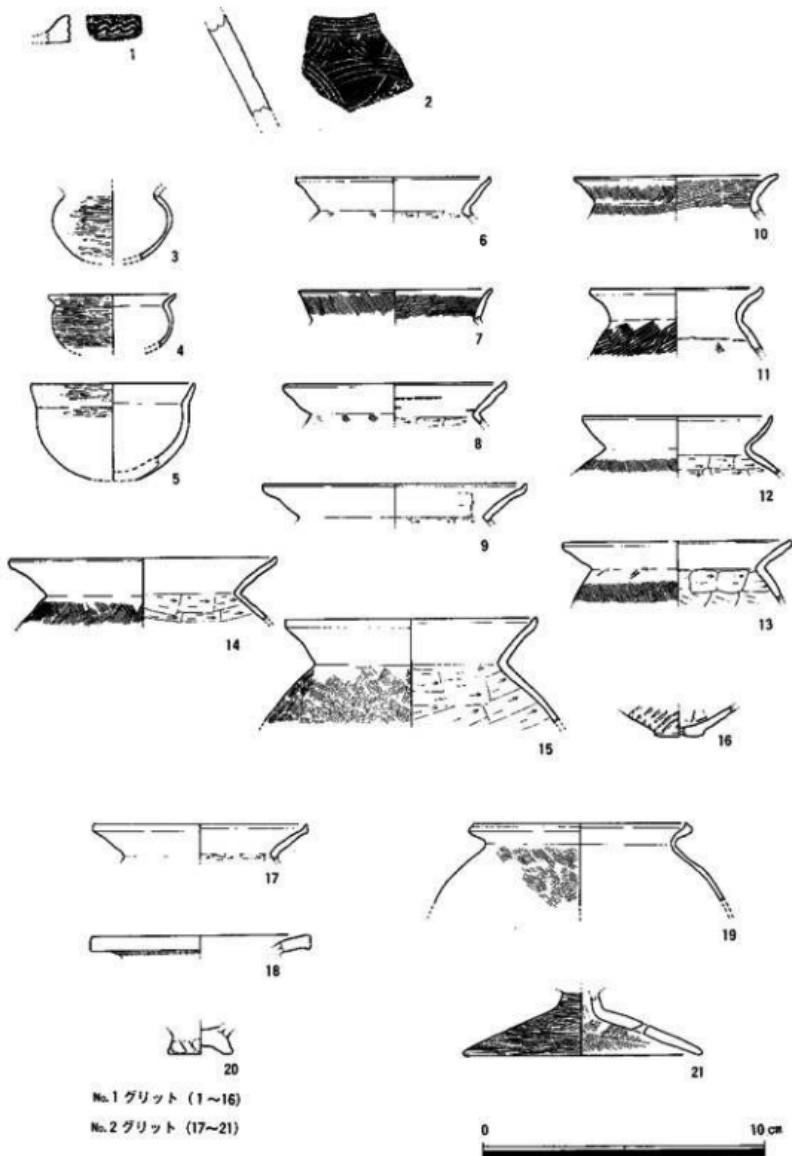
今回の調査地は、久宝寺遺跡のほぼ中心部にあたり、遺構こそ検出できなかったが当初予想していた通り、遺物は多量でしかも良好な古墳時代の包含層を確認することができた。神武町付近では、前記した通り、これまでの調査から弥生時代後期～古墳時代後期に至る（特に庄内式期から布留式期）遺構がかなり多く検出されている。今回のグリットによる遺構確認調査では、当該地における古墳時代集落域を把握する意味で貴重な資料が得られた。（岡田）



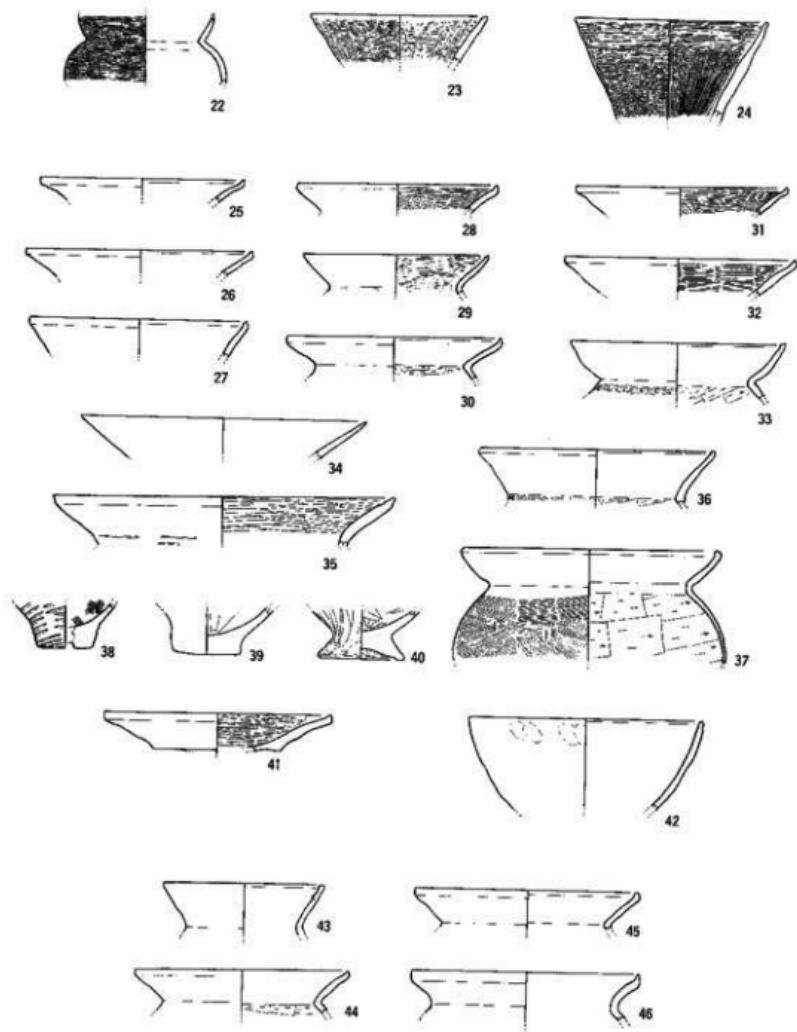
第2図 調査区設定図 (1/800)



第3図 各グリット土層模式図 (1/40)



第4図 出土遺物実測図 (1/4)

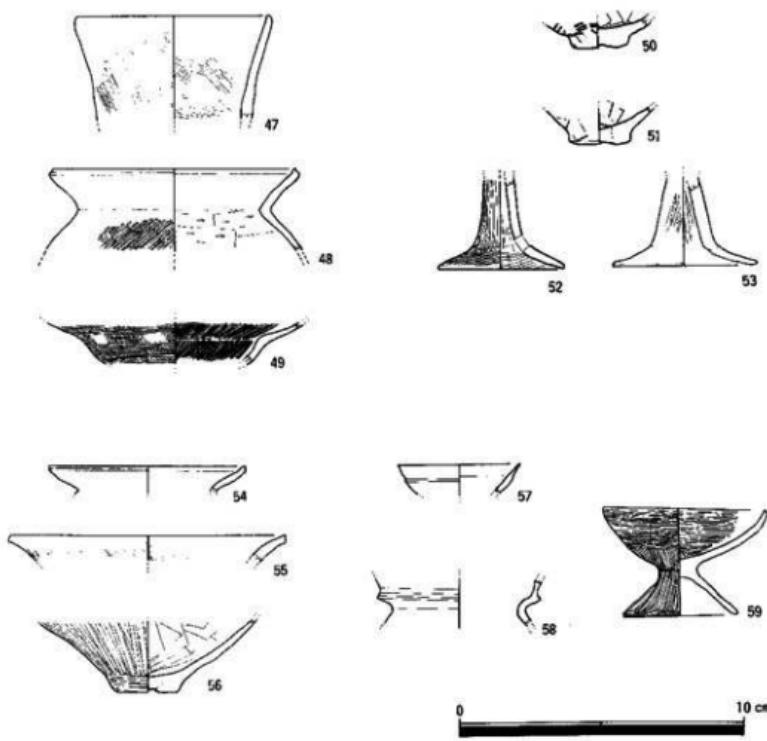


No.3 グリット (22~42)

No.5 グリット (43~46)

0 10 cm

第5図 出土遺物実測図Ⅱ (1/4)



No.6 グリット (47~49) 中央グリット (54~59)
 No.8 グリット (50)
 No.11 グリット (52, 53)

第6図 出土遺物実測図Ⅲ (1/4)

2. 久宝寺遺跡 (89-593) の調査

調査地 神武町17-23・38番地

調査期間 平成2年4月9日・4月16日～17日

1. 調査概要

本調査は、先の久宝寺遺跡（1-478）の調査に引き続き倉庫建設工事に伴って実施した遺構確認調査である。

今回の調査は、施行予定地において東側部分に $2 \times 3\text{ m}$ のグリットを5箇所設定し、GL-0.5m前後迄の盛土及び搅乱部分を掘削した後、以下1.0～1.5m迄を人力により掘削。又、西側部分は幅2.0m、長さ15mのトレンチを設定し、東側部分同様GL-0.5m迄を機械掘削した後、下層確認を含めて以下1.0mの砂層部分（湧水層）迄人力により精査を行なった。

・東側グリット（No1～No5）

基本層序は、第9図に示した通りであるが、それらの各層をまとめると、上層部は盛土・搅乱層を除去すると灰色～褐色の砂質土約0.5m、中層部は青灰色の粘質土～粘土、下層部は灰色のシルト～微砂（湧水層）となる。遺物は、No1、No2グリット共に第2層及びNo3グリッ

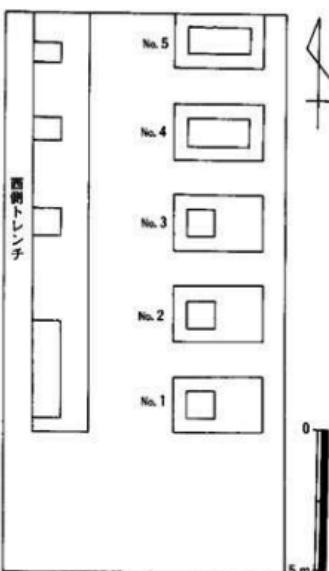


第7図 調査地周辺図 (1/13000)

ト第3層の各層から庄内～古墳時代前期に属するものであるが、殆どは細片が多く、図化できた遺物は口縁部片少量である。又、図化はしていないが、No.2グリットにおいてTP+7.4m前後のところでは上層と思われる遺構を1箇所確認した。形状は遺構の東側部分が調査区外に至る為不明であるが、検出したところの最も深い部分で0.5mを測り、埋土下層部分には植物遺体及び炭化物を含む。埋土内からの出土遺物からみて古墳時代前期に比定されるであろう。No.4及びNo.5グリットからは、出土遺物は明確な形状をとどめるものではなく、殆どが細片である。

・西側トレンチ

調査部分の断面図は第9図に示した通りで、全体的な基本層序は東側グリットと様相は変わらないが、TP+7.0m前後のところ



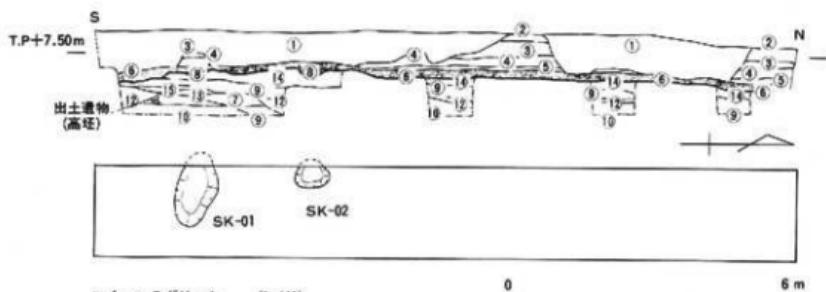
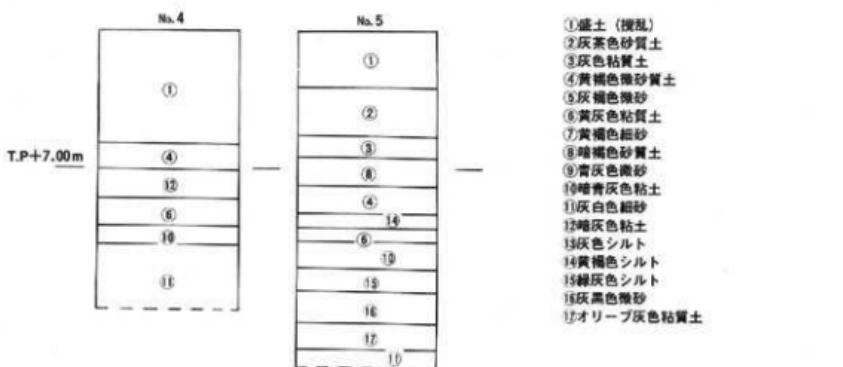
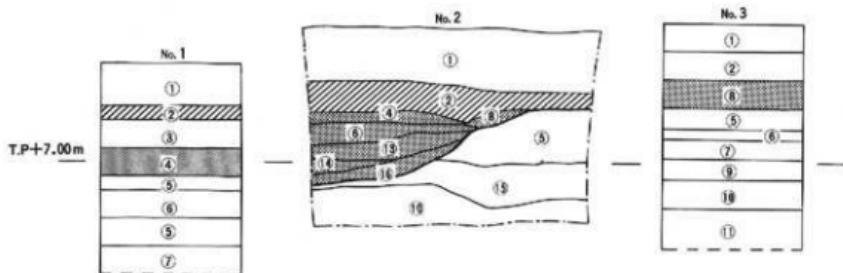
第8図 調査区段断面 (1/200)

で出土遺物から古墳時代中期頃に比定できる遺構面を確認した。この遺構面ではトレンチ南部で検出長径0.7m、深さ0.15mの楕円形を呈すると思われる土壙(SK-01)及び検出長径0.6m、深さ0.1mの楕円形を呈する土壙(SK-02)を検出した。2基とも西側は調査区外に至り、埋土内からは土師器の細片が少量出土したが、図化できるものはなかった。

2.まとめ

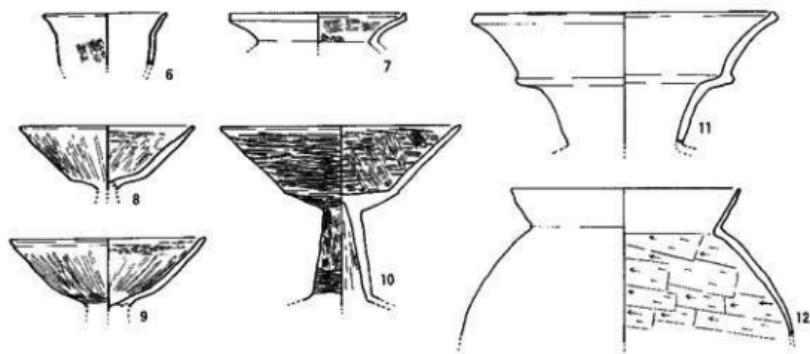
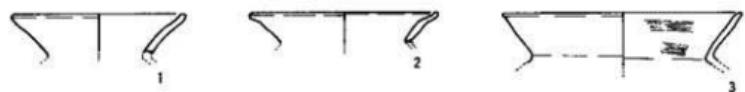
今回の調査では、予想していたよりも比較的現地表から浅いところで、古墳時代前期に比定できる遺物包含層及び遺構を確認することができた。集落跡こそ検出できなかったが、含まれる遺物量及び層厚から古墳時代以降においては比較的安定した土地であったことがうかがえる。又本調査地の西方向に位置する近畿自動車道に伴う調査では弥生時代から中世に至る迄の遺構や遺物が数多く検出されているが、本調査では古墳時代以前は下層確認の際かなり厚い砂の堆積と湧水の為、調査を進める事ができず、重機の上げ土によってのみ遺物を探集することしかできなかった。その結果、砂の中からは河川の流れ込みによるかなり摩耗している弥生後期頃に比定される細片が少量ではあるが確認する事ができた。

(岡田)



No. 1 ~ No. 5 グリット (1/40)
下図 トレンチ平・断面図 (1/120)

第9図 東側各グリッド土層模式図及び西側トレンチ平・断面図



東側グリット (1~5)

西侧トレンチ (6~12)



第10回 出土遺物実測図 (1/4)

3. 東弓削遺跡 (90-002) の調査

調査地 八尾木東1丁目94

調査期間 平成2年4月22日

1. 調査概要

共同住宅建築に伴い、遺構・遺物の有無を確認する目的で、事業計画地の南北に2m×2mの調査区を2箇所設定し、機械及び人力により掘削して断面観察を実施した。

地表から1.6m以下に中世の遺物包含層を確認したため、手掘りによって、3mまで掘削を実施したところ、2m～2.4mまでの間に古墳時代と奈良時代の土器を多数含む遺物包含層を確認した。さらにその下層には砂が0.7m以上堆積しており、この中にも弥生時代中期の壺の口縁部の破片1点が出土した。

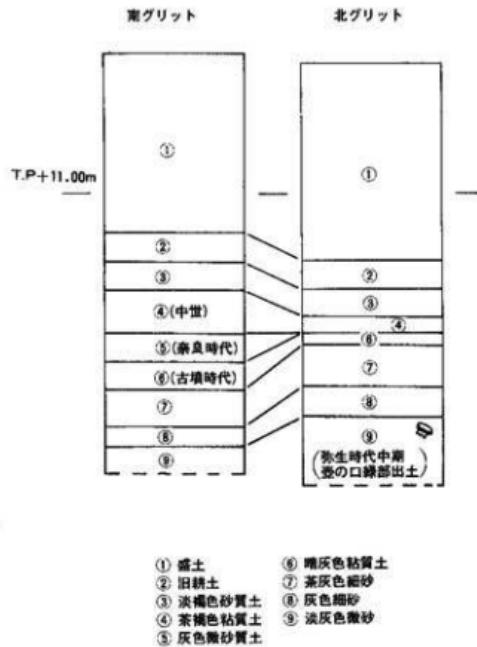
2.まとめ

当該地では、古代から中世に至る生活の痕跡を確認した。特に、東弓削遺跡は奈良時代の弓削の宮の跡と推定されており、ここで確認した奈良時代と古墳時代の遺物包含層は、これらの所在を知る手掛かりとなろう。

(岡田)



第11図 調査区周辺図 (1/13000)



第12図 基本層序模式図 (1/40)



第13図 出土遺物実測図 (1/4)

4. 久宝寺遺跡 (89-342) の調査

調査地 北龜井町3丁目55

調査期間 平成2年5月9日

1. 調査概要

本調査は鉄骨造4階建建物建設に伴って実施した遺構確認調査である。調査地の市側に第1調査区を北側に第2調査区をそれぞれ2m四方で設定した。第1調査区では重機により地表下約1.3mまで掘削した後、以下0.4mを人力で掘削した。この結果、水田耕作土の下、地表約1.0mから1.8mのところで中世の包含層である暗青灰色粘砂層、淡灰褐色粘砂層、灰色砂層を確認した。第2調査区では地表下1.4mまで重機で掘削したが、セメント混じりの盛土層が続いたためこれ以上の掘削をとりやめた。出土遺物は若干量である。淡灰褐色粘砂層からは瓦器小片・瓦質土器鉢片が、灰色砂層からは、平瓦片等に混じって、弥生土器小片、サヌカイト製石器鉋片が出土した。

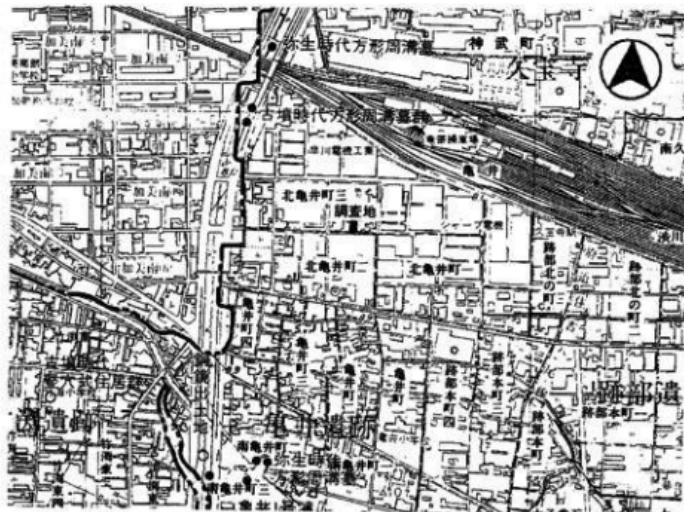
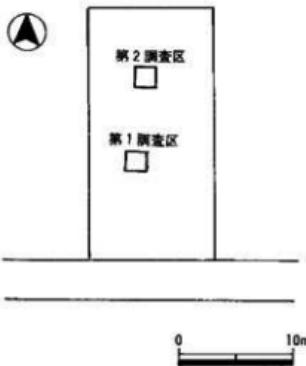
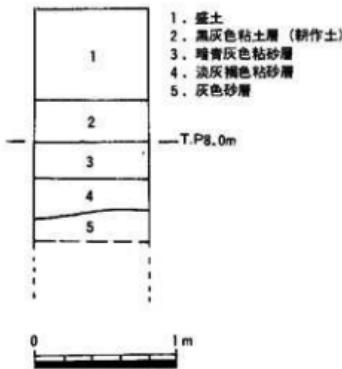


図14 図 調査地周辺図 (1/13000)



第15図 調査区設定図 (1/500)



第16図 第1調査区西壁断面図 (1/40)

2. まとめ

当調査地では中世の包含層を確認した。これらの包含層のうち暗青灰色粘砂層、淡灰褐色粘砂層は植物遺体等を多く含み、土器も細片であり、低温地性の土層堆積を示しているものと思われる。また、灰色砂層に混入していた弥生土器片、石器剝片は近接地に弥生時代の包含層の存在する可能性を示している。当調査地の南側の亀井町1丁目7番地においても文化財室による調査がおこなわれているが、ここでもTP 8.0m前後で中世の包含層が確認されており、当調査地周辺には良好な中世の包含層がひろがっているものと思われる。

(吉田)

5. 八尾寺内町遺跡（90-38）の調査

調査地 本町2丁目3-152

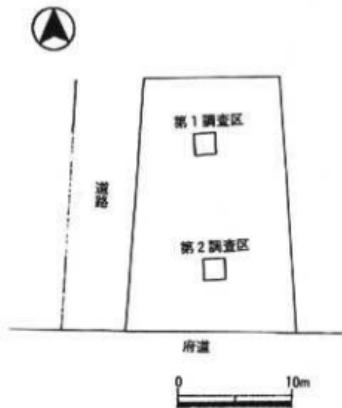
調査期間 平成2年5月22日

1. 調査概要

本調査は鉄骨4階建事務所建設に伴う遺構確認調査である。当調査地は近世以来、常光寺を中心に発展してきた八尾寺内町遺跡の南端に位置する。また、当調査地に近接し成法寺遺跡に属する光南町1丁目29番地では古墳時代の方形周溝墓群、掘立柱建物群等が確認されている。調査地の北に第1調査区を南に第2調査区をそれぞれ2m四方で設定した。第1調査区では地表下約1.3mまで重機掘削を行ない、以下人力と併用して地表下2.4mまで掘削を行なった。この結果、TP7.6m付近（地表下1.4m）で土器小片を若干含む灰色粘土層を確認した。またこれより下層は粘土と砂層の互層がつき、自然流路の堆積を示しているものと思われる。第2調査区でも同様に地表下1.2mまで重機掘削を行ない、以下人力と併用して地表下2.6mまで掘削を行なった。この結果、灰色粘土層の下のTP7.2mからTP7.7m付近（地表下1.3mから



第17図 調査地周辺図 (1/13000)

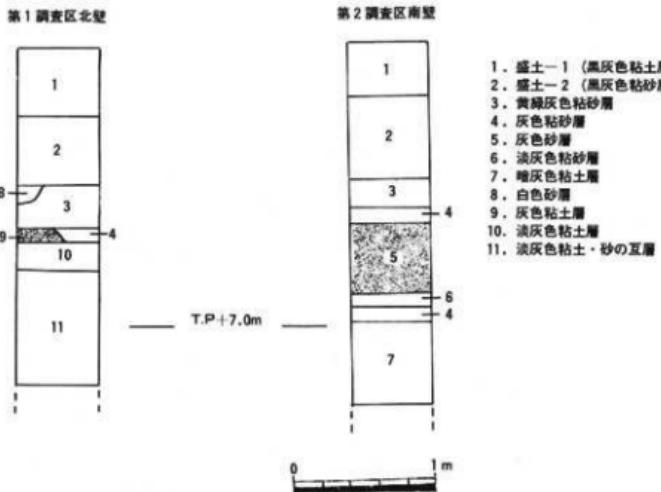


第18図 調査区設定図 (1/500)

1.8m)で土器小片を若干含む灰色砂層を確認した。この層は自然流路の埋土と思われる。またこれより下層のT P 7.0m以下は淡灰色粘砂層をはさんで暗灰色粘土が0.6m以上堆積する。

2.まとめ

光南町1丁目29番地の調査ではTP 6.8m付近で古墳時代の遺構面を確認しているが、当調査ではこれを確認できなかった。当調査地周辺は自然流路の道筋となっていたものと思われる。
(吉田)



第19図 土層断面柱状図 (1/40)

6. 西郡廃寺跡 (90-005) の調査

調査地 泉町2丁目1~7

調査期間 平成2年6月18日

1. 調査概要

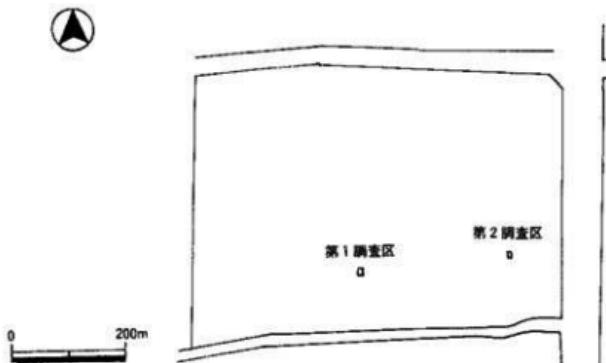
本調査は鉄骨平屋建工場建設に伴う遺構確認調査である。当調査地は錦織氏の氏寺と推定される西郡廃寺推定地にあたり、南接する西郡天神境内には塔心礎が残る。調査地の西に第1調査区を東に第2調査区をそれぞれ1m×2.5mで設定し、地表下1.0mまで重機で掘削して土層断面の観察を行なった。第1調査区では地表下0.4m付近で時期不明の溝状遺構を確認した。第2調査区では地表下0.7m付近で土師器片を含む褐灰白色粘砂層及び褐灰色粘砂層を、この下の地表下0.8m、TP4.3mでは弥生後期の土器を含む暗灰色粘土層を確認した。また、地表面で瓦器、土師器片を多く採集することができ、中世の包含層が浅いところにあるものと思われる。出土土器は若干量であった。暗灰色粘土層から出土した弥生時代後期の広口壺は、口縁端面に擬凹線状のラインがめぐり、生駒西麓系の胎土をもつ。(図版19)

2.まとめ

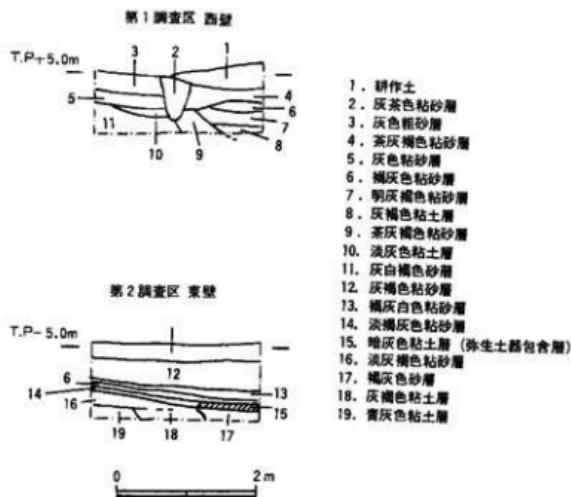
当調査地では当初西郡廃寺に関する遺構、遺物の存在を予想していたが、これらは全く確認できなかった。しかし、弥生時代後期の包含層が地表下0.8mという市域内では比較的浅いところにあることを確認できた。今後の調査に注意を要する。

(吉田)





第21図 調査区設定図 (1/1000)



第22図 土層断面図 (1/80)

7. 水越遺跡 (89-559) の調査

調査地 服部川470-2

調査期間 第1次調査 平成2年6月20日

第2次調査 平成2年7月6日・7日

1. はじめに

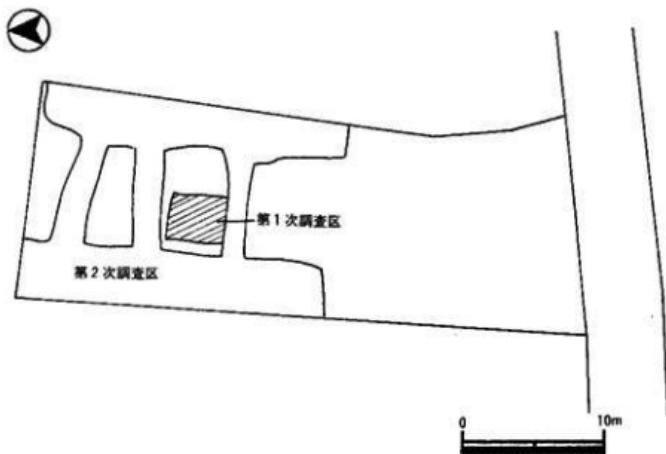
本調査は個人住宅建設に伴う遺構確認調査である。調査地は高安山西麓よりのびる扇状地に立地する水越遺跡の範囲に含まれる。水越遺跡は弥生時代から中世にいたる複合遺跡であり、特に府立清友高校建設時には弥生時代から古墳時代の方形周溝墓、壺棺などが確認されている。また、調査地の南方には奈良時代を中心とする瓦や礫石などの確認されている高麗守跡がある。

2. 調査経過

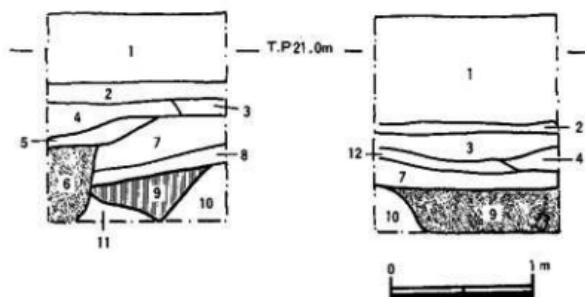
調査は1次と2次の2回行なった。1次調査は工事着工前の6月20日に行なった遺構確認調査である。この時、地表下0.9m~1.2mで弥生時代後期の遺構及び包含層を確認したため、原因者と協議を行ない、基礎を浅くすることで遺跡の保存をはかることとなった。第2次調査は工事着工時の7月6日、7日におこなった立会調査である。この時包含層の高さの高い部分では



第23図 調査地周辺図 (1/13000)



第24図 調査区設定図 (1/40)



第25図 第1次調査区土層断面図 (1/40)

基礎掘削孔の下面で包含層が露出する状態であった。このため工事と併行して遺構の検出及びその輪郭の記録と露出した遺物の採集を行なった。第1次調査では施工予定地の西側、建物建設部分の中央に2m四方の調査区を設定した。第2次調査では建物建設部分の大半を占める基礎の入る部分が対象となった。ここでは便宜上、基礎杭をいれるために掘削された東と西の部分をそれぞれ東トレンチ、西トレンチとし、地中梁をいれるためにこの間に掘削された部分を北から順に第1～第3グリットとする。

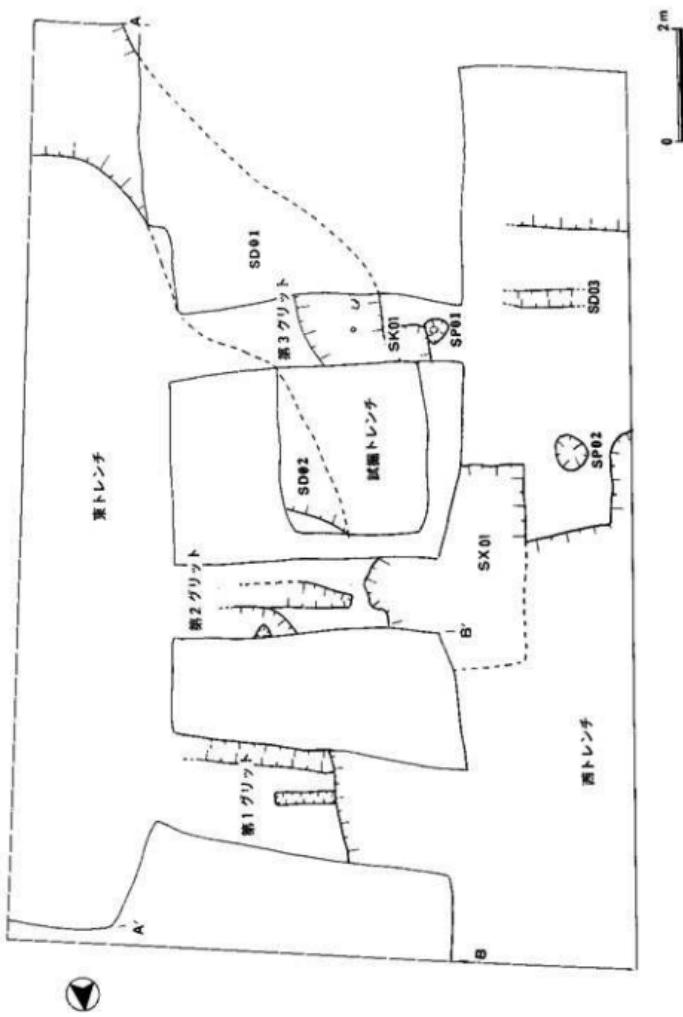
3. 基本層序

第1次調査では地表下0.5m～0.7mまで盛土であり、これより下は耕作土の下に弥生時代後期の包含層である明灰褐色粘砂層、暗灰褐色粘砂層、褐色混灰色粘砂層、灰白褐色粘砂層が堆積する。遺構は調査区が小面積であるため断面で確認した。地表下0.9m～1.0m、TP20.5m前後で暗灰褐色粘砂層をベースとして灰色砂層を埋土とする溝、SD01を、また地表下1.1m～1.2m、TP20.2m前後で暗灰色粘砂層、灰白褐色粘砂層をベースとして褐色混暗灰褐色粘砂層を埋土とする溝、SD02を確認した。第2次調査では地表下0.8m前後まで掘削が行なわれていた。層序はほとんど第1次調査と同じであるが、東トレンチの北側では2層目の明灰褐色粘砂層をきりこんで青緑灰色粘砂層があり、この下に3層目の暗灰褐色粘砂層が堆積する。また、西トレンチの北側ではSX01の埋土である灰褐色粘砂A層よりやや砂が少なく粘性の強い灰褐色粘砂B層が暗灰褐色粘砂層の上に残存堆積している状態であった。この部分を除く調査地全体に暗灰褐色粘砂層（3層目）が露出していたため、この上面を精査したところ、第1次調査で確認したSD01の続きと溝1条（SD03）、ピット2基（SP01、SP02）、土塙1基（SK01）、性格不明の遺構（SX01）の他、鉢溝3条などを確認した。

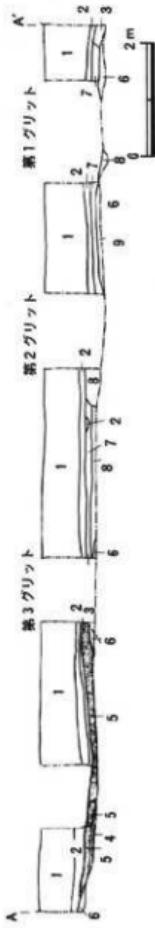
4. 検出遺構

それぞれの遺構について概述する。SD01は西トレンチでは灰褐色粘砂B層が覆っているため検出できなかった。検出長約11m、検出部分の上端の幅は約2.5mを測る。深さは埋土の掘り下げを行っていないため不明である。SD01のベースとなる暗灰褐色粘砂層の高さが南東が高く北西が低いことから、南東から流れる自然流路と考えられる。SD01では主に埋土上面であるが、弥生後期末を中心とする土器がコンテナ半箱程度出土した。第3グリットではSD01の西肩近くの埋土上面で弥生時代後期末の壺の完形品と壺の底部が正位の状態で出土した。これらの壺の周辺の埋土には炭、灰片が多く混入している。掘り方等は確認できなかった。SD02は第1次調査の断面で確認した溝である。上端の幅は0.9mから1.3m以上を測り、深さは最も深い部分で0.4mを測る。溝の底付近から弥生時代後期末の壺の完形品等の土器が出上した。SD03は西トレンチの南側で確認した検出長1.1m、最大幅0.26mの東西方向の溝であり暗灰色粘砂層を埋土とする。埋土の掘り下げは行っていないため遺物は確認していない。SP01は

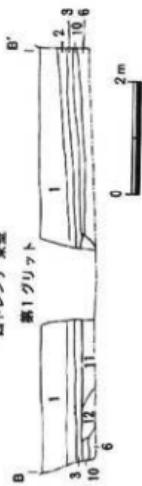
第26図 第2次調査区地形平面図(1/100)



東トレーンチ 西壁



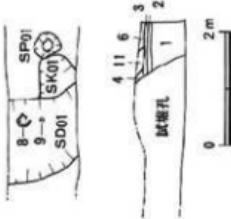
西トレーンチ 東壁



第3グリット透析平面及び土層断面



- 1. 砂土
- 2. 新作土
- 3. 明灰褐色粘砂質
- 4. 淡灰色粘砂質 | SD01埋土
- 5. 淡灰色粘砂質
- 6. 暗灰褐色粘少砂質
- 7. 青褐色粘少砂質
- 8. 暗灰色粘砂質
- 9. 反茶褐色粘砂質
- 10. 暗褐色粘砂質 B層
- 11. 暗褐色粘砂 A層 (SX01埋土)
- 12. 暗褐色砂質



第27図 第2次調査区 土層断面図 (1/100)

第3グリット内の溝 S D01の南側で確認した最大径0.48mの不整円形のピットである。埋土は S D03と同様の暗灰色粘砂層である。弥生時代後期の甕の底部が遺存しており、本来は甕が正位の状態で埋められていたものと思われる。S D02は西トレントの中央部で確認した最大径0.6mの不整円形のピットである。これも S D03、S P01と同様、暗灰色粘砂層を埋土とする。埋土の掘り下げは行っておらず、遺物は確認していない。S K01は第3グリット内で確認した土壤であり、暗灰褐色粘砂層をベースとし灰褐色粘砂層を埋土とする。東側を S D01によって切られているため、全体の形状は不明であるが、北部部分が直角に曲がることから隅丸方形を呈する土壤と思われる。S X01は第2グリット及び西トレントで確認した隅丸方形を呈する土壤である。S K01と同様、暗灰褐色粘砂層をベースとし、灰褐色粘砂層を埋土とする。最大長3.7m、深さ約0.2mを測る。この他、龜溝状遺構を3条確認した。幅0.2m~0.4mの東西方向の溝で暗灰褐色粘砂層をベースとし、灰茶褐色粘砂層を埋土とする。この他、暗灰褐色粘砂層をベースとし、灰褐色粘砂層を埋土とする直線的な落ち込み状の遺構があり、土壤の肩の一部となる可能性もあるが、性格は不明である。

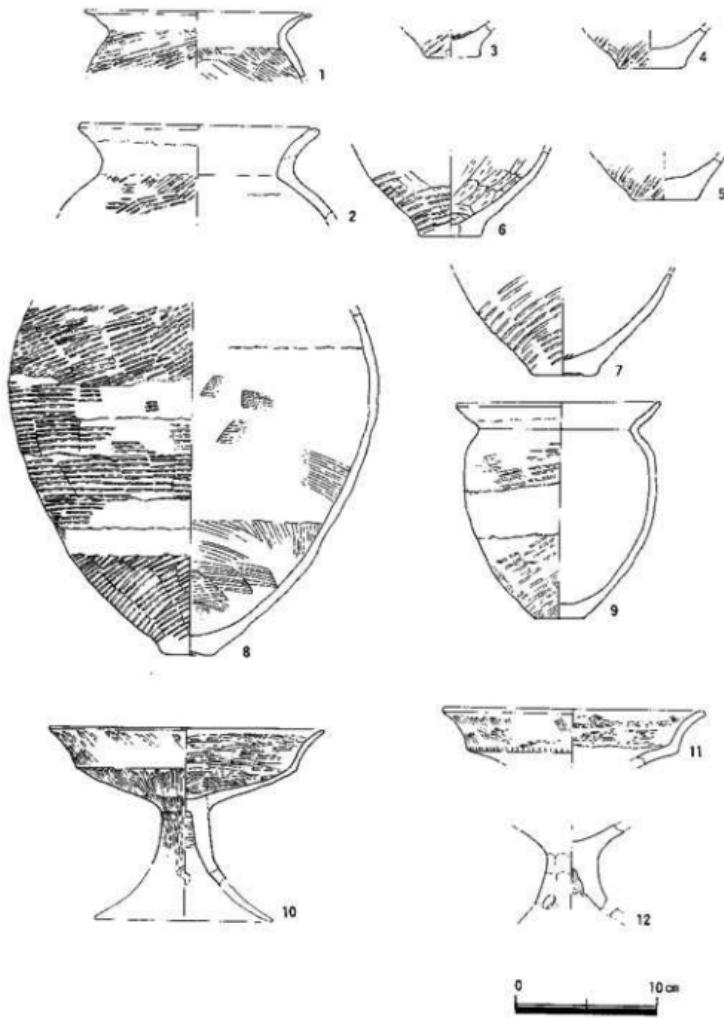
5. 出土遺物

本調査で出土した土器はコンテナ数にして約4箱である。うちわけは第1次調査出土のそれが最も多く、次に第2次調査での暗灰褐色粘砂層出土土器、S D01出土土器、S D02出土土器の順になる。第1次調査出土土器は、ほとんど層位毎のとりあげを行ない得なかつたが、大半が暗灰褐色粘砂層と S D02付近から出土したものである。遺構を伴う土器は S D01、S D02、S P01の出土のそれである。S D01から出土した土器は先にもふれたように埋土の最上層から出土したものである。また、S D01の第3グリット検出部分で甕が2個体ならんで正位で埋まっているのを確認したが、これは遺構として捉えることができる。このように良好な一括資料といえるものはないが、弥生時代後期末という限定された期間の土器が比較的高い密度で出土している。また、S P01内の甕や S D01の2つの甕のように特異な出土状態のものもあり注目される。

以下、各遺構内の土器、包含層内の土器の順に概述する。

[S D01出土土器] 第28図、図版20

コンテナ半箱ほど出土した。器種は甕、高杯である。甕の形態、法量はばらつきが激しい。8・9は埋土の上面で半ば埋もれた状態で2つならんで正位で出土したのである。8は北側に置かれていた（A地点）甕で体部から下の部分を確認した。口縁部から頸部は基礎掘削の際に尖われたようである。大型で長胴ぎみの体部をもつ。9は南側に置かれた（B地点）小型の甕であり、ほぼ筒形である。8と9は最大径が体部の中位より上にあること、器壁が全体にやや薄手であることなどが共通している。6は甕底部で内面は下から上にむかうハラケズリを行な



第28圖 SD01出土遺物實測圖 (1/4)

っている。10・11は高坏で坏部内外面にヘラミガキを行なう。口縁の外反度は比較的弱く、口縁の高さの坏部全体の高さに対する割合は10で1/2程度であり、口縁の長さも短い。

〔S D02出土遺物〕第29図-13、図版20

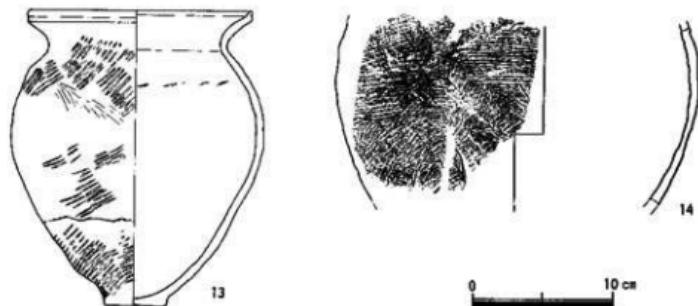
S D02から出土した土器として確実におさえられるのは13の壺である。S D02とその周辺から出土した土器は第31図に示している。13はS D02の底付近で確認した完形に近い壺であり、口縁を上にしてやや南に傾いた状態で出土した。最大径を体部中位より上にもつ壺であり、口縁はゆるやかに外反し、口端部は上方にややつまみあげて外に向をつくる。器壁は全体に比較的薄手である。内外面にススが厚く付着し、体部内面の下方には炭化物も付着していた。

〔S P01出土遺物〕第29図、14、図版21

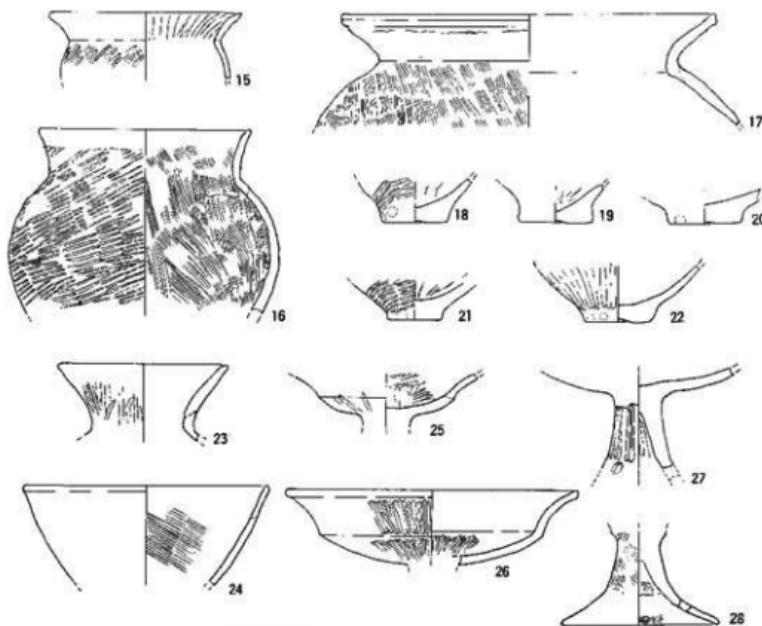
ピット内に壺の体部下半が正位で遺存していた。器壁は比較的薄い。外面はタタキ、内面にはナデ調整を行う。

〔暗灰褐色粘砂層出土土器〕第30図、図版22、23

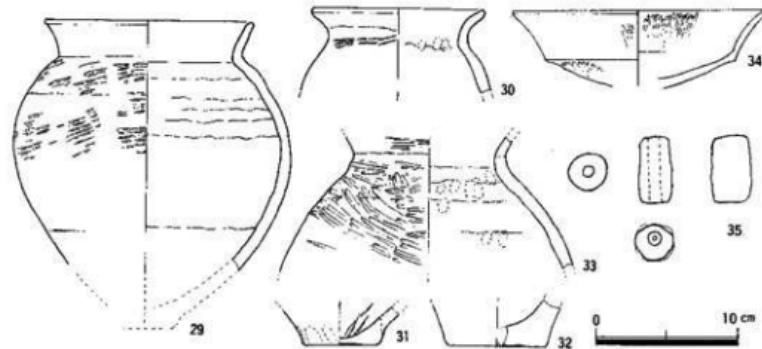
第1次調査と第2次調査の出土土器を併せて報告する。コンテナ約1箱の土器が出土した。器種は壺、広口壺、短頸壺、鉢、高坏である。この他、管状土錘が1点出土した。15は腹部径より口径のうわまわる壺で、口縁内面に縱方向の細いヘラ状刻線をめぐらす。17は口縁の残存状態が悪いため確実ではないが、口径26.6cmをはかる大型の壺である。口縁は屈曲して外上方にたちあがる。口端部は外側に面をつくり浅い沈線が1条はいる。外面に縱方向のハケメ調整を行なう。29は口縁から体部の遺存する壺で口縁部は屈曲し外上方に直線的にたちあがる。器壁は厚く、色調は暗茶褐色で非常に粗い胎土をもつ。22は壺の底部でややあげ底気味になる。外面に縱方向のヘラミガキを行なう。33は腹部のやや張る広口短頸壺になるようである。24は鉢で口縁部から直線的に体部へ移行する。口端部はやや肥厚ぎみに丸くおさまる。35は第1グ



第29図 S D02・S P01出土遺物実測図 (1/4)



第1次調查区



第2次調查区

第30圖 第1次・第2次調查区・增灰褐色粘砂層出土遺物実測図 (1/4)

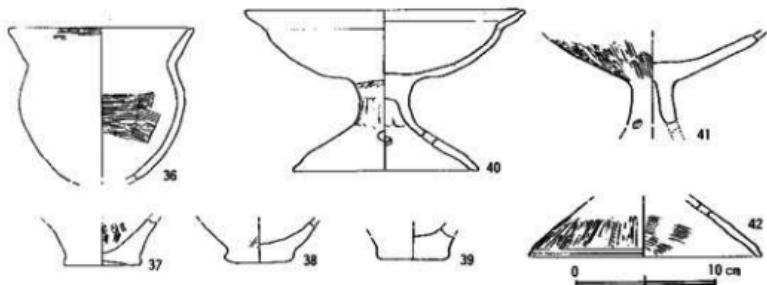
リットの暗灰褐色粘層上面で確認した管状土錐である。26、34は高坏で内外面に縱方向にヘラミガキを行なう。口縁の外反度は比較的弱く、口縁部の坏部全体に対する高さの割合は26で1／2程度、34で3／5程度である。

〔S D02、褐色混灰色粘砂層付近出土土器〕第31図、図版23

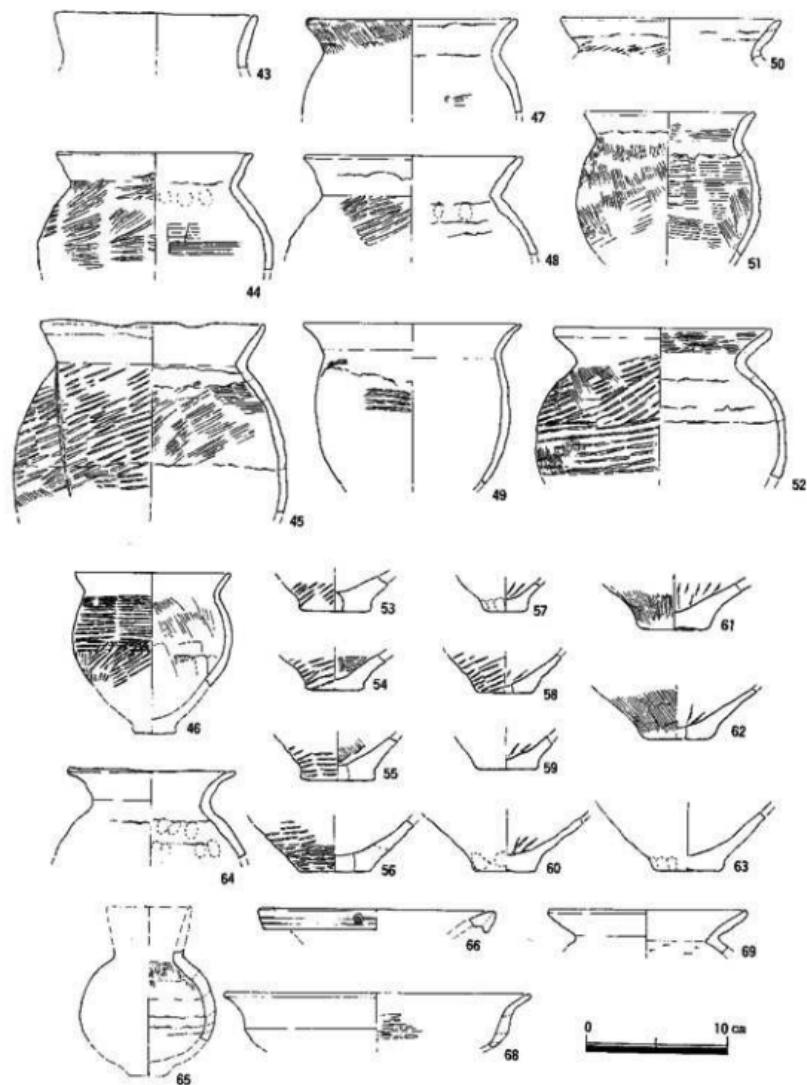
S D02付近とその上に堆積する褐色混灰色粘砂層から出土した土器である。壺、高坏がある。40、42は本調査出土の高坏のなかでは他にない器形である。29は碗状の坏下部に外に大きく開く短い口縁がつく。坏部と脚中部の間に明瞭な接合痕が残る。28はやや外へはりだしきみの脚台部で脚端部に明瞭な沈線を1条配する。

〔第1次調査区出土遺物〕第32図、図版24、25

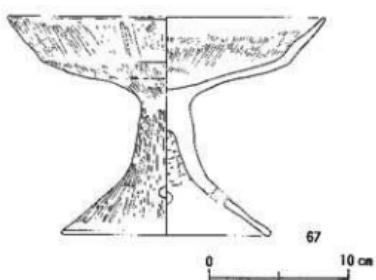
層位的とりあげを行ない得なかつたが、主に暗灰褐色粘砂層とS D02周辺出土土器である。コンテナにして2箱程出土した。器種は壺、広口短頸壺、広口盃、小型直口壺、高坏がある。また、庄内式土器の壺(69)が1点出土している。上層からの混入と思われる。壺は口縁がゆるやかに外上方に開き、なで肩でゆるやかに腹部へつづくもの(49・46・47・51)と口縁が屈曲して外上方にたちあがるもの(45・48)と口縁が強く外反し腹部の張るもの(52)等がある。47は外面向にタテハケ調整のちナデをおこなっている。51は体部外面はタテハケ、口縁部と体部の内面はヨコハケを行なう。他はすべて体部外面にタテキ、内面にハケ、ないしナデを行なっている。45は外面に頸部から腹部にかけて縱方向の浅いヘラによる刻線がはいる。61は壺の底部で外面に縱方向のヘラミガキを行なっている。64は広口短頸壺、65は体部のみの破片であるが小型の直口盃になるものと思われる。66は口縁部の小片であるが、口端部を下方に拡張して面をつくり、沈線2条と円形浮文を配して加飾する広口壺である。68の高坏は外面全体に丁寧なヘラミガキを行なう。口縁部はほとんど外反せず、外上方に伸びる。口縁部の坏部全体に対する高さの割合は1／2強である。



第31図 第1次調査区 S D02付近他出土遺物 (1/4)



第32图 第1次调查区出土遗物实测图—1 (1/4)



第33図 第1調査区出土遺物実測図-2 (1/4)

層をはさんで暗灰褐色粘砂層が堆積し、この上面に自然流路S D01が流れるようになった。この流路は周辺に住む人々と密接なつながりをもっており、流路の堰上に壠を掘えたり、岸辺に小穴を掘り、壠を掘えるなどの水辺の祭祀が行われたのではないかと思われる。本調査地周辺は弥生時代後期の一時期、小型の自然流路が何本か流れこむ谷状の地形であったと思われ、流路が何度も氾濫をくりかえして生活面を形成していたのではないかと思われる。近隣に当期の集落が存在するものと思われ、今後の調査が期待される。

(吉田)

以上各遺構および包含層出土の土器についてみてきた。これらは壠、高壙等の形態の特徴から弥生式土器畿内V様式末に位置付け得る。河内の土器型式編年では上六万寺式を中心一部北島池式を含むものであろう。

6.まとめ

本調査地では弥生後期末でも上六万寺式期という短い期間に少なくとも2つの生活面が形成されていたことがわかった。すなわち、S D02検出面とS D01検出面である。S D02

が埋まつたあと、この上には褐色混灰色粘砂

出土遺物観察表

SD O 1 (第29回、図版20)

番号	部位	部位	法則(cm)	規則	形態・模様の特徴	色調	地成	胎土	焼成本	備考
1	毫	口縁部	16.1	4.5	①口縁はゆるやかに外反し口縁部はつまみだす。肩部はなで前である。 ②外面-タタキ、内面-ハケメ。	淡青灰色	やや緑	青褐色-黄(多)、チャ(多)、金(ごく少)	SD O 1 1.4	
2	毫	口縁部	16.7	6.2	①口縁部は底面と外上方へたらあがる。外-明茶褐色、内-茶灰色 ②外面-タタキ、内面-ナガ。	普通	普通	青褐色-灰(多)、チャ(普通)、白(多)、金(多)	SD O 1 1.2	
3	毫	底部	3.4	2.0	③外面-タタキ、内面-ハケメ。	青茶色	やや緑	やや褐-黄(多)、チャ(やや少)、白(やや少)、金(やや少)	底接 1/2	
4	毫									
5	毫	底部	4.7	2.5	④外面-タタキ、内面-ナガ。	青茶色	青緑	やや褐-長(普通)、チャ(普通)、白(普通)	底接 1/1	
6	毫	底部	4.2	6.2	⑤外面-タタキ、内面-ハラケズリ。	茶色	やや緑	やや褐-長(普通)、チャ(少)、白(少)、金(多)、クサ(少)	底接 1/2	
7	毫	底部	4.2	7.5	⑥外面-タタキ、内面-ナガ。	青褐色-暗茶色	やや緑	青褐色-紅(多)、チャ(多)、白(多)、金(少)、石(少)、クサ(少)	底接 1/1	
8	毫	全体-底部	3.4	24.8	⑦全体の半径によらやかに最大径をもつ。 ⑧外面-タタキ、内面-ハケメ。	青茶色-茶褐色	やや緑	やや褐-長(普通)、白(少)、石(少)	底接 SD O 1 3/4	S D O 1 山、A 底接
9	毫	ほぼ完全	口縫 14.25	15.45	⑨無人径は全体の半径より上にある。 ⑩口縫は底面と外上方へたらあがる。 ⑪外面-タタキ、内面-ナガ。	青茶褐色	やや緑	長(ごく少)、チャ(少)、白(少)、金(やや多)、クサ(ごく少)	SD O 1 9、10	S D O 9 11面、B 底接
10	毫	杯口-脚部	19.6	10.6	⑫脚部-中段で別個な接をして口縫はゆるやかに外反。 ⑬内外面-ハラミガキ。 脚部-底面-ハラケズリ。	淡青灰色	やや緑	青褐色-長(多)、チャ(多)、白(ごく少)	底接 1/4	
11	毫	全体	18.4	3.9	⑭脚部-側壁をなし口縫はやや反する。 ⑮内外面-ハラミガキ。	青茶褐色	普通	短-長(多)、チャ(普通)、白(少)	底接 1/4	底接に サギジ
12	毫	脚部付近		5.4	⑯外面-ナガ。内面-シボリメ。	青茶色	灰	やや褐-長(普通)、チャ(多)、白(少)、金(少)、角(少)、石(少)	1/2	

SD O 2 (第29回、図版20)

13	毫	ほぼ完 成	15.8	21.1	①口縫部は二方につまみあげ、内面-白をくる。 ②底面は半径は中位より若干上にある。 ③外面-タタキ、内面-ナガ。	青茶褐色	やや緑	若-長(多)、チャ(多)、白(少)	9/10	特別表示 又付着。
----	---	----------	------	------	--	------	-----	-------------------	------	--------------

SP O 1 (第29回、図版20)

14	毫	底部	36.0	12.8	・外面-タタキ。内面-ナガ。	淡青灰色	普通	やや褐-長(普通)、チャ(普通)、白(少)	底接 2/3	特殊にス タッカ。
----	---	----	------	------	----------------	------	----	-----------------------	-----------	--------------

1次、2次焼成品、解説褐色胎形容 (第30回、図版21-23)

15	毫	口縫	13.5	4.7	①口縫はゆるやかに外反し口縫はなで前である。 ②外面-タタキ。内面-ナガ。	淡青褐色	普通	やや褐-長(少)、チャ(やや少)、白(やや少)、金(少)、クサ(多)	SD O 1 1/6	1146裏内 面にヘラ 糊跡あり
16	毫	口縫- 全体	15.0	13.8	③口縫部はやや凹り、口縫部は上方近くにゆるやかに立ちあがる。 ④外面-タタキ。内面-ハケメ。	青褐色	普通	短-長(多)、チャ(多)、白(多)、金(少)、クサ(ごく少)	SD O 1 1/3	表面にス タッカ。
17	毫	口縫- 底部	26.6	7.9	⑤口縫は底曲と外方に立ちあがる。 ⑥口縫部は底をなし圓い沈痕がめぐる。 ⑦外面-ハケメ。内面-ナガ。	淡褐色	やや緑	短-長(普通)、白(少)、金(普通)、クサ(少)	SD O 1 1/12	

番号	部材	部位	法量(cm) 径	法量(cm) 現高	毛削・調整の特徴	色調	地成	胎土	残存率	備考
18	坐	座基	4.4	2.9	①外面一タキ。内面一板状工具によるナダ。	黒褐色	普通	相一長(やや少)、角(普通)、金(多)	底径 1/1	外面ス トック。
19	坐	座部	5.2	2.7	②外面一ナダ。内面一板状工具によるナダ。	淡褐色	やや硬	非常に相一長(普通)、ナカ(多)、金(普通)	底径 1/1	内面にス トック。
20	腰	底部	4.7	2.4	③内外面一ナダ。	浅黃褐色	硬	非常に相一長(少)、ナカ(やや少)、角(少)、金(少)、クサリ擦(少)	底径 7/8	
21	腰	座部	3.9	2.8	④外面一タキ。内面一板状工具によるナダ。	淡褐色	やや硬	相一長(多)、金(普通)、角(少)	底径 1/2	
22	腰	底部	4.6	3.7	⑤外面一ヘラミガキ。内面一ナダ。	淡褐色	硬	やや相一長(多)、チャ(やや少)、金(普通)、クサ(ごく少)	底径 1/1	外面上 部ある。
23	広口 直	口縁部	12.0	5.5	⑥外面一ヘラミガキ。内面一板方向ナ ダ。	板褐色	普通	非常に相一長(少)、チャ(非常に多)	口径 1/8	
24	脚	口縁部 一全体	17.2	7.2	西面一ハケメ。	茶色	やや軟	やや相一長(多)、チャ(多)、石(少)、金(非 常に多)、クサ(少)	底径 1/9	
25	高杯	杯部		3.75	⑦内外面一ヘラミガキ。	褐色	やや硬	やや相一長(非常に多)、ナカ(少)、角(普通)、金(やや多)、石(少)、ク サ(ごく少)	底径 1/1	
26	高杯	口縁部	20.6	5.35	⑧脚部の中位よりやや下で明確な腰を なし、口縁は外反する。⑨内外面一ヘ ラミガキ。	淡藍褐色	やや硬	非常に相一長(多)、ナカ(少)、角(普通)、金(少)	口径 1/7	
27	高杯	杯部 一脚部		6.7	⑩外面一ヘラミガキ。内面一シボリメ。	淡茶褐色	やや軟	相一長(普通)、石(普通)、ナカ(少)、金(少)、クサ(少)	口径 1/9	
28	高杯	脚部	11.0	6.8	⑪腰筋は脚部から比較的大きく並がる 脚部は丸くおさめる。⑫内外面ハケ メ。	淡明褐色	普通	普通一チャ(少)、石(ごく少)、金(ごく少)、クサ(多)	脚部内 側 1/7	通孔あり
29	腰	口縁部 一全体	14.7	17.8	⑬最大径は脚部の中位より上にある。 脚部は垂直して外上方に向たもあがる。 ⑭外面一タキのちナダ。内面ナダ。	暗茶褐色	やや軟	やや相一長(多)、チャ(やや多)、角(普通)、石(少)、金(多)、クサ(少)	口径 3/4	第3グリ ット出土
30	短脚 直	口縁部 一肩部	12.0	5.8	⑮口縁部はゆるやかに外反する。脚部 はなで肩である。⑯外面一タキ。内 面ナダ。脚部付近でユビオサエ。	暗茶褐色	やや硬	非常に相一長(普通)、チャ(やや少)、石(普通)、角(多)、金(少)	底径 1/2	
31	腰	底部	5.2	2.3	⑰外面一ユビオサエ。内面一板状工具 によるナダ。	暗茶褐色	普通	やや相一長(普通)、チャ(少)、金(普通)、角(少)	底径 1/3	・第1グ リット、 外面上 部にス トック。
32	腰	底部	6.8	2.7	⑱内外面一ナダ。	暗茶褐色	普通	相一長(やや多)、チャ(やや少)、角(少)、金(多)、クサ(ごく少)	底径 1/1	第1グリ ット出土
33	広口 近脚 直	脚部 一肩部	11.6	9.5	⑲脚部はあまり尖らずにゆるやかに腹 筋へつづく。⑳外面一ヘラミガキ。内 面一ナダおよびユビオサエ。	茶色	普通	やや相一長(多)、チャ(やや多)、石(多)、金(普通)、角(普通)、ク サ(少)		第1グリ ット出土
34	高杯	杯部	17.8	5.5	㉑内外面一ヘラミガキ。	淡褐色	普通	非常に相一長(多)、ナカ(多)、角(多)、金(少)、クサ(少)	口径 1/4	
35	土器	完形	最大径 2.3	4.8	㉒中央部分が若干縮らみぎみとなる。 縮縫は小窓円形を呈す。㉓ナゲ耳より ユビオサエ。	淡茶褐色	普通	やや硬、反(普通)、チャ(普通)、金(少)、ク サ(ごく少)	完形	第1グリ ット、暗 褐色粘 物質上部

第1次調査区 橙色斑状地帯後部、SD 0.2付近 (第31回、深さ23)

番号	基部	部位	社量(cm) 値	基部の特徴	色調	成因	底土	既存率	推考
36	壳	口縫部 ～腹部	13.0	①口縫部が底面をうわまわる。口縫部はゆるやかに外方にたちあがり、前脚はなで肩である。②口縫部外側一辺にハケ。腹側内面一辺コハケ。	淡褐色	やや軟	普通一辺(多)、チャ(少)、金(硬)	口縫 1/6	
37	壳	底部	7.4	③あげ底になる。④内面ハケメ。	褐色	硬	堆一辺(少)、チャ(多)、金(少)、角(少)	底層 1/1	内面にス ズ有り 外壁に凹 字あり
38	壳	底部	3.5	⑤外面一タキ。内面一ナギ。	暗褐色	普通	やや底、金(少)、チャ(多)、金(ごく少)、角(少)、ウサ(ごく少)	底層 1/1	
39	壳	底部	4.4	⑥口縫部一ナギ。	淡褐色	普通	やや堆一辺(やや少)、チャ(多)、金(普通)、ウサ(普通)、角(少)、金(普通)	底層 1/5	
40	高杯	口縫部 ～腰部	19.8	⑦口縫部に浅い横紋を有し、口縫部ゆるやかに外方に開く。脚部はやや外方に傾きみがみになり前脚、脚部は尖りぎみにおわる。⑧口縫部一ナギ。脚部外側一ハケミガタ。	淡茶褐色	やや軟	普通一辺(普通)、チャ(少)、金(少)、角(少)	肝部 1/5 脚部 1/3	矢張りつ あり。
41	高杯	杯底～ 脚部	6.2	⑨背部外側一ヘリミガタ。杯基内面一ナギ。脚部外側内面一ナギ。	茶褐色	普通	やや堆一辺(普通)、チャ(少)、石(少)、金(多)、ウサ(少)	底層 1/2	
42	高杯	脚部計	16.4	⑩脚部計は比較的大きく開く。⑪外側一ヘリミガタ。内面ハケメ。	茶色	普通	堆一辺(少)、チャ(やや少)、角(少)、金(少)、石(少)、ウサ(ごく少)	底層 1/3	

第1次調査区出土物 (第33回、同深24~25)

43	壳	口縫部	14.4	3.9	⑫口縫部は上方近くにたちあがる。	明褐色	普通	堆一辺(多)、チャ(少)、金(やや少)、長(少)、石(少)	11往 1/3
44	壳	口縫部 ～腹部	34.8	8.5	⑬口縫部はゆるやかに外方にたちあがる。口縫部はやや外へつまみだし、ぎみに見える。⑭外面一タキ。腹側内面一ユビミサエ。腹側山面一コハケ。	暗褐色	やや軟	堆一辺(やや多)、チャ(多)、角(ごく少)、金(少)、ウサ(少)	11往 1/4
45	壳	口縫部 ～腹部	15.4	13.5	⑮口縫部はやや屈曲しゆるやかに外方にたちあがる。腹部はあまりならぬ。⑯外面一タキ。内面一板状T形によるナギ。	茶褐色～暗茶褐色	やや硬	やや堆一辺(多)、チャ(少)、金(普通)、角(やや少)、ウサ(少)	口縫 1/3
46	壳	口縫部 ～腹部	11.0	8.2	⑰口縫部はゆるやかに外方にたちあがる。腹部はやや屈曲する。⑱外面一タキ。内面一板状T形によるナギ。	明褐色	やや軟	普通一辺(やや多)、チャ(少)、金(普通)、角(普通)	11往 1/2
47	壳	口縫部 ～肩部	14.4	6.8	⑲口縫部は屈曲し外方にたちあがる。前脚はやや屈曲する。⑳外面一タキ。体側内面一板状T形によるナギ。	茶褐色	やや軟	堆一辺(ごく少)、チャ(少)、金(少)、角(ごく少)、ウサ(ごく少)	口縫 1/5
48	壳	口縫部 ～肩部	15.2	6.8	㉑口縫部は屈曲し外方にたちあがる。前脚はやや屈曲する。㉒外面一タキ。内面一板状T形によるナギ。ユビミサエ。	淡褐色	やや軟	堆一辺(普通)、チャ(少)、石(少)、金(少)、ウサ(少)	口縫 1/3
49	壳	口縫部 ～腹部	15.2	11.4	㉓口縫部はゆるやかに外方にたつてする。口縫部は尖りぎみにおわる。前脚、腹部はほとんど認めない。㉔外面一タキ。内面一板状T形によるナギ。	淡黄色	やや軟	堆一辺(やや多)、チャ(少)、金(多)、ウサ(少)	口縫 3/8
50	壳	口縫部	15.2	2.6	㉕口縫部はゆるやかに外方にたちあがる。㉖外面一タキ。内面一板状T形によるナギ。	米色	やや軟	普通一辺(普通)、金(少)、石(少)、ウサ(少)	内外山え ス付着

番号	形種	高さ	法量(cm) 種類	特徴・調査の特徴	色調	塊度	粒度	残存率	備考
53	丸	口縁部 ～瓶底	11.6	10.2 ①口縁部はやみやかに外反し、肩部は やや肩である。腹部もあまり盛らない。 ②口縁部外側～タケハケ。腹部内面一 ヨコハケ。	茶褐色	普通	やや粗一セラ(普通), 金(普通), クサ(ごく 少), 角(少)	口径 1/3	
54	丸	口縁部 ～瓶底	15.2	10.8 ①口縁部は強く外反し、腹部も弧形。 ②外唇一タケハケの上にナゲナダ。 口縁部内面一ヨコハケ。腹部内面一横 方向ナダ。	暗茶褐色	普通	やや粗一浅(少), チャ (少), 角(少)	口径 1/3	全体にス ス付着。
55	丸	瓶部	4.2	2.1 空外唇一タケハケ。内面一ナダ。	赤茶褐色	普通	粗一浅(普通), チャ (普通), 金(少), 角 (少)	底径 3/4	
54	丸	瓶部	3.4	2.2 ②外唇一タケハケ。内面一ヨコハケ。	茶色	普通	やや粗一長(普通), チ ナ(普通), 金(普通), クサ(ごく少)	底径 1/1	
56	丸	瓶部	4.6	2.9 ③外唇一タケハケ。内面一ハケ。	茶褐色	普通	やや粗 やや暗一淡(少), チ ナ(少), 金(少), 角 (やや少)	底径 2/3	
56	丸	瓶部	4.9	3.4 空外唇一タケハケ。内面一ナダ。	赤茶褐色	普通	非常に薄一チャ(やや 少), 石(少), 金(多), 角(少), クサ(ごく少)	底径 2/3	
57	丸	瓶部	2.4	2.0 ④外唇一ユビオサニ。内面一板状工具 によるナダ。	茶色	普通	青緑一浅(少), チ ナ(やや少), 金(ごく少), クサ(ごく少)	底径 1/1	
58	丸	瓶部	3.8	2.6 ⑤外唇一タケハケ。内面一板状工具 によるナダ。	赤茶褐色	普通	粗一長(普通), 金(普 通), クサ(少)	底径 1/3	
59	丸	瓶部	3.6	2.0 空外唇一ナダ。内面一板状工具による ナダ。	赤茶褐色	普通	粗一長(多), チャ(多), 金(少), 石(少), 角 (普通)	底径 1/1	
60	丸	瓶部	4.1	3.9 ⑥外唇一ユビオサニ。内面一板状工具 によるナダ。	茶褐色	普通	やや粗一淡(普通), 金 (多), チャ(多), クサ (ごく少)	底径 1/1	
61	丸	瓶部	4.2	2.9 ①ややあげ立つぎになる。②外唇一 ハニミガキ。内面一板状工具によるナダ。	茶褐色	普通	粗一長(普通), チ ナ(多), 角(少), 石(少)	底径 1/1	外唇にス ス付着。
62	丸	瓶部	4.3	3.5 ③外唇一タケハケ。内面一板状工具によ るナダ。	茶褐色	普通	粗一長(少), チャ(多), 金(多), クサ(ごく少)	底径 1/2	
63	丸	瓶部	4.1	5.0 空外唇一ナダ。ユビオサニ。内面一ナ ダ。	淡茶褐色	普通	やや粗一長(多), チ ナ(多), 角(ごく少), 金 (多)	底径 1/1	
64	丸	11425 ～11426	17.5	6.2 ①口縁部は斜めし外反する。肩部にや や盛る。②外唇一ナダ。内面一ユビオ サニ。	茶褐色	普通	きわめて粗一長(少), チャ(多), 石(少), 金 (普通), クサ(少)	口径 1/4	
65	長脚 瓶	瓶部一 底部	22.6	6.5 ①体部は斜め立ちである。表面は比較的 の平ら。②外唇一ナダ。内面一タケハ ケのナダ。	茶色	やや粗	粗一長(多), チャ(普 通), 角(ごく少), 金 (やや少), クサ(少)		内外面ス ス付着。
66	丸	11426 ～瓶底	16.6	1.4 ③口縁部は外側に粘り点を貼りつけ, 下方にやや膨張させて、輪面をつくる。 ここに3基の沈紙を貼り、円錐形文を 貼りつける。(内面一ナダ。	暗茶褐色	普通	やや粗一長(普通), チ ナ(少), 金(普通)	口径 1/10	円錐形浮文 は1基地部。

番号	部種	部位	重量(g) 現重		形態・調査の特徴	色調	漬成	粘土	残存率	備考
			出重(g)	残重(g)						
67	高杯	口縁部 —脚台 部	口縁 22.5	15.2	①軒部—中段よりやや下で削ぎを腰をして口縁は外上方にのびる。脚台—脚底はゆるやかに笠があり、脚台は丸くおさめる。②軒部内外面、脚台外面ハラミガキ。脚台脚内面ハラケズリ。	茶褐色	やや緑	普通—長(齊通)、チャ (やや多)、金(やや少) クサ(ごく少)	口使 (やや多)、金(やや少) 1/4	洗孔4つ あり。
68	高杯	軒部	21.4	3.2	①軒部—腰をなしてゆるやかに外反する。脚底は丸くおさめる。②軒部—ナ ゲア内外面ハラミガキ。	淡紫褐色	緑	粗—舟(多)、クサ(少) 金(齊通)、長(齊通)	口使 1/36	
69	庄内 人 足型	口縁部	13.8	2.7	①口縁部は腰をなして屈曲し外上方にたちあがる。口縁部は削ぎをなす。②口 縁部内外面—稍凹内ナダ。体部内面一 横方向ハラケズリ。	淡紫茶色	普通	やや緑—長(齊通)、チ ヤ(齊通)、金(少)	口使 1/5	

断然表示記

・形態、調査の特徴の欄では、①は必要の特徴について、②は調査の特徴についてそれぞれ記した。

・粘土の欄では、含有鉱物のそれぞれについて内張で観察を行ない、粗略的な含有量を()内に記した。含有鉱物は略字で示している。
長=長石、チャ=チャート、カ=角閃石、金=金雲母、石=石英、クサリ岩=クサ

・残存率の欄では各部位の測定径に対する残存部分の割合を分数で記した。

8. 高安古墳群（89-537）の調査

調査地 大字黒谷942-1他

調査期間 平成2年6月21日

1. 調査概要

高安古墳群は、高安山西斜面において造営されたおよそ200基の古墳時代後期の群集墳である。特に、古墳分布の中心である都川・服部川・大字大津は「高安千塚」と呼ばれ、古くからその存在が知られてきた。

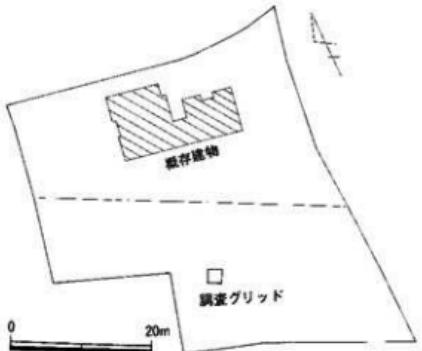
今回の調査は、木造2階建住宅建築に伴い、遺構・遺物の有無を確認する目的で行われたものである。当該計画地の中央部分に $2\text{m} \times 2\text{m}$ のグリッドを設定し、重機と人力による掘削を併用し、地表下約2.0mまで調査を行った。地表下約1.0mまでは、取り壇した家屋等による搅乱された盛土であったが、以下褐色粘砂・褐色砂混粘質土と続いている。遺物が出土されたのは地表下約1.4mの青灰色砂疊層で、およそ0.5mの厚さで堆積していた。

2. 出土遺物

遺物は須恵器しか出土しなかったが、細片が多く図化できたものは壺身1点のみである。た



第34図 調査地周辺図 (1/13000)



第35図 調査区範囲図



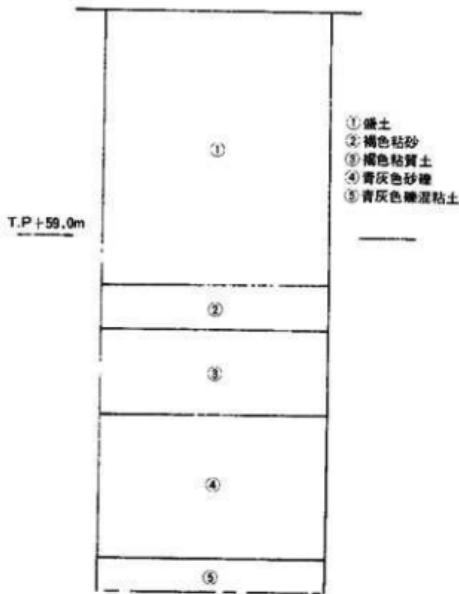
第36図 出土遺物実測図 (1/4)

底体部はやや深く底部は平らに近いと思われる。

3.まとめ

今日の調査では、古墳時代後期の遺物が出土した。また、調査地周辺には巨石が多く、おそらく、以前には古墳があったことも十分に考えられる。

(道)



第37図 基本層序模式図 (1/20)

9. 高安古墳群（90—96）の調査

調査地 恩智974

調査期間 平成2年7月16・17日

1. 調査概要

本調査は、元来あった里道を約2.0m掘り下げ、新たに道路及び水路を付け替え、さらに擁壁を設ける工事に伴って、遺構・遺物の有無を確認する目的で行われたものである。調査地の周辺は、宅地造成のための開発が行われている。

今回の調査は、まず7月16日に立会調査を行った。その際に、土層断面の露出している箇所の観察の結果、現状Gより-1.6mまでは、流土であったが、流土の下の茶褐色砂質土層中より、上師器片を確認した。これによって、付近に何らかの遺構・遺物が遺存している可能性もあり、業者と協議した結果、翌17日に急掘遺構確認調査を行うことにした。

調査は、16日に調査を行った部分を第3グリットとし、山の斜面に向かって、第2グリット・第1グリットとして、3m×3mの区画を設定して、重機と人力による掘削を行った。



第38図 調査地周辺図 (1/13000)

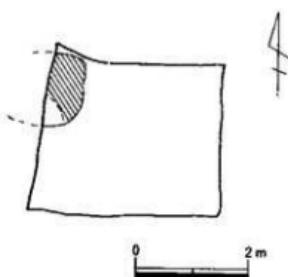
第1グリッド及び第2グリッドともに現状GJより3m掘り下げたが、流土と岩盤を構成する砂岩を確認しただけであった。第3グリッドでは、立会調査で確認した茶褐色砂質土が、明茶褐色粘砂を切り込んでいる土坑であることが確認できた。土坑は、深さ約40cmで、茶褐色砂質土と淡茶褐色粘砂から成り立っている。全体の形は、土坑が半分しか残っていないためにはっきりとはしないが、南北方向に広い梢円形だと思われる。

2. 出土遺物

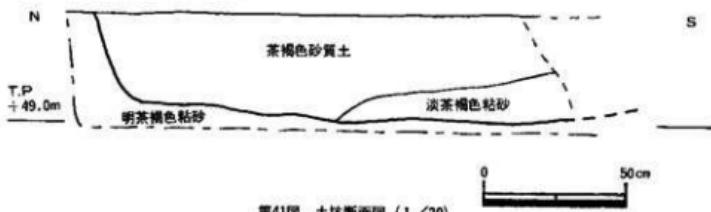
今回の調査で出土した遺物は、すべて土坑内からのものである。遺物は、土師器の小片及び埴輪の小片であったが、量はわずかであった。

3. まとめ

調査地は、高安古墳群に含まれている。調査地近くに古墳はないが、出土遺物・遺構から、かつて古墳が存在したことも考えられる。また、調査地の上方百数十mに古墳があり、それらとの関連性もあるかも知れない。(清)



第40図 第3グリッド平面図 (1/100)



第41図 土坑断面図 (1/20)

10. 大石古墳 (90-221) の調査

調査地 楽音寺 6 丁目29

調査期間 平成 2 年 7 月 25 ~ 8 月 1 日

1. 調査概要

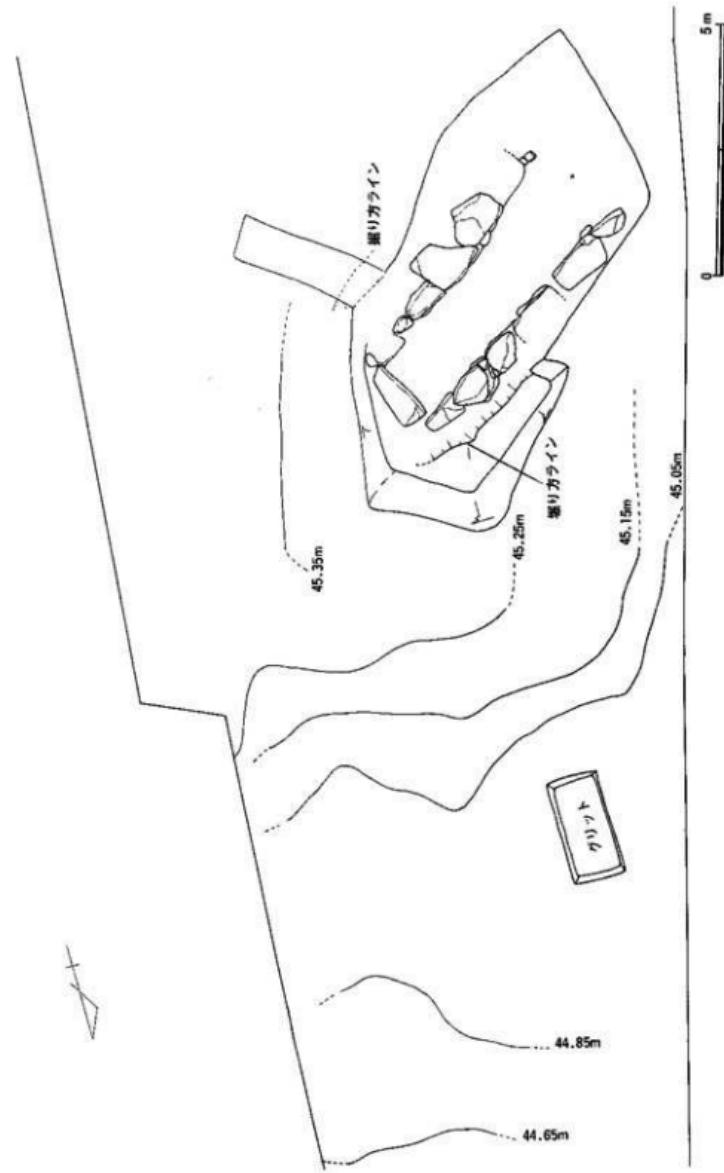
〈調査にいたる経過〉

本調査は鉄筋 3 階建共同住宅建設に伴う遺構確認調査である。施行予定地の東側に 3 m 四方の調査区を設定し、重機による掘削を行ったところ、調査区の東側の地表下 0.3 m 付近で径 0.5 m 以上の花こう岩と思われる石が出土した。更に東側に調査区を拡張し、石のつづきを確認したところ、石室の玄室幅 1.4 m 、玄室長 2.4 m 以上の横穴式石室墳であることが明らかになった。このためただちに原因者と古墳保存のための協議にはいり、協議期間中は文化財室によって石室の規模および墳丘範囲の確認のための調査を行なうこととなった。

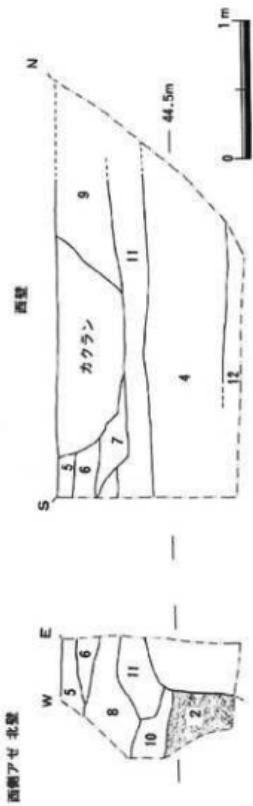


第42図 調査地周辺図 (1/13000)

図43 四 調査区平面図

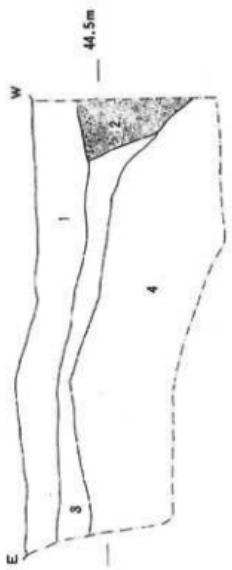


第44図 レンチ土壌断面図 (1/40)



1. 砂土
2. 茶灰色粘砂層 (墨り方理土)
3. 明眞褐色粘砂層
4. 明眞褐色大變遷粘砂層 (地山土)
5. 淡黃色粘土層 (灰土)
6. 茶灰色砂質土層
7. 黄色粘砂層
8. 茶褐色粘砂層
9. 淡眞灰色小變遷粘砂層
10. 淡茶灰色暗變遷粘砂層
11. 茶褐色中變遷粘砂層
12. 明眞褐色粘土層

東側南斜面

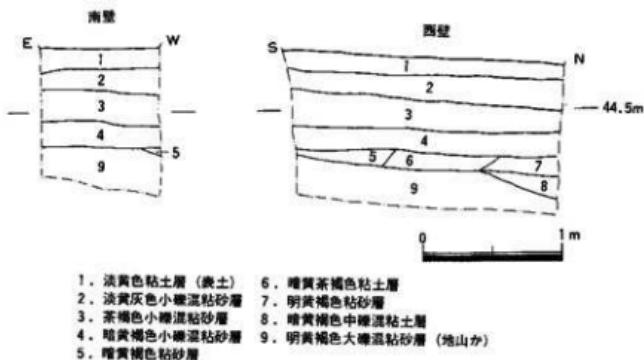


〈周辺の環境〉

八尾市の東部山麓の大字大室、服部川周辺は後期古墳が密集し一般に高安古墳群とよばれているが、この地域以外にも東部山麓全体に広く後期古墳が分布している。これらを含め広義の高安古墳群と考えた場合、当古墳はその最も北側に位置するもの一つとなる。高安古墳群を構成する古墳の多くは標高100m～150mに立地するが、当古墳は標高44mというかなり低い位置に立地する。施行予定地は石室の存在する東側に若干地形が高くなっているが、南側と西側は擁壁となっており現状の地形はかなり削平されているものと思われる。このためこれまでの分布調査でもこの古墳の存在は確認されていなかった。文化財室では当古墳の所在地の小字名をとって大石古墳と命名することとした。

〈石室の検出状況〉

石室内は北側に天井石とおもわれる1m四方の石材が落ち込んでいた。これを重機で除去したのち石室内の埋土及び北側の表込め相当部分の擾乱土を人力で掘削した。石室内埋土は地表下0.7mまでの擾乱土を重機で掘削したあと、約0.7mを人力で掘削した。この結果、幅1.4m～1.6m、検出長約5.6mの南北側に開口する石室であることがわかった。側壁は2段以上積まれていることを確認したが、南北側は1段しか確認することができなかった。更に底道部の状況を明らかにするため南北側のトレンチを約1m拡張したが底部を確認することはできなかった。以上から大石古墳の石室は無袖式で、側壁の1段積み部分は底道部であった可能性がある。擾乱土の下は墳丘の崩落した土と思われる暗茶灰色粘砂層であり近世陶磁器含む。この層の下の淡黄灰色粘砂層はほとんど近世陶器を含まない層であった。この層の西側壁側の奥壁近くの標高43.9m、地表下約1.5mところで須恵器の壺身、壺蓋、有蓋高壺、甕、堤瓶、土師器高壺がまとまって出土した。また西側壁付近の奥壁から1.4m離れた地点でも須恵器の器口片を確



第45図 北西側グリッド土層断面図 (1/40)

認した。これらは原位置を保っていない。また石室の羨道推定部分南端には茶灰色粘砂層に混じって人頭大の石が含まれていたが、これらのうちの一つの石の直上で須恵器の壺身、土師器の甕が出土した。これらは石室開口部を閉塞する際に祭祀的に使用された遺物であるかもしれない。石室から出土した土器はTK43型式前後、6世紀末あたりに位置付け得る。

また、石室の東側では墳丘の構築状況を確認するため長さ3m、下端幅0.5mの断ち割り孔を設定した。この他、トレンチの西壁と西側アゼ部分の北壁の断面精査を行なった。この結果、側壁の外端から0.5m~1.0mのところにめぐる石室掘り方のラインを確認することができた。掘り方は東側断ち割り部分では標高44.59mの明黄褐色粘砂層上面から、西側アゼ部分では標高44.73mの明黄褐色大礫混粘砂層から切り込んでいる。明黄褐色大礫混粘砂層は地山であると思われるが、明黄褐色粘砂層は北西側の地形の低い部分を整地した際の土であるかもしれない。掘り方の埋土は茶灰色粘砂層である。また、石室の北側の部分では現代の擾乱土を除いた後、黄褐色大礫混粘砂層面で精査をおこなったところ、標高43.7m~44mの高さで掘り方の残存部分のラインを確認した。この部分では掘り方の上端は削平されている。

〈墳丘範囲の確認〉

石室の北西8mのやや地形が平坦になった部分で1m×2mのグリッドを設定し、墳丘裾部分の確認を行なった。この結果、地表下0.8m、標高44.06m付近で地山とみられる明黄褐色大礫混粘砂層を確認した。この層は北に向かって少しづつ下がっている。この面は石室掘り方上面よりは0.6m程低い。また、この層の直上の暗黄褐色小礫混粘砂層からは瓦器、須恵器の小片が出土している。周塗等、明瞭に墳丘を画する遺構はここでは確認できなかった。

また、現地形での地形測量を行なったところ、石室のまわりを標高44.05m以上のコンターラインがめぐることがわかった。このようなことから大石古墳の石室は旧地形の高まりを利用して設定されそのあと墳丘部分の盛土が行なわれたのではないかと思われる。また、石室は近世に天井石、側壁上段の石を持ち出す等の破壊がなされたようである。

〈石室の石材〉(図46)

石室の石材鑑定については市立刑部小学校教諭の奥田尚氏に依頼した。ここでは奥田氏の鑑定結果のなかから側壁石材に関する部分のみを抜粋する。側壁石材の石種は1つの細粒黒雲母花こう岩、2つのアブライト質黒雲母花こう岩、1つの片麻状アブライト質黒雲母花こう岩を除いてはすべて角閃石閃綠岩である。これらの石材の礫形は角~亜角で表面が媒乱していないことから常に表面が削られている谷川の礫が推定される。これらの石材の採取地であるが角閃石閃綠岩は一元の宮付近の角閃石閃綠岩の岩相に酷似する。礫は大森付近の谷川でも僅かに見られる。細粒黒雲母花こう岩、アブライト質黒雲母花こう岩は樂音寺から水呑み地蔵へ登る谷沿いに見られる礫の岩相に酷似する。片麻状黒雲母花こう岩は水呑み地蔵へ登る谷の北側の谷

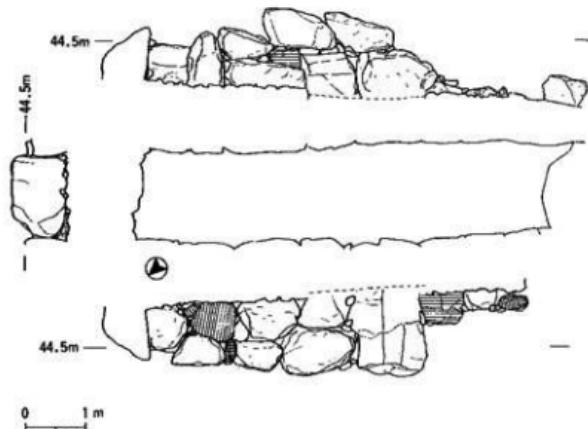
や法藏寺から南の山腹に分布する片麻状黒雲母花こう岩の岩相の一部に酷似する。谷川に疊して転がるがいずれとも採取地を決めがたい。大石古墳の石材は樂音寺の北東の谷から大謀の谷に至る遠く見ても2kmの範囲から運ばれたと推定される。

2.まとめ

本調査で大石古墳は6世紀末頃に築造された無袖式の横穴式石室墳であることがわかった。また、墳丘の範囲は明らかにできなかったが、旧地形を利用して築造されていることがわかった。この調査結果をもとにして原因者との保存協議を行なったが、建物の基礎構造上、現状保存是不可能であるとのことであった。このため全面的に発掘調査を行なって記録保存をはかることとし、調査を(財)八尾市文化財調査研究会に委託することとなった。

本調査地周辺は、かつては多く後期古墳が存在しており、近世以来の破壊受けっていたものと思われる。大石古墳の調査はそのなかで僅かに残されていた古墳のひとつとして、貴重な資料を提供するものであろう。

(吉田)



格子で示したものは、片麻状アブライト花崗岩
斜線で示したものは、アブライト質黒雲母花崗岩
横線で示したものは、細粒黒雲母花崗岩
その他はすべて閃緑岩

(*石室実測図は(財)八尾市文化財調査研究会による現地説明会資料複数図を一部変更して使用)

第46図 石室石材の石種

11. 中田遺跡（90—69）の調査

調査地 中田3丁目11・12

調査期間 平成2年7月31日

1. 調查概要

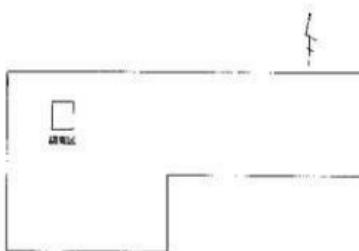
本調査は、店舗付貸事務所建築に伴い遺構・遺物の有無を確認する目的で実施されたものである。調査地が位置する中田遺跡は弥生時代後期～中世にかけての複合遺跡である。

我々が現場に到着した時には既に調査地奥より基礎のための掘削が始まられており、工事を中止させ緊急に調査に入った。そのために調査グリットを1箇所しか設定できず、グリット幅も狭いものになったが、重機によって2.5mまで掘削を行い、断面観察を中心とした調査を行った。

地表下約1.15mで旧耕作土に達する。以下、灰褐色砂質土、灰褐色粘質土、暗灰褐色粘土と統く。そして、地表下約1.85mの暗灰色粘土層より土師器、瓦器等の遺物が出土した。この遺物包含層は、約0.4mの厚さで堆積している。この遺物包含層の下の青灰色粘土からは遺物はみられなかった。



第47圖 地形地圖切圖 (1/13000)



第48図 調査区設定図 (1/100)

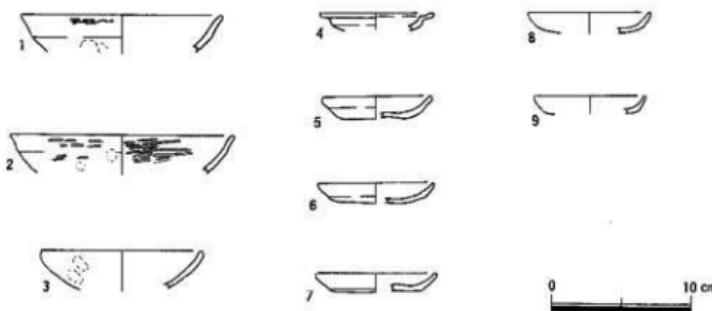
2. 出土遺物

今回出土した遺物は、暗褐色粘土の上げ土より採集したものである。1は推定口径14.0cmの瓦器輪、2は推定口径15.5cmの瓦器輪である。3は土師器坏である。4はいわゆる「て」字状口縁を有する土師小皿で、推定口径約8cmである。

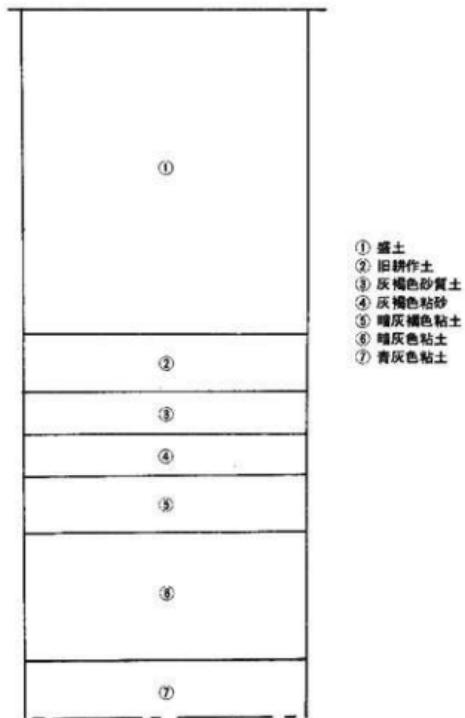
3.まとめ

本調査は、前述したように十分な調査を行えなかったにもかかわらず、平安～鎌倉時代にかけての遺物包含層を確認することができた。調査地の西約400mには、874年に從五位下に叙せられたといわれる矢作神社があり、その付近をかつて当教育委員会が調査した際には平安後期～鎌倉後期の遺構・遺物を確認している。今回の調査では遺構を検出することはできなかつたが、同時期と思われる遺物が見られたとこから、矢作神社周辺の遺構の拡がりが予想される。今後の周辺地域の調査に期待したい。

(消)



第49図 出土遺物実測図 (1/4)



第50圖 基本層序模式圖 (1 / 20)

12. 中田遺跡（90-540）の調査

調査地 中田1丁目142番地の一部

調査期間 平成2年8月1日

1. 調查概要

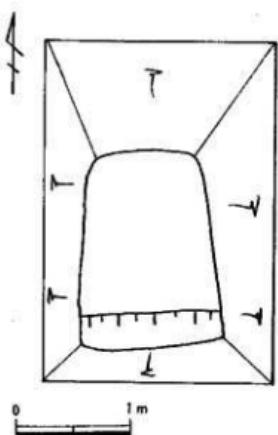
今回の調査は、二階建共同住宅建設に伴う遺構確認調査である。中田遺跡は昭和45年から行なわれた八尾都市計画曙川北土地区画整理事業によって発見された遺跡であり、昭和46年以降、道路建設、地下埋設工事、住宅建設に伴う工事によって部分的な調査が行なわれている。それらによって、中田遺跡は弥生時代から中世にかけての複合集落跡であることが判明している。

本調査は、特に深く掘り下げる浄化槽部分を対象として、2m×3mのグリットを設定し、地表下1.8mまで調査を実施した。まず、旧耕作土まで重機によって掘削し、後は重機と人力を併用して掘削をすすめた。

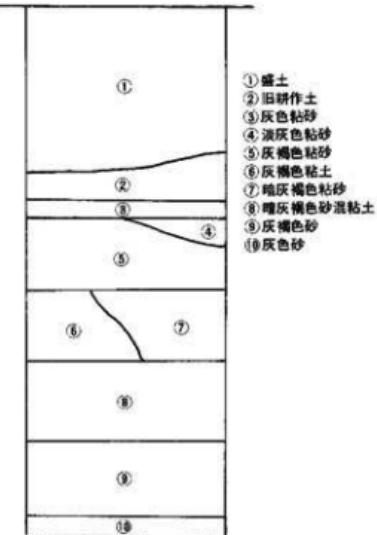
両変によって確認できた遺物包含層は2層ある。一つは、近世の遺物包含層である灰褐色粘土層であり、地表下約1.0mに存する。堆積の厚さは約0.25mであった。この遺物包含層を切



第51圖 調查地周邊圖 (1/13000)



第52図 溝状遺構平面図 (1/50)



第53図 基本層序構式図 (1/50)

り込んでいた暗灰褐色粘砂層がみられたが、遺構であるかどうかの確認はできなかった。もう一つの遺物包含層は、地表下約1.55mに存する灰褐色粘砂層であり、中世の遺物包含層である。層の堆積は約0.26mである。

また、灰褐色粘砂層の下の灰色砂層面において、これを切り込んでいる溝状の遺構を確認した。埋土は青灰色粘土であった。遺物はみられなかった。

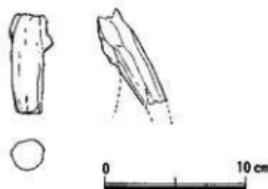
2. 出土遺物

近世陶磁、瓦器碗、瓦質羽金の破片が出上したが、図化できるものはあまりなく、今回は瓦質三足釜のみ掲示しておく。

3.まとめ

今回の調査では、地表下約0.8mで中世遺物包含層がみられたが、その下では灰色砂層があり、中世以前では旧大和川の氾濫がおこっていたことが推測される。調査では砂層から遺物はみられなかったが、あるいはその下には、更に古い時代の営みが遺存しているかもしれない。

(道)



第54図 出土遺物実測図 (1/4)

13. 久宝寺遺跡 (90-246) の調査

調査地 神武町17・20・21他

調査期間 平成2年8月6日

1. 調査概要

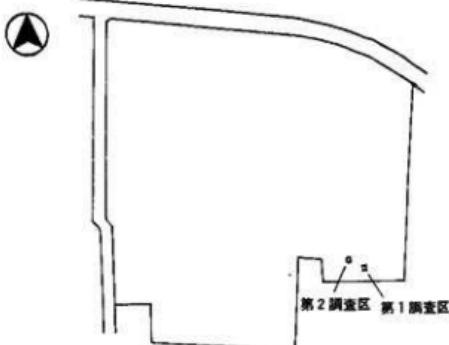
本調査は工場増築に伴う遺構確認調査である。工場敷地の南東部分の既存建物の間に3m四方の第1調査区を西側建物の北に2.7m×2.3mの第2調査区を設定した。第1調査区では地表下1.2mまで重機で掘削し、以下人力掘削をおこなったところ、地表下約1.3m、TP7.4m付近で庄内式土器小片及び自然木若干を含む暗灰茶色粘土層を確認した。第2調査区では地表下1.2mまで重機による掘削を行ない、以下人力掘削を行なったところ、地表下1.2mから1.65m、TP7.15mから7.5mの間で、庄内式土器を含む暗灰茶色粘土Aとやや砂の少ないB層及び暗灰茶色粘土層を確認した。特に暗灰茶色粘土A層は多量に庄内式土器を含んでいた。庄内式土器は壺が口縁部片で15点の他、高杯3点、鉢3点が出土している。これらは庄内式土器の新旧段階に位置付け得る。この他、上層からの混入と思われる布留式土器占段階の小片が出土している。(図版19)



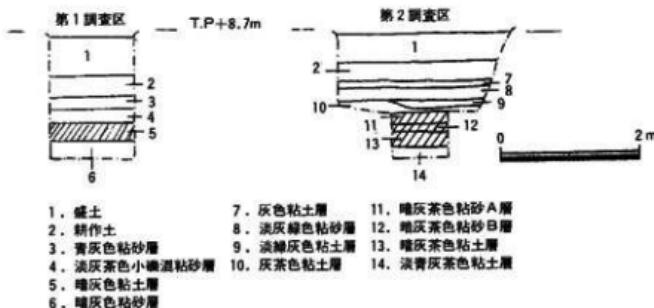
第55図 調査地周辺図 (1/13000)

2.まとめ

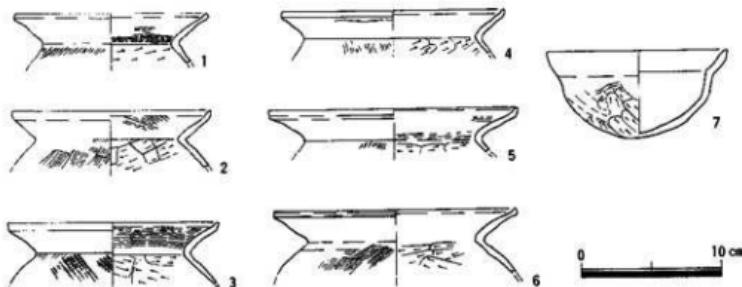
本調査では占墳時代前期の良好な包層を確認した。周辺では当期の集落遺構が確認されており、本調査地でもその存在が予想される。



第56図 調査区設定図 (1/1400)



第57図 土層断面図 (1/80)



第58図 出土遺物実測図 (1/4)

14. 中田遺跡 (90-260) の調査

調査地 刑部4丁目407-2・4・8

調査期間 平成2年9月21日

1. 調査概要

本調査は、鉄骨造3階建の社屋・住宅建築に伴って実施した遺構確認調査である。調査地が位置する中田遺跡は、弥生時代後期－室町時代に至る複合遺跡である。今回の調査地は、中田遺跡の東南端にあたる刑部地区であり、この地区は吉備系土器が多数出土していることから、古墳時代に始まる大集落であったと考えられている。

調査は約2m×2mのグリットを3箇所に設定した。このうち中央部に設定した第2グリットでは、地表下約0.8mで旧耕作土の層を確認したが湧き水が激しく、掘削を行なうのが困難となり、そこで調査を中止した。調査地南側の第1グリットでは、地表下約1.0mまで重機で掘削を行ったところ、旧耕作上の下に淡灰褐色粘砂層を確認し、以下を人力によって掘削した。遺物包含層は、地表下1.1mにある淡灰褐色粘質土層であり、須恵器高台付杯、土師器皿・椀、黒色土器の破片などが出土した。北側部分の第3グリットでは、地表下約0.9mまで重機によって掘削し、以下1.2mまで人力によって掘削を行った。遺物は出土しなかったが、淡灰褐色



第59図 調査地周辺図 (1/13000)

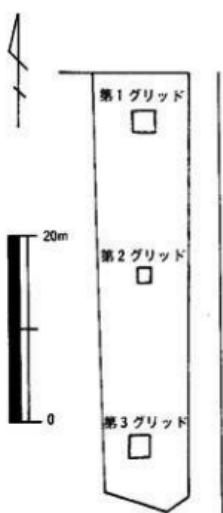
粘質土層上面で、ピット状の土色の変化を1ヶ所確認した。

2. 出土遺物

遺物は主に第1グリッドから出土したものである。しかし、固化できるものは、ここに挙げた須恵器の杯と土師器の高杯の2点のみであり、他は小片がみられる程度である。1は高台を伴う杯である。体部・口縁部は上外方へのび、端部は丸い。底部は平らで、やや内側にハの字形の高台を付し、高台端面は水平な平面を成している。2は高杯と思われるが脚部は欠損してしまっている。体部から口縁部にかけては内済気味に立ち上がった後にわずかに外反し、端部は丸くなっている。全体の調整はナデが施されている。

3. まとめ

今回の調査では、残念ながら遺構を検出することはできなかつたが、奈良末～平安初頭にかけての遺物包含層を確認することができた。上記したように、この調査地の南東約75m付近で吉備系の酒津式土器が出土しており、また、ここ数年の発掘調査で多くの古墳時代の遺構・遺物が調査地周辺で確認されていることから、中田選跡のなかでもこの刑部地区は、古墳時代から平安初頭にかけての集落が営まれていたことを伺い知ることができ、本調査もそれを裏付ける結果となった。
(道)



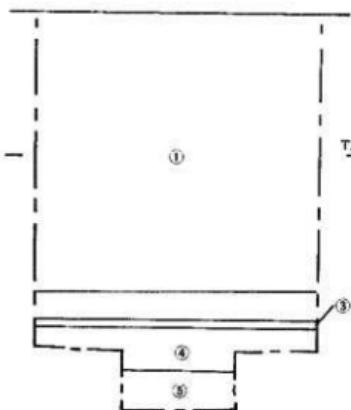
第60図 調査区設定図

の発掘調査で多くの古墳時代の遺構・遺物が調査地周辺で確認されていることから、中田選跡のなかでもこの刑部地区は、古墳時代から平安初頭にかけての集落が営まれていたことを伺い知ることができ、本調査もそれを裏付ける結果となった。

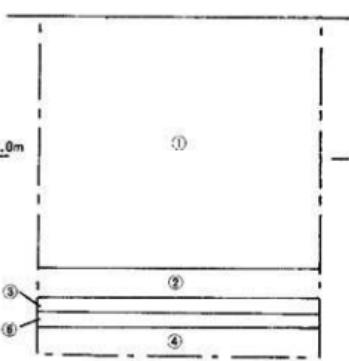


第61図 出土遺物実測図 (1/4)

第1グリッド



第3グリッド



- ①盛土 ④淡灰褐色粘質土
②旧耕作土 ⑤淡灰褐色砂混粘質土
③淡灰褐色粘砂 ⑥淡灰黄褐色粘砂

第62図 基本層序模式図 (1/20)

15. 恩智遺跡（90-282）の調査

調査地 恩智中町3-129

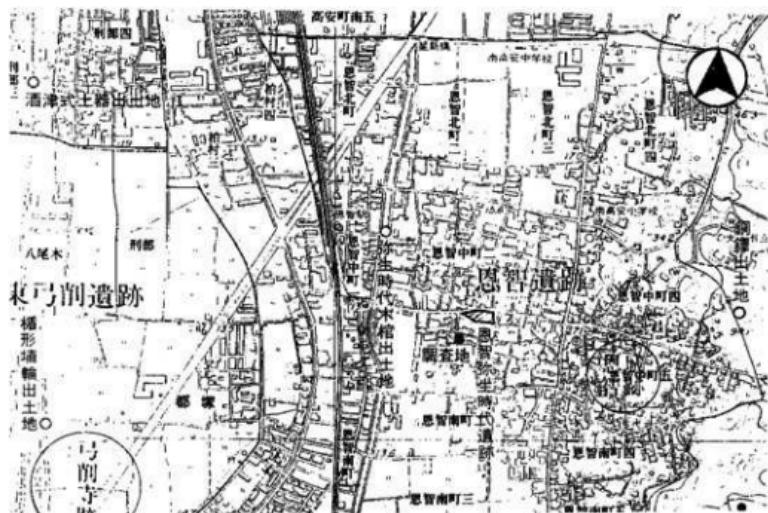
調査期間 平成2年10月5・8・9・11・12・15-17日

1. 調査概要

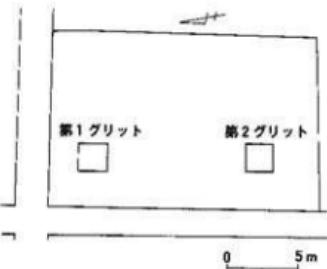
恩智遺跡は、生駒山地西麓の扇状地に位置する縄文時代～弥生時代を中心とする集落遺跡である。遺跡は、大正時代に梅原末治・島田貞彦両氏による発掘調査以来、多くの発掘が行われている。昭和50年には恩智川改修工事に伴う調査が瓜生堂遺跡調査会によって為され、また当教育委員会によっても幾度かの調査が行われている。

本調査は個人住宅建築に伴う遺構・遺物の確認調査であり、調査地の北側の浄化槽部分に2m×2mの第1グリットを、南側に第2グリットを設定し入力による掘削・精査を実施した。調査地の基本層序は盛土、褐色粘質土、暗茶褐色粘質土、暗茶褐色砂泥粘質土、暗灰黄色砂質土、黄褐色粘砂、褐色砂砾である。

調査地では 地表面で既に土器・石器がみられたとおり、両グリットとも盛土から遺物が含



第63図 調査地周辺図 (1/13000)



第64図 調査区設定図 (1/400)

まれていた。第1グリットでは、褐色粘質土、暗茶褐色粘質土で確認された遺物は細片ばかりであるが、弥生中期の土器が出土している。しかし、中期の土器に混ざって、弥生後期の土器や須恵器が含まれている。遺構は、暗茶褐色砂混粘質土上面で8つのピットを検出している。各ピットの深さは約6~8cmである。遺物は西側の3つのピットから土器、石器が出土した。暗茶褐色砂混粘質土には弥生中期の土器を包蔵している。また、暗灰黄色砂質土を切りこんでいる。黒褐色砂礫を埋土とする溝状遺構を検出した。溝は北東から南西に向かっており、幅約0.7m、深さ約0.3mを計る。埋土に遺物は確認できなかった。そして、第6層の黄褐色粘砂、第7層の褐色砂礫には遺物はみられなかった。第1グリットは地表下約1.1mまで掘削を行った。

第2グリットは断面観察の結果を主にして述べる。基本的層序は第1グリットと変わらない。しかし、調査地は南に向かって谷になっていると思われる。遺構は、第3層暗茶褐色粘質土を切り込んでいる土坑と第4層暗茶褐色砂混粘質土を切り込んでいる土坑を東壁南隅に確認する。第3層の土坑は弥生~古墳時代までの遺物がみられたが、第4層の土坑は弥生中期と思われる壺・甕の底部、石器、動物の骨などが出土した。また、この第4層の土坑は、次の暗灰黄色砂質土上面の土坑を切っていた。この土坑は、時間の関係もあり、確認したのみに止めた。暗灰黄色砂質土では、弥生土器、動物の骨片、それに方柱状片刀石斧などが出土している。第2グリットは地表下約0.95mまで掘削を行った。

2. 出土遺物

今回の調査では、弥生前期~古墳時代に至る土器と石器が多数出土した。しかし、完形の土器は一点もなく、破片ばかりであった。1層の盛土~3層の暗茶褐色粘質土までは弥生土器に混じて須恵器、土師器片等がみられることから古墳時代以降に擾乱を受けていると思われる。4層以下は弥生土器のみであった。今回出土した弥生土器は前期~後期までみられるが、中心となるのはⅢ~Ⅳ様式である。

石器は、石包丁、石斧、石鎌、石錐、スクレイパー、楔形石器が出土しているが、主要なもの

のだけを図化した。4は第1グリットのピット上面で出土した鋸刃状剥離をもつ石鏃である。石鏃はこの1点しか出土していない。10はSP-3より出土した直刃の縦長剥片で、使用痕がみられ、天端から作り出している。13は第2グリット第4層の土坑より出土した横長剥片のスクレイバーで、刃部が一部欠損している。以上が遺構から出土したものである。以下は包含層から出土したものである。1.2は石包丁であるが、1には朱摩孔痕がみられる。3は暗灰黄色砂質土から出土した緑泥片岩の方柱状片刃石斧である。使用痕はみられない。5は石錐で使用による剥離痕がみられる。6～9・11は楔形石器であるが、6は石槍からの、7は石刀からの転用であろう。14・15は石核、16は素材剥片である。12はスクレイバーである。石器は両グリットとも第1～5層まで含まれていた。

3.まとめ

本調査は延べ6日間ほどの調査であったが、多数の弥生土器、石器が出土した。これは、昭和62年度に当教育委員会が行った調査地前の道路での水道工事立会調査で多数の土器が出土しており、また恩智遺跡の中心付近であることからも予想されていた。しかし、2層～3層は弥生時代の遺物包含層が古墳時代遺構に搅乱されていた。4層の暗茶褐色砂混粘質土がわずかに残っている弥生時代の遺物包含層であった。今回の調査で出土した遺物から、恩智遺跡はⅢ～Ⅳ期にピークを迎える後急速に衰退していったものと考えられる。ただ今回は縄文時代の遺物包含層を確認できなかったのは残念である。

(注)

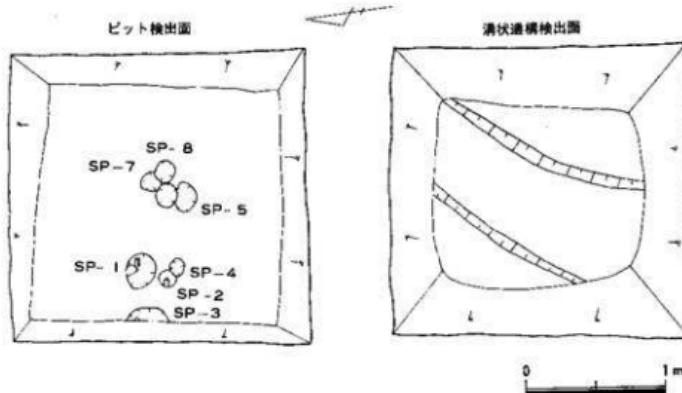
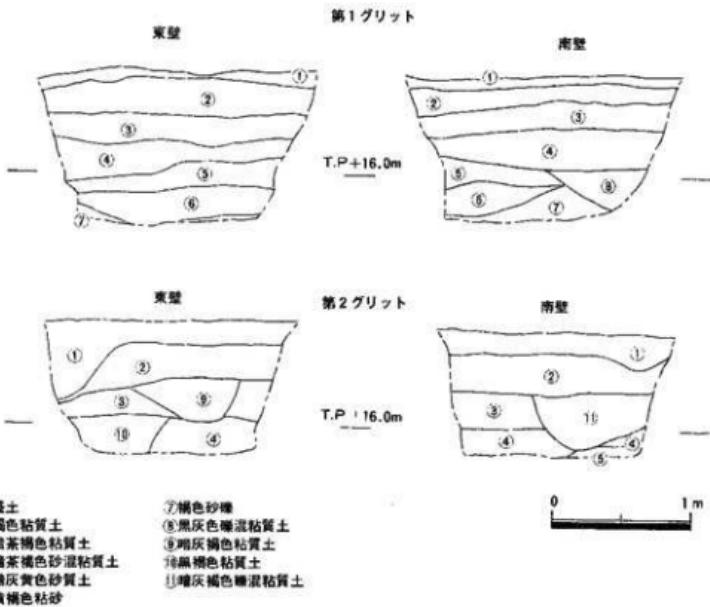
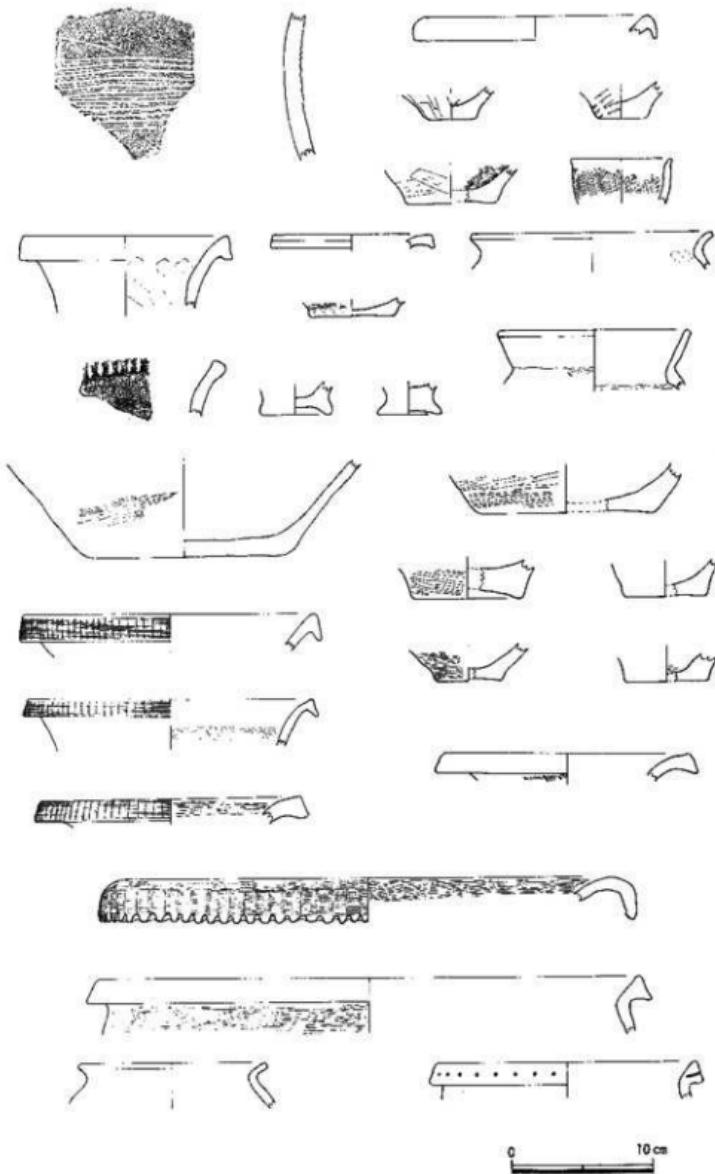


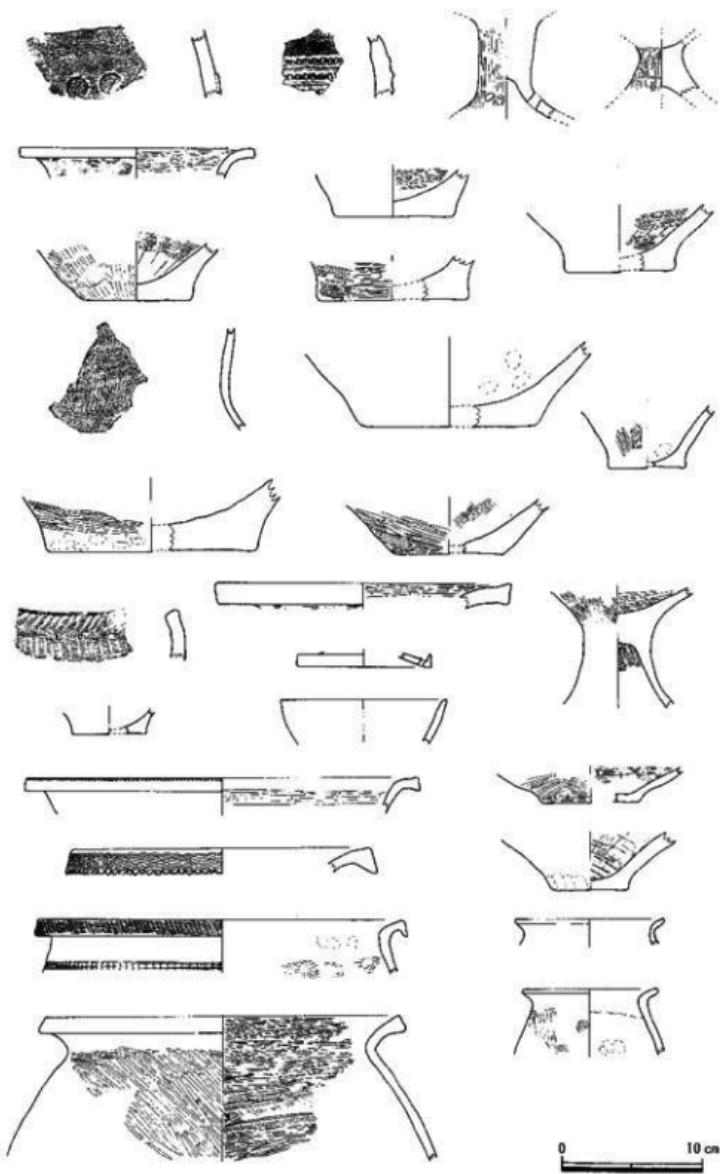
図65 第1グリット平面図 (1/40)



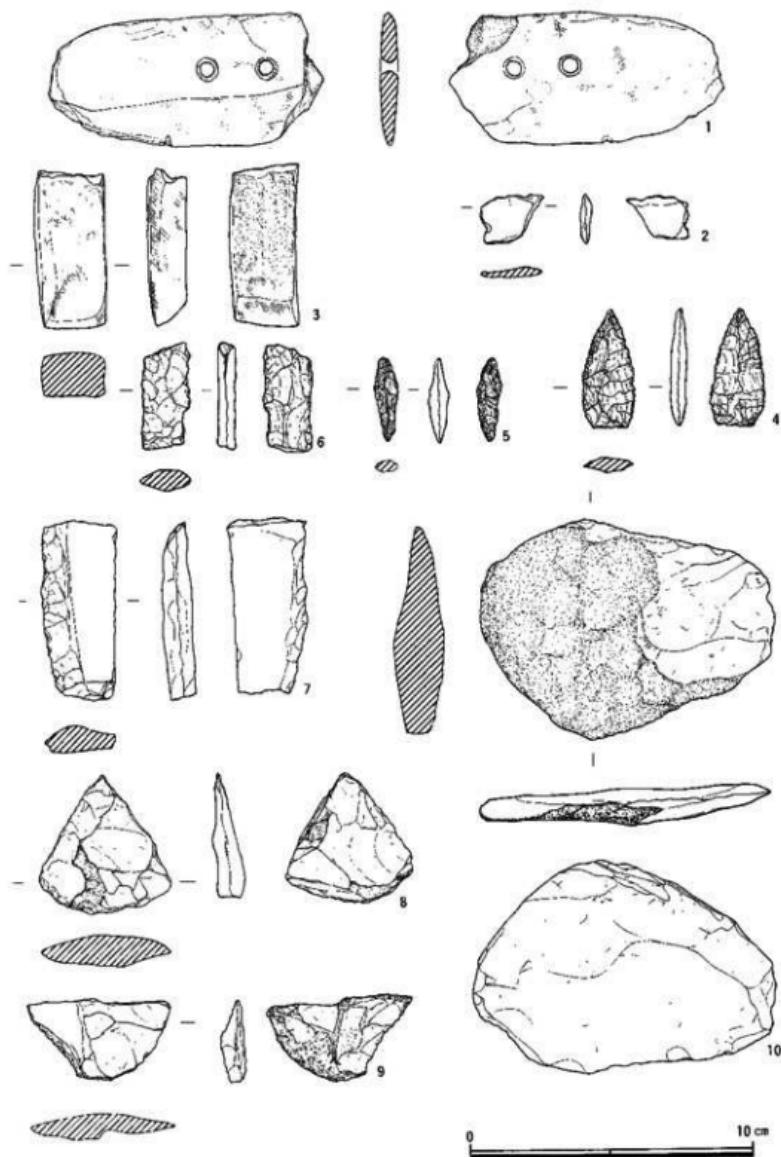
第66図 土層断面図 (1/40)



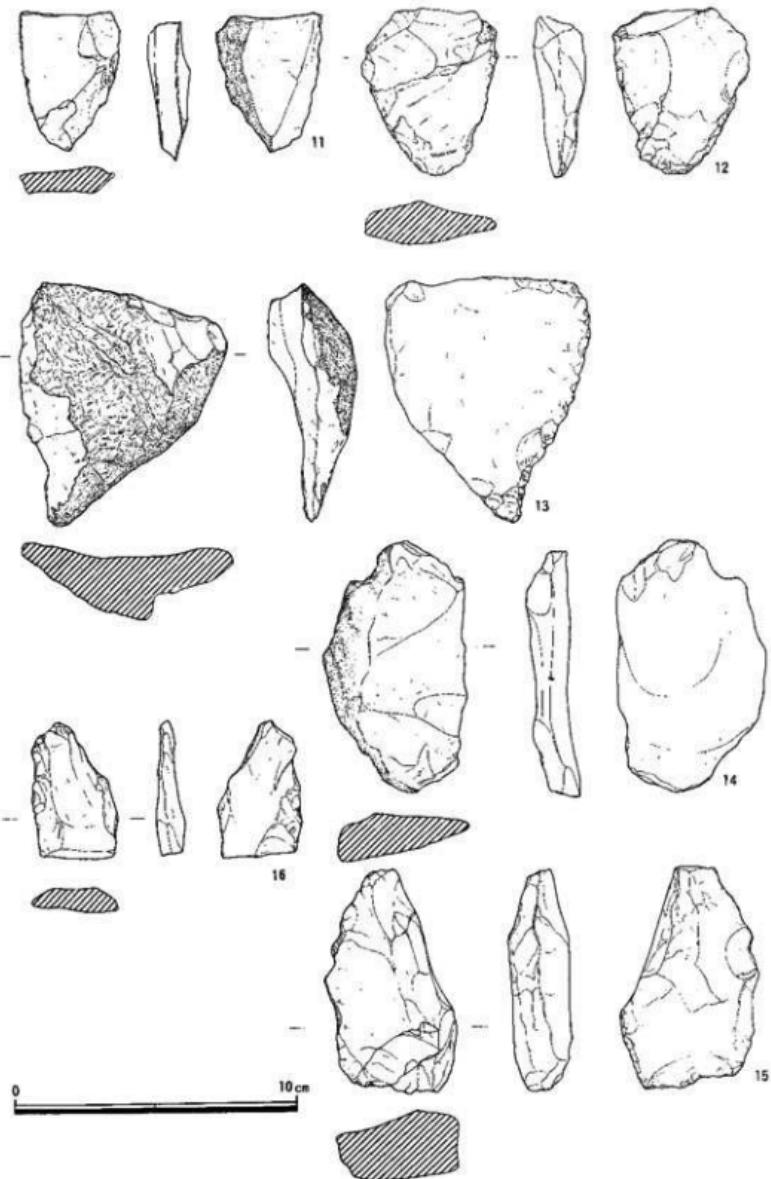
第67圖 出土土器実測図 (1/4)



第68図 出土土器実測図 (1/4)



第69圖 出土石器實測圖 (1 / 2)



第70図 出土石器実測図 (1/2)

16. 東郷遺跡（90-353）の調査

調査地 本町7丁目89-2他

調査期間 平成2年10月17日

1. 調査概要

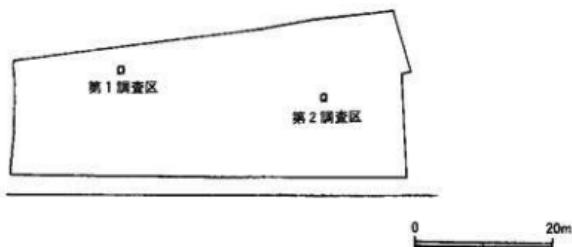
本調査は9階建共同住宅建設に伴う遺構確認調査である。施行予定地の西側に3m四方の第1調査区を東側に2m×1mの第2調査区を設定した。第1調査区では地表下2.9mまで重機と人力を併用して掘削し断面観察を行なったところ、地表下1.2m～1.7m、T P 6.4m～6.9m付近で瓦器等を含む淡緑灰色シルト層、淡灰緑色シルト層、暗緑灰色シルト層を確認した。同様に第2調査区では地表下1.0mまで掘削したところ、地表下0.75m付近で淡緑灰色シルト層を、その下で溝状遺構とピットを確認した。本調査地では、瓦器塼、土師器皿等が出土している。瓦器は内外面に粗いヘラミガキを施すものであり12世紀代に位置付け得る。（図版25）

2.まとめ

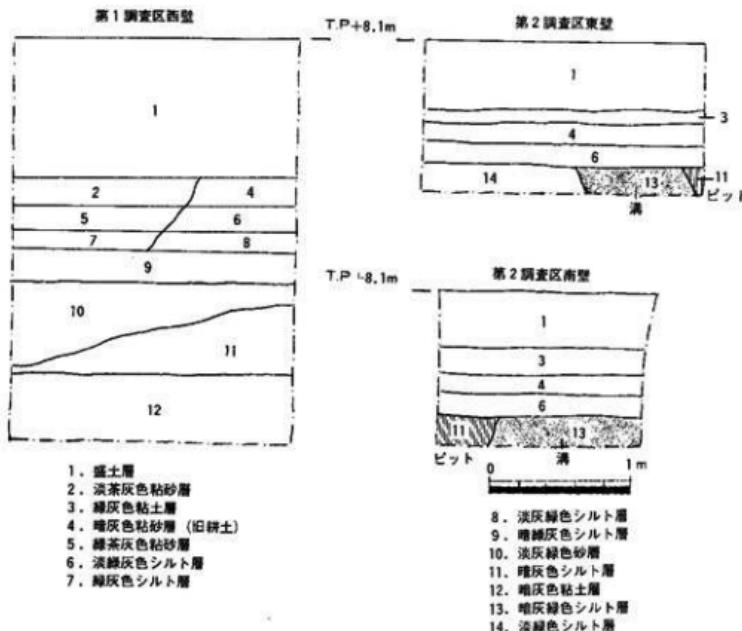
当調査地では鎌倉時代の良好な遺構、包含層を確認した。常光寺建立前の当地域の様相を示す資料として重要である。
(吉田)



第71図 調査地周辺図 (1/13000)



第72図 調査区設定図 (1/800)



第73図 土層断面図 (1/40)

17. 中田遺跡（90-330）の調査

調査地 刑部3丁目53番の1

調査期間 平成2年10月23日

1. 調査概要

中田遺跡は、弥生時代から鎌倉時代にかけての集落遺跡である。特に古墳時代においては大集落が営まれていたことが過去の調査から判明しており、また、本調査地の近くで酒津式土器が出土している。

今回の調査は倉庫建築に伴い遺構・遺物の有無を確認する目的で行われたものである。調査は、事業計画地の東側に $2\text{m} \times 2.5\text{m}$ の第1グリットを、西側に $2.5\text{m} \times 2.5\text{m}$ の第2グリットを設定し、重機と人力を併用して掘削を行った。

第1グリットでは、地表下約1.5m、旧耕作土直下にある緑灰色粘砂層から土師器の小片が出土した。緑灰色粘砂層は約0.3mの厚さで堆積している。また、地表下約2.2mの暗灰褐色粘土からは土師器、須恵器が出土した。この古墳時代の包含層は約0.3mの厚さである。

第2グリットでも、旧耕作土直下の緑灰色粘砂から土師器片がみられ、暗灰褐色粘土からは多くの土師器、須恵器が出土した。しかし、その下にある黄灰色粘砂層では、遺物を確認することはできなかった。



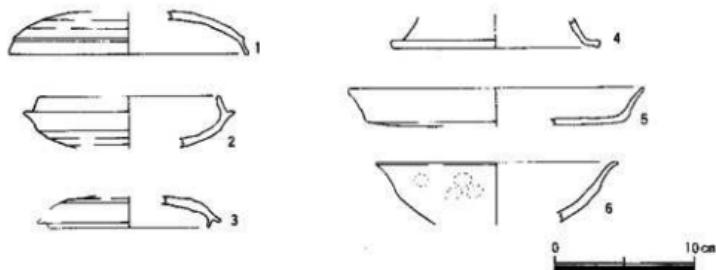
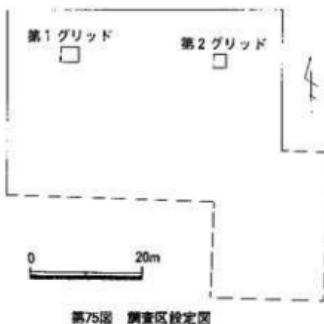
第74図 調査地周辺図 (1/13000)

2. 出土遺物

炭化した遺物はすべて暗灰褐色粘土層から出土したものである。1~5は須恵器であり、6~7世紀前半のものと思われる。1の胎土は他の須恵器に比べて精良なものである。

3.まとめ

本調査では、古墳~奈良時代にかけての良好な遺物包含層が確認できた。調査地から東へ約100m離れた地点で、今年度に実施した他の調査(90~260)においても同時期と思われる包含層を確認しており、調査地周辺に集落遺構の存在は確実であり、今後平面的な調査が望まれる。(了)



第76図 出土遺物実測図 (1/4)

第1グリッド	第2グリッド
①	①
T.P.+9.0m	②
②	③
③	
④	④
⑤	⑤
⑥	⑥
⑦	⑦
⑧	
⑨	⑨
⑩	

① 番土
 ② 美土
 ③ 喀緑灰色粘砂
 ④ 喀緑灰色礫混粘砂
 ⑤ 喀緑灰色粘土
 ⑥ 耕作土
 ⑦ 暗灰色粘砂
 ⑧ 暗茶褐色粘砂
 ⑨ 喀緑褐色粘土
 ⑩ 喀緑褐色砂質土
 ⑪ 喀褐色粘質土

第77図 基本層序模式図 (1/40)

18. 中田遺跡 (90-378) の調査

調査地 八尾木北3丁目340・341番地

調査期間 平成2年11月5日

1. 調査概要

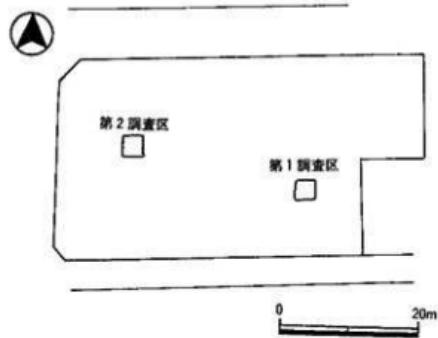
本調査は店舗付共同住宅建設に伴う遺構確認調査である。施行予定地の東側に第1調査区を西側に第2調査区をそれぞれ3m四方で設定した。第1調査区では地表下2.5mまで重機掘削し、断面観察を行なったところ、地表下2.0mのところで、自然流路の埋土と思われる淡黄灰色砂層を確認した。第2調査区では地表下1.7mまで重機掘削し以下人力掘削を行なったところ、TP8.4m～8.7mのところで、明黄灰褐色粘土層から須恵器、土師器片を確認した他、この層の下で庄内式土器片を含む灰褐色粘砂層とこれをさりこむ炭を多くふくむ炉状遺構及びピットを検出した。更に下層確認をおこなったが遺物は出土しなかった。

2.まとめ

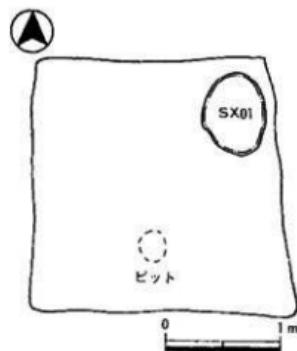
本調査地では古墳時代の良好な遺構、包含層を確認した。近接地でも当期の集落跡が確認されており、本調査はそのひろがりを確認するものとなった。
(吉田)



第78図 調査地周辺図 (1/13000)



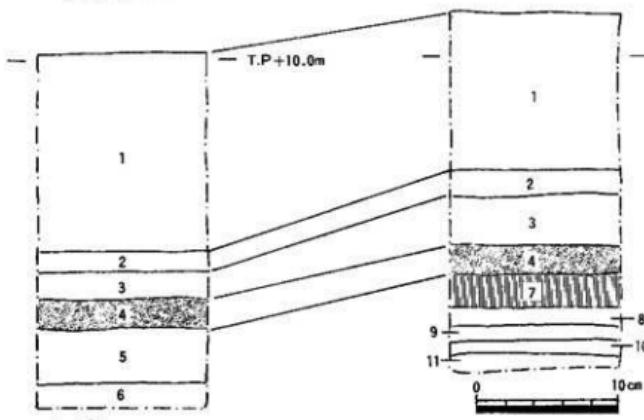
第79図 調査区設定図 (1/800)



第80図 第2調査区平面図 (1/50)

第1調査区 南壁

第2調査区 南壁



第81図 土壠断面図 (1/40)

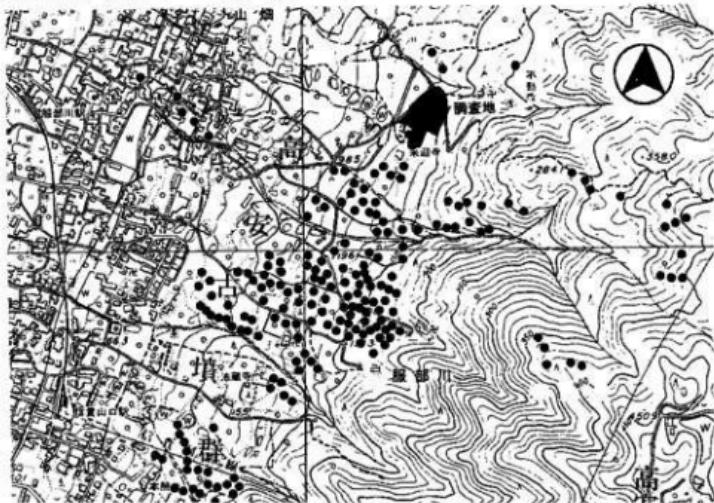
19. 高安古墳群（90-381）の調査

調査地 大庭38-1他

調査期間 平成2年11月11日～12月27日

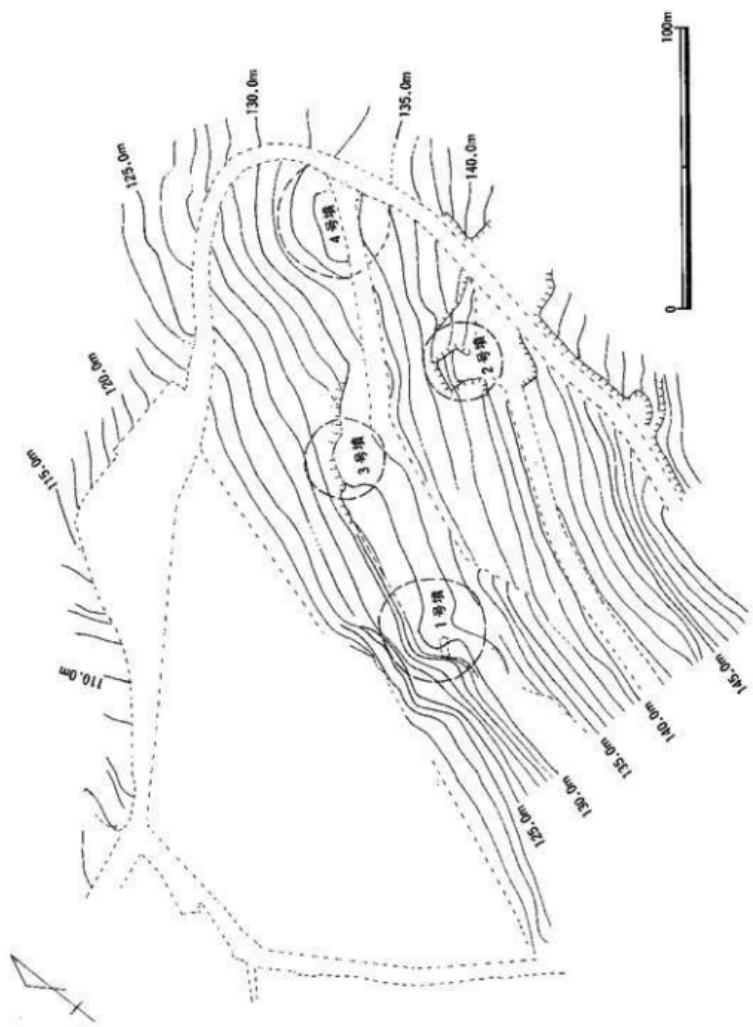
1. 調査経過

本調査は日宝寺墓地造成に伴う古墳範囲確認調査である。10月24日、原凶者から墓地造成のため、土地を開発したい旨の申請があった。申請地は高安古墳群の範囲に含まれ、既に知られている2基の古墳が開発区域内にはいる可能性が高かった。このため、文化財室で現地踏査をおこなったところ、既知の2基の他に地形が古墳状隆起をなしている所を2ヶ所確認した。このため原凶者と協議を行ない、既知の2基については墳丘測量を行なって範囲を確定してから緑地として保存すること、古墳状隆起の2ヶ所については墳丘測量および遺構確認の発掘調査を行なうこととなった。既知の古墳2基についてはとりあえず西から日宝寺墓地予定地1号墳、同2号墳、古墳状隆起2ヶ所については西から日宝寺墓地予定地3号墳、同4号墳と命名した。（以下1号墳・2号墳・3号墳・4号墳と略称する。）1～4号墳の墳丘測量は11月11日に開始し12月6日に終了した。3、4号墳の遺構確認の発掘調査は12月8日に開始し12月27日に終了した。なお、発掘はすべて人力で行なった。



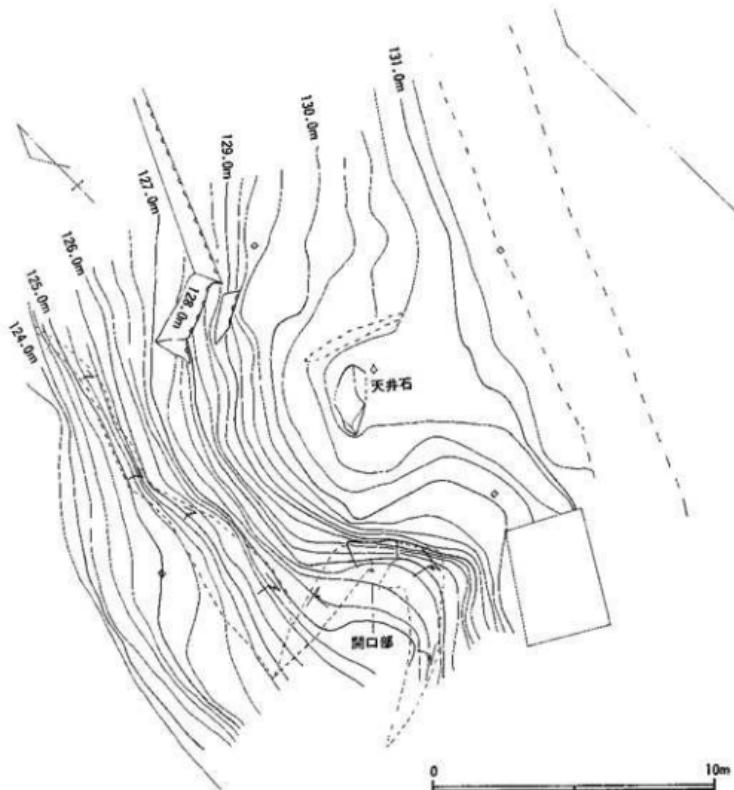
第82図 調査地周辺図 (1/13000)

附图 日宝寺遗址1~4号墓位置图 (1 / 1000)



2. これまでの調査

八尾市の東部山麓にまたがって分布する後期古墳群を高安古墳群と総称している。最近の高安城を探る会の分布調査では平成2年7月22日現在で185基が確認されているが、大正11年の岩本文一氏の調査では640基が確認されており、全国的にも有数の大型群集墳でありながら急速に破壊が進行している現況である。さて、日宝寺墓地1～4号墳の存在する大字大窪や服部川・山畑付近は後期古墳が高度に密集している。白石太一郎氏が高安千塚古墳群と呼称されたのはこの地域である。大字大窪地内では高安城を探る会によって24基の古墳が確認されていたが、文化財室で把握していた1・2号墳については確認されていなかった。大窪地内の古墳はおよそ標高100m～160mの比較的ゆるやかな斜面に散在する。日宝寺墓地1～4号墳は大窪7



第34図 1号墳墳丘測量図 (1/200)

号墳（来迎寺北古墳）をふくめて大庭地内でも最も北側に分布することになる。大庭7号墳は1号墳の南側に近接している。小型の無袖式横穴式石室を内部構造とし石室内には凝灰岩製の家形石棺が遺存する。

3. 調査概要

(1) 1号墳

古墳範囲確認のための墳丘測量を行なった。調査地の西端、標高125.5m～140m付近に位置する横穴式石室墳である。石室は南西方向に開口しており、ほぼ完存である。墳丘測量図から次のようなことが看取される。まず、古墳の範囲についてであるが、南西部分の墳塚は開口部分の谷状地形、西側部分は標高125.5mの等高線付近と思われる。開口方向を主軸と考えると、主軸長15.5m（北東～南東）、これに直交方向の推定長（南東から北西）18m、高さ5.5mの円墳と考えられる。墳丘は西北西方向延びる尾根を利用して造られており、南西部分と北西部は斜面を切り崩して道をつくっているためはっきりしないが、北西部と開口部のある南西部分は尾根を削りだし、尾根の高い側である北東から南東にかけてはほとんど自然地形を利用しているようである。これは南西方向、すなわち平野部である集落からの視点を意識して古墳を築造したためと考えられる。石室はS-46°-Wの方向に開口し、右片袖式である。石室の略測定値は、玄室長3.6m、玄室幅2.1m、玄室高2.45m、羨道長3.5m、羨道幅1.5m、羨道高1.3mを測る。

(2) 2号墳

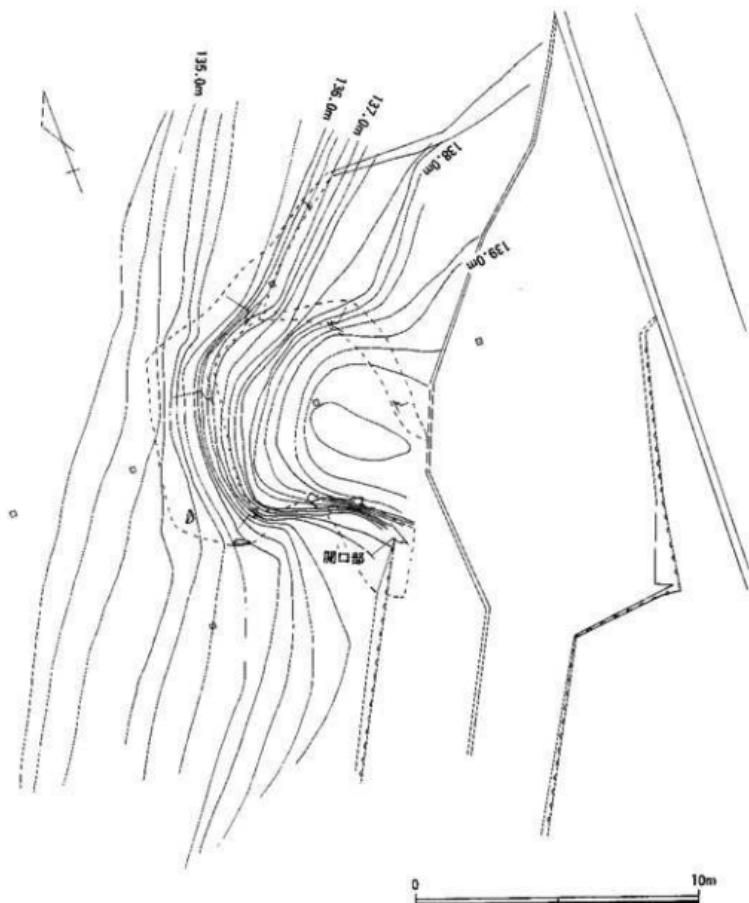
調査地の南端、標高135m～140mに位置する横穴式石室墳である。現況では北側部分を除く墳丘斜面のほとんどが崖状を呈しているため、古墳の範囲を確定することはできないが、墳丘裾を西側が標高135.0m付近、南西部分と北東部分はコンターラインの谷状にまわりこむ部分すると、主軸長11m、主軸の直交方向の推定長12m、高さ4.8mの円墳と考えられる。2号墳も1号墳と同様に尾根状地形の低い側である西側を中心北東と南西を削りだし南東部分は自然地形を利用して墳丘を築造しているものと思われる。石室はS-20°-Wの方向に開口し、石室内にかなり土が流入している。石室は右片袖式であり、略測定値は玄室は長さ3.6m、幅1.3m、高さ1.6m、羨道部は1.8m分しか残っておらず、幅1.2m、高さ1.05mを測る。

(3) 3号墳

調査地の中央部、標高126m～129.5m付近に地形がやや古墳状の隆起をなし、0.5m～1.0mの石の散在する部分があり、古墳である可能性が高いため地形測量および遺構確認調査を行なった。測量の結果、墳丘部と思われる部分の北と西の斜面は崖となって崩壊しているが、南側にコンターラインが谷状にまわりこむ部分があること、北部分も谷状の地形を呈していることから、西側の墳裾が標高125.5m付近にあったとして、南北方向約15m、東西方向約16m、

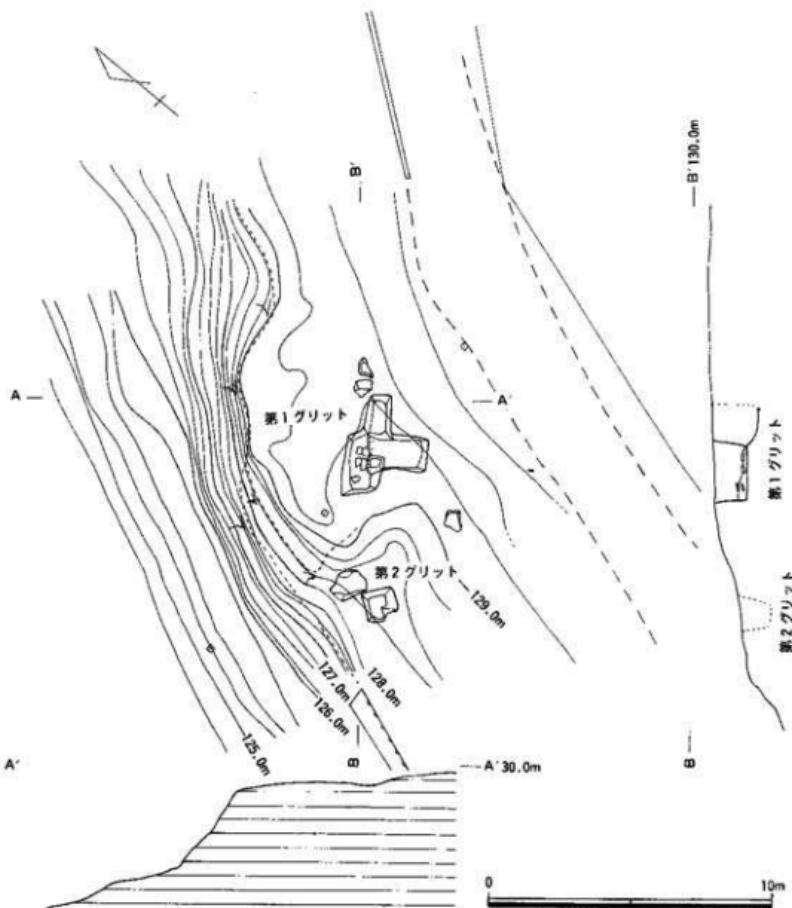
高さ約4mの凹墳に復原できる。

造構確認調査は墳頂部に1m×2mの第1グリットを墳丘斜面の南西部分に1m四方の第2グリットを設定した。第1グリットでは深さ約0.6m掘り下げたところ後世の流入土と思われる灰黄茶色粘砂層の下からやや硬くしまった明灰黄茶色粘砂層が表れた。更にこの土を掘り下



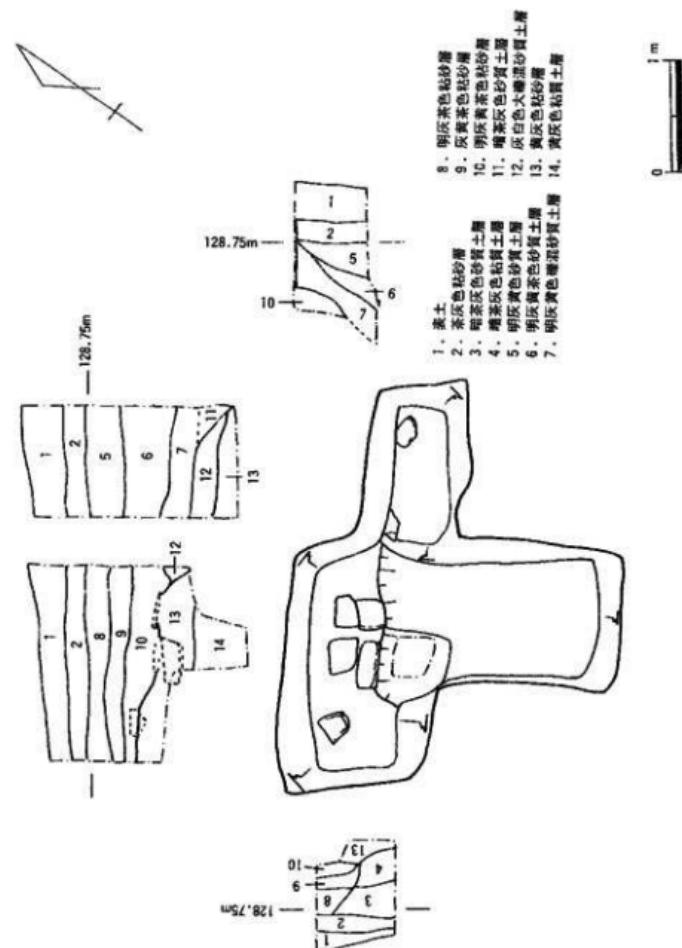
第85図 2号墳墳丘測量図 (1/200)

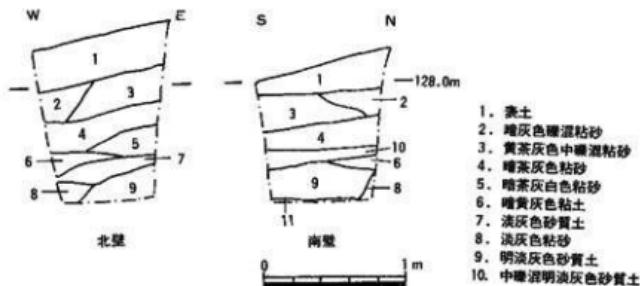
げたところ、地表下1m付近で0.3m~0.4mのやや扁平な石を5つ確認した。この石の下には若干色調の暗い黄灰色粘砂層が堆積することがわかった。またこの南西ではやや明灰黄灰色粘砂層が落ち込む。この落ち込みの拡がりを確認するため南西側と北東側にグリットを拡張し、落ち込み内の掘削を行なった。落ち込みの深さは0.3m前後であり東拡張部へ擴がる。落ち込



第86図 3号填塙丘測量図 (1/200)

圖87圖 3号地質調査図(ト平・断面図 (1 / 50)





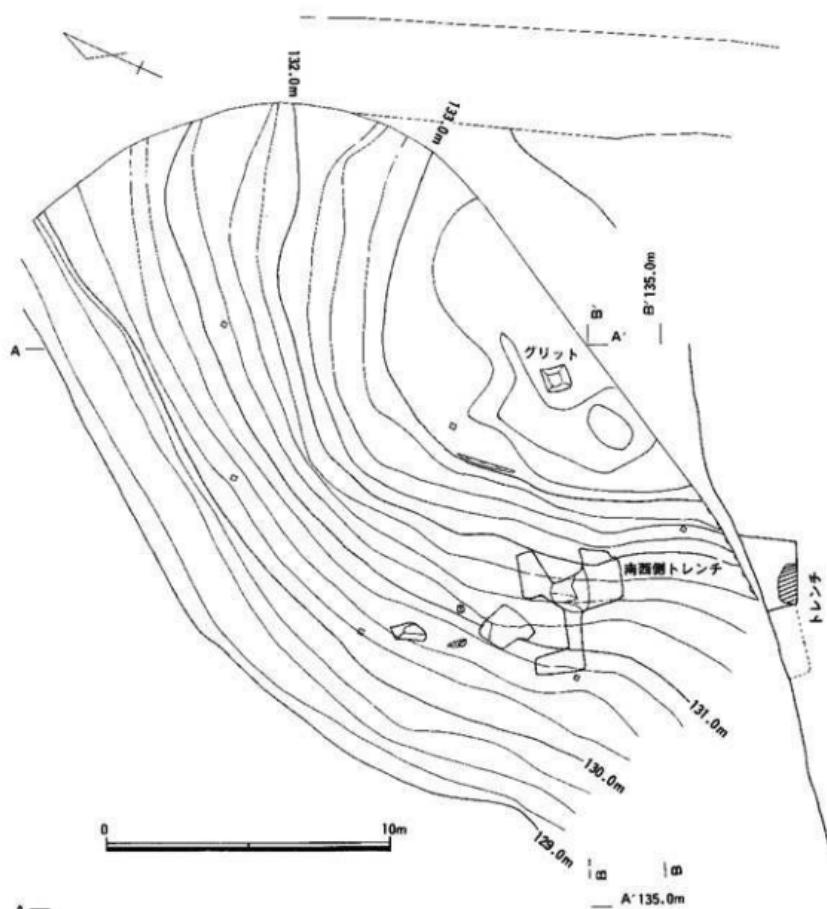
第38図 第2グリット土層断面図（1/40）

み底面の高さは東へいくほど低くなっている。また落ち込みの南西の肩の一部を石群のやや西で確認した。落ち込み底面の一部を深さ約0.5m掘削したが、黄灰色系の粘砂層がつづくのみであった。黄灰色粘砂層は墳丘の土と考えられ、地山である可能性をもつ。落ち込みは後世の削平であると思われるが、北東側で黄灰色粘砂層が下がって行くことは墳丘の形状を示しているのかもしれない。第2グリットでは地表下1.1mまで掘削したが、後世の流入土がつづき、第1グリットで確認した黄灰色粘砂層は確認できなかった。以上から墳頂部は標高128m前後、南西側の墳裾は標高127.4m以下にあることになる。3号墳は植木の入れ土を含めた後世の流入土が厚く堆積するため、墳丘の一部と思われる土を確認するにとどまった。なお、第1グリットでは地表下1.0mの茶灰色砂質土層から須恵器短頸壺の小片（5）点が出土した。

（4）4号墳

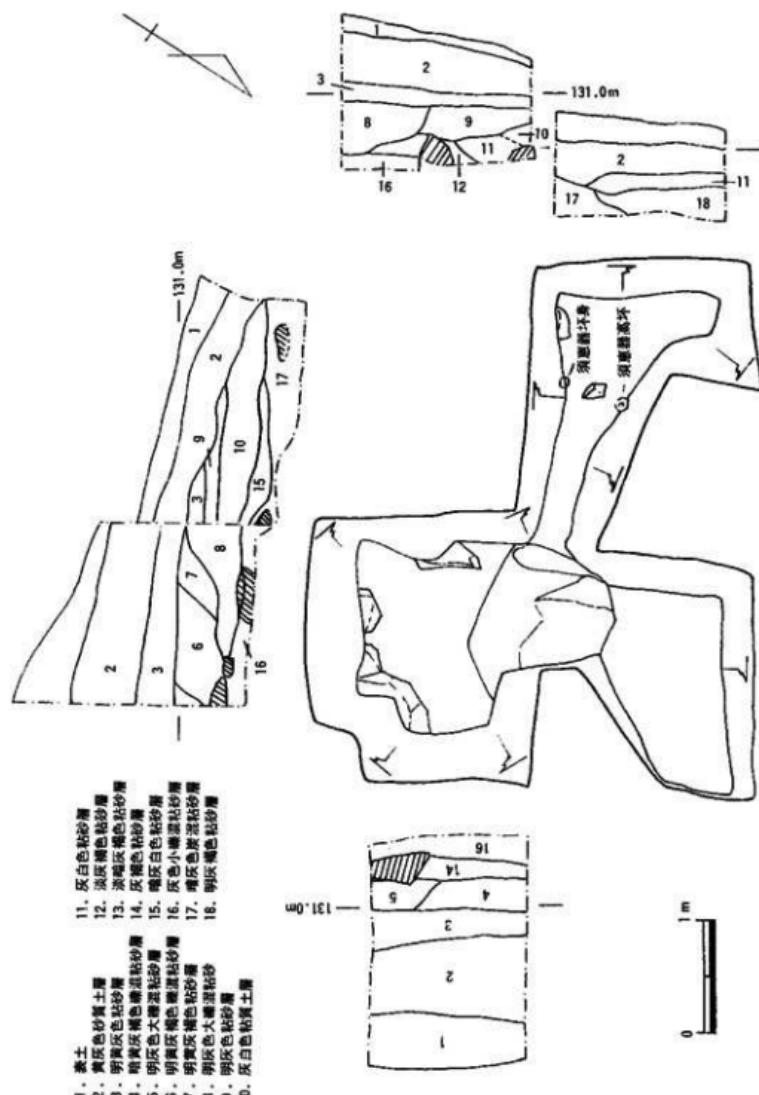
（トレンチの調査）

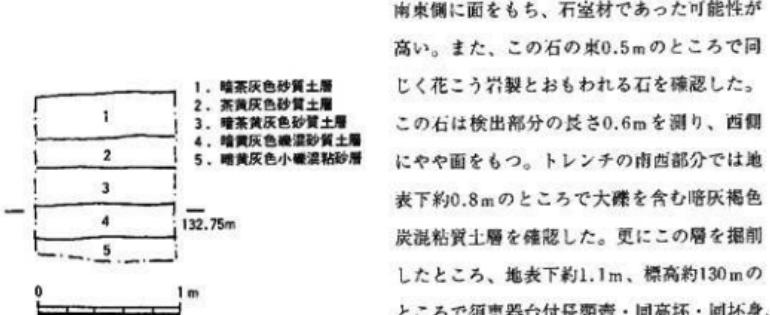
調査地の東端、標高130m～134m付近に地形がやや古墳状の隆起をなし、南西部分を中心にして1.0m～1.5mの石の散在する部分があり、古墳である可能性が高いため地形測量および遺構確認調査を行なった。測量図はなだらかな尾根状の地形を示し、墳丘裾部分を推定することは難しい。あえてコンターラインのまわりこむ最も低い部分を墳裾であるとすると標高131.5m前後のところになる。そこで調査にあたっては開口部推定位置の南西側の標高131.5m以上のところに1m×3.5mトレンチを墳頂推定部分に1m四方のグリットを設定した。トレンチでは地表下0.8mまで掘削したところ、現代の流入土の灰白色粘質土層の下から径0.5m以上の花こう岩と思われる石が出土した。このためこの部分でトレンチを南東と北西へ拡張した。この結果、この石は検出部分で最大長1.4m、最大幅1.1mを測る石であることを確認した。この石は



第89図 4号填埋丘測量図 (1/200)

第30図 4号坑トレンチ平・断面図(1/50)





第91図 グリット土層断面図 (1/40)

南東側に面をもち、石室材であった可能性が高い。また、この石の東0.5mのところで同じく花こう岩製とおもわれる石を確認した。この右は検出部分の長さ0.6mを測り、西側にやや面をもつ。トレンチの南北部分では地表下約0.8mのところで大躰を含む暗灰褐色炭混粘質土層を確認した。更にこの層を掘削したところ、地表下約1.1m、標高約130mのところで須恵器台付長頭壺・同高杯・同杯身、上部器高杯等が出土した。このうち台付長頭壺、土師器高杯は破片の状態で出土したが、須恵器の高杯・杯身は完形に近い状態で出土した。また、この暗灰褐色炭混粘質土層は先の大石の下にはいりこんでいることから、この石は原位置を保っていないものと考えられる。また、この石の東に位置する石も流入土の一つかと思われる灰色小礫混粘砂層の上に載っており、これもまた原位置を保っていない。以上から4号墳の石室は近現代に破壊され、石室内の供献土器もかきだされて散乱したものと思われる。トレンチ部分では墳丘の土は確認することができず、特にトレンチ北西部の石室破壊跡の陥没部分と思われるところでは流入土が地表下2m以上つづいていた。このようなことから4号墳は石室を中心にならざり大きく破壊されているものと思われる。

(墳頂部グリットの調査)

墳頂部付近に1m四方のグリットを設定し地表下1.16mまで掘削した。地表下1.0mまでは積木の入れ土と思われる茶黄灰色系の砂質土である。この下の地表下1.0m、標高132.55mで暗黄灰色小礫混粘砂層を確認した。地山の可能性があるが判然としない。地表下0.7mの暗茶黄灰色疊混砂質土から須恵器の壺の小片が1点出土した。これは外面にタタキのちカキメを施し、内面には同心円文が残る。

(出土遺物)

1～4が暗灰褐色炭混粘質土層からの出土土器である。1は須恵器の杯身で口径10.5cm、器高3.3cmをはかる。たちあがりは矮小化し低く内傾する。口端部は丸く收める。ロクロケズリの範囲は器高の5分の1程度にとどまる。色調は灰色で焼成は軟質である。2は須恵器の高杯である。台付き杯ともいえるような低脚の高杯である。口径11.75cm、器高5.8cmをはかる。口端部は丸く收める。杯部外面は下半部はロクロヘラケズリ、上半はロクロヘラケズリのちにロクロナデを行なう。色調は灰色で焼成は硬質である。TK209型式に位置付けられるものと思われる。3は須恵器の台付き長頭壺である。残存部高14.4cm体部最大径16cmをはかる。肩部は

張り、腹部との間に陵をもち1条の沈線をめぐらす。外面は腹部下半はロクロヘラケズリ、上半はロクロヘラケズリのちにロクロナデを行なう。脚部は3方向にスカシを入れるが、1ヶ所は幅の狭いスカシ2つが1組になっている。また、腹部の底面にスカシを入れた際のヘラキズが2条残っている部分がある。色調は暗灰色で焼成は硬質である。4は土師器の高坏で坏部底面に脚部との接合痕が残る。口径8.7cm、残存高4.2cmをはかる。坏部はやや脹らみをもち、口端部は内側にやや肥厚し丸く收める。外面は幅の狭い横方向ヘラミガキを行なう。内面は放射状暗文を施す。色調は緑色で、焼成は軟質である。これらの土器、とくに須恵器坏身の型式から4号墳の年代の一点は6世紀末ごろに求められる。

4.まとめ

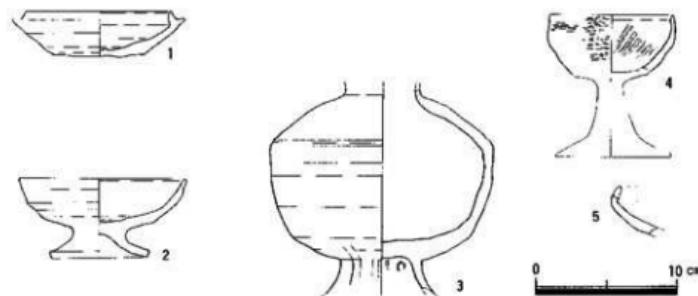
今回の調査では日宝寺墓地の造成に伴い、4基の古墳の墳丘測量を行ない、そのうち2基について遺構確認の発掘調査を行なった。その結果、古墳の墳丘範囲、保存状況、さらに築造方法を示すデータを得ることができた。特に当初、古墳状隆起として提えていた3号墳、4号墳については、残りは良好とはいえないが、古墳であることが確認できた意義は大きい。また、1号墳、2号墳は墳丘、石室とも比較的残りの良い古墳であることがわかった。

近年の東部山麓の開発件数の増加に伴い、高安古墳群の破壊が進行している。このような状況のなかで、日宝寺墓地予定地内にかかる4基の古墳は、周辺の後期古墳とともに後期群集墳のあり方を如実に伝える貴重な文化財であり、充分な保存策が必要である。
(吉田)

註1. 高安城を探る会 「高安古墳群の分布調査」 1990

註2. 八尾市史編集委員会 「八尾市史（前近代）本文編」 1988

註3. 白石太一郎 「畿内の後期大型群集墳に関する一考察—河内高安千塚及び平尾山千塚を中心として—」 『古代学研究』42・43号 1966



第92図 出土遺物実測図 (1/4)

20. 久宝寺遺跡（90-397）の調査

調査地 渋川町7丁目2番地外10筆

調査期間 平成2年11月13日

1. 調査概要

本調査地は、久宝寺遺跡に位置しているが、一部渋川廃寺跡にも含まれている。今回行ったのは事業計画地北西部の2階建倉庫建設に伴う遺構・遺物の有無を確認するための調査である。調査は、倉庫建築予定部分の北側に $2\text{m} \times 2\text{m}$ の第1調査区を、南側に $1 \times 1.5\text{m}$ の第2調査区を設定し、平面と断面の観察を行った。

第1調査区では、重機で地表下約1.4mまで掘削したところ明褐色粘質土に土師器片がみられたため、以下人力で掘削を行った。明褐色粘質土層は厚さ約0.3mである。更にその下の茶褐色粘質土からは須恵器、土師器の破片が多数出土した。この遺物包含層の厚さは約0.3mにおよんでいる。また、茶褐色粘質土層の下の淡灰色粘土層からも古式土師器とみられる土器が若干みられた。

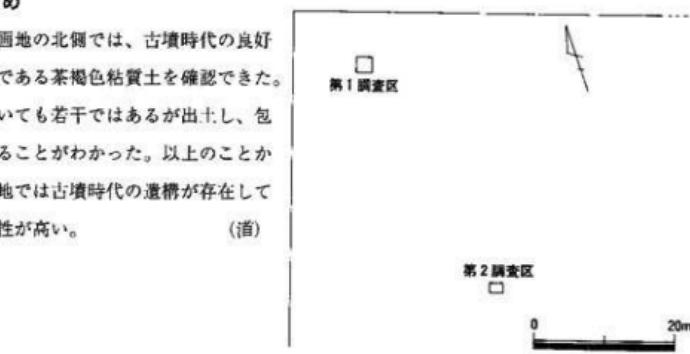
第2調査区は、表面のコンクリートが厚く、小さな区画しか設定できなかつたため、断面観察しかできなかつた。しかし、掘削した土砂の中から土師器片を確認することができた。両調査区とともに遺構は確認していない。



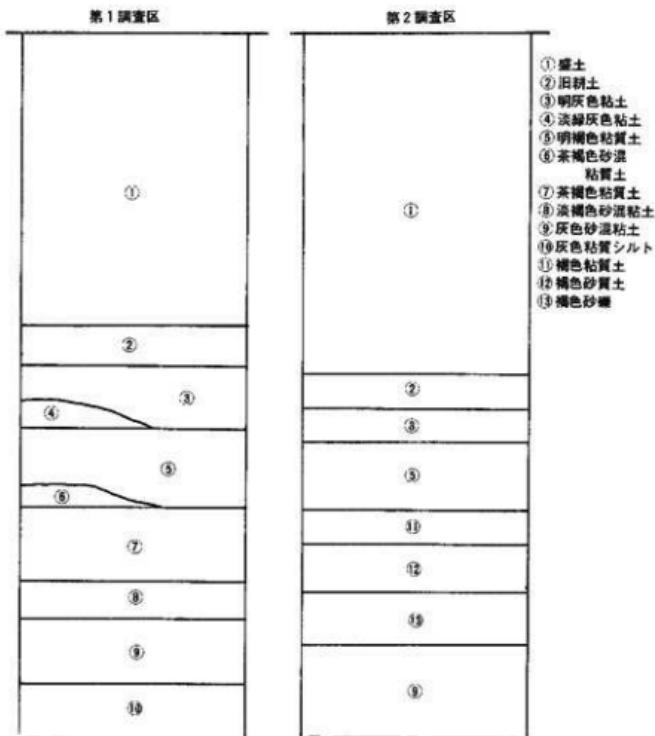
第93図 調査地周辺図 (1/13000)

2.まとめ

事業計画地の北側では、古墳時代の良好な包含層である茶褐色粘質土を確認できた。西側においても若干はあるが出土し、包含層があることがわかった。以上のことから、当該地では古墳時代の遺構が存在している可能性が高い。(道)



第94図 調査区設定図 (1/800)



第95図 基本層序模式図 (1/20)

21. 久宝寺遺跡（90-398）の調査

調査地 北龜井町1丁目9・13

調査期間 平成2年11月14日

1. 調査概要

久宝寺遺跡は、縄文時代後期から平安時代にかけての複合遺跡であり、旧大和川の主流であった長瀬川流域の左岸に位置する遺跡である。

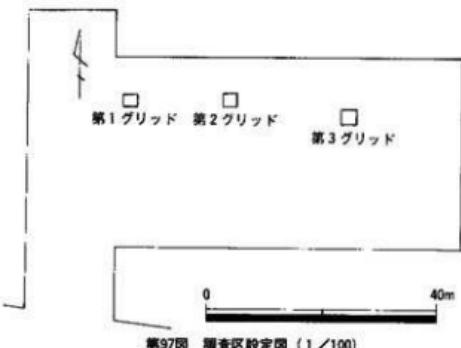
本調査は、鉄骨造3階建の倉庫・工場に伴い遺構・遺物の有無を確認するために実施したものである。調査は、事業計画地の西側部分および中央部分・東側部分の各々に $2\text{m} \times 2\text{m}$ のグリットを3箇所設定し、地表下約3.5mまで掘削を行った。グリットは、西側から第1グリット、第2グリット、第3グリットとした。

第1グリットは、既存していた家屋の取り壊した後の埋土などで搅乱されており、更に水の湧きも激しいことから、地表下約2.0m掘削した時点で調査を中止した。

第2グリットでは、地表下約2.0mで自然流路と思われる灰白色粗砂層を確認する。灰白色粗砂層は約1.3mの厚さで堆積しており、古墳時代の土器の破片が出土した。砂層の下では、



第96図 調査地周辺図 (1/13000)



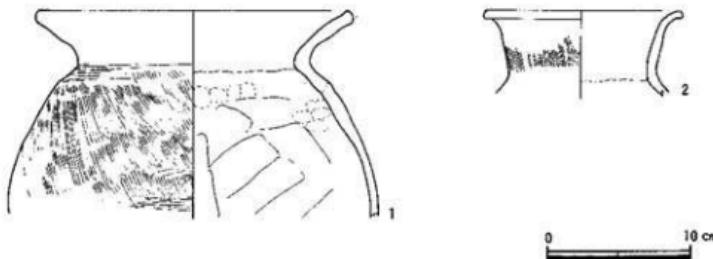
第97図 採査区設定図 (1/100)

暗緑灰色粘土、灰黒色粘土、緑灰色粘土と続いており、地表下約3.5mまで掘削を行ったが、遺物はみられなかった。

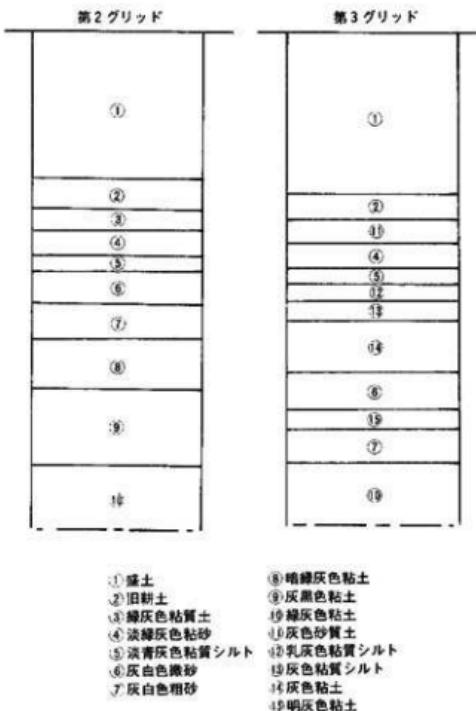
第3グリッドは、第2グリッドよりも東へ約18m離れた地点に設定したが、その層位は異なっている。それは、第2グリッドで確認された自然流路が、第3グリッドでは地表下約2.8m付近でみられたことである。また、その下にあった暗緑灰色粘土層、灰黒色粘土層がこちらでは確認できず、自然流路である灰白色粗砂層の下には緑灰色粘土層がみられた。遺物は、やはり灰白色粗砂層のなかから出土しているが、第2グリッドと比して量は少なかった。以上のことから、自然流路は西から東へ向かって流れていたと思われる。

2. 出土遺物

今回の調査で出土した土器は、そのほとんどを灰白色粗砂の止げ上より採集した。1は推定口径約22cmの壺で、胴部外面に右下がりのミガキ調整、内面に板ナデを施しており、色調は淡灰褐色を呈している。2は推定口径約13.6cmで、外向にミガキ調整を施している暗褐色の壺口縁部である。



第98図 出土遺物実測図 (1/4)



第99図 基本層序模式図 (1/40)

3.まとめ

本調査では、自然流路から古墳時代の土器がみられた。このことから、調査地周辺には古墳代の遺構が存在している可能性が高いと思われるが、それも調査地が久宝寺遺跡の南よりで、亀井遺跡と近いことから当然ともいえる。今後の周辺付近での調査には注意が必要であろう。

(1)

22. 中田遺跡（90-427）の調査

調査地 八尾木北2丁目15-3

調査期間 平成2年11月20日

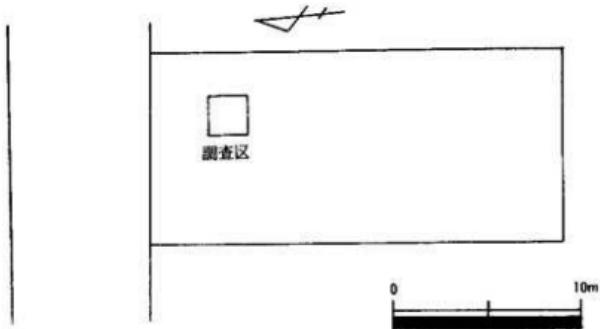
1. 調査概要

中田遺跡は、中田1～5丁目、刑部1～4丁目、八尾木北1～6丁目に広がっている大規模な遺跡であり、弥生時代から中世にかけての人々の営みを垣間見ることのできる複合遺跡である。今回の調査は、工場付住宅建築に伴う遺構および遺物を確認するためのものである。

調査は、事業計画地の中央部分に2m×2mのグリッドを1箇所設定し、地表下約1.5mまでの平面および断面の観察を行った。盛土・旧耕作土を重機によって除去した後に、人力によって掘削を行ったが、地表下約1.3mで古墳時代の遺物包含層を確認した。包含層は、灰色繊維質土で、約0.2mの厚さで堆積している。また、遺物包含層の下の褐色粘質土の上面では、炭化物を多く含むピット状の遺構がみられた。しかし、褐色粘質土では、現時点では遺物は確認していない。



第100図 調査地周辺図 (1/13000)



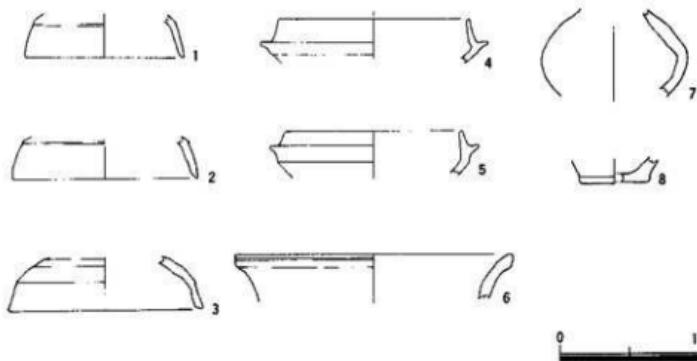
第101図 調査区設定図 (1/300)

2. 出土遺物

今回出土した遺物は須恵器・土師器であったが、土師器は小片が多く図化できなかつたので須恵器のみ図化した。壺蓋（1～3）には、まだ縞がみられる。壺の口縁部（6）にはヘラで付けられた工具痕が残っている。これ等、図化した遺物はMT15～TK10に相当し、6世紀後半のものと考えることができる。

3. まとめ

今回は小規模な調査地ではあったが、古墳時代後期とみられる遺物包含層を確認することができた。また、包含層の下の褐色粘質土上面では、人の営みを示す痕跡をみることができた。本調査地は、中田遺跡のほぼ中心にあり、今年度に調査地近辺で行われた他の遺構確認調査に



第102図 出土土器実測図 (1/4)

おいても同時期の遺物がみられたことから、大規模な集落の拡がりを予想することができ、調査地にも古墳時代の遺構が存在しているのは確実だと思われる。

(沿)

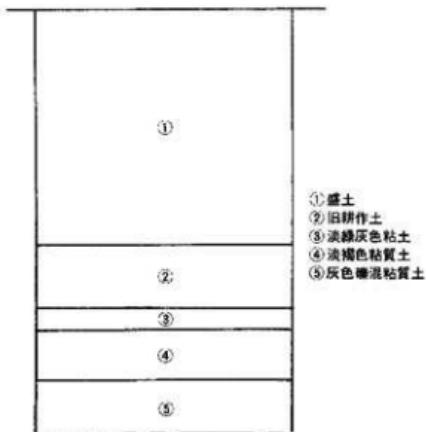


図103 図 基本層序模式図 (1/20)

23. 渋川廢寺（90—431）の調査

調査地 渋川町5丁目38番地

調査期間 平成2年12月7日

1. 調查概要

淡川廃寺は、八尾市中最古の寺であったといわれ、現在の行政区画の淡川町・春日町にあたる地域にあったと伝えられている寺である。それは、淡川町5丁目周辺に「宝積寺」という字名が残っているおり、また淡川神社南側のJR関西線の敷地内で古瓦や塔の心礎が出土していることからも、寺院の存在が考えられていた。

更に、平成2年3月に渋川神社東隣において、(財)八尾市文化財調査研究会によって、調査が行われ、白鳳時代～平安時代にかけての土壘状遺構と掘立柱建物遺構が検出され、また土器群や藤尾片が出土したことから、より寺院の存在の期待が高まっている。

当該調査地は、調査研究会によって行われた地点から東南へ約150m離れた場所で、共同住宅建築に伴って実施した造構確認調査である。調査地中央に3m×3mのグリッドを設定し、重機及び人力によって、地表下約2.4mまで掘削し、平面及び断面の観察を行った。



第104圖 脊索抽屜認圖 (1/13000)

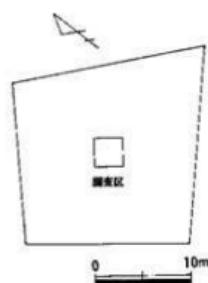
地表下約1.1mで須恵器及び土師器の破片をふくむ褐色粘質土層がある。この褐色粘質土上面では近世の耕作跡がみられ、また、この上面から約0.15mの掘削したところ溝状遺構を確認した。遺物包含層は約0.7mの厚さで堆積しており、古墳時代～奈良時代にかけての遺物が出土している。さらに、褐色粘質土層の下の暗灰色粘土層から多くの土師器が出土した。しかし、暗灰色粘土層においては、遺構は検出できなかった。

2. 出土遺物

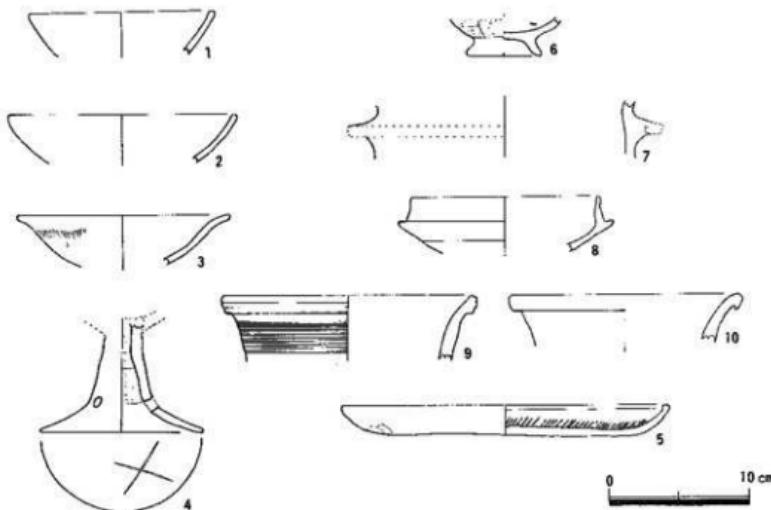
3・4は高杯である。3は外面にハケ調整を施している。4は脚部であるが、裾部内側にヘラ記号がみられる。7は土師質の羽釜である。8～10は須恵器で、9の口頭部外面にはカキ目調整を施している。5は暗灰色粘土上面で出土した土師皿で、口径22.8cmを測る。

3.まとめ

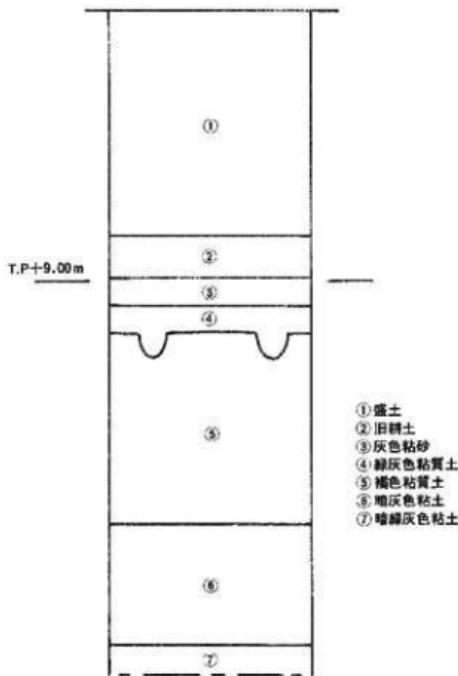
今回の調査では、小面積にもかかわらず多数の遺物が出土した。遺物は古墳～奈良時代にかけてのものが多く見られ、平成2年に(財)八尾市文化財研究会によって実施された調査のものと一致している。これらのことから、本調査では寺院を直接示す遺構・遺物は確認してい



第105図 調査区検定図 (1/500)



第106図 出土遺物実測図 (1/4)



第107図 基本層序模式図 (1/20)

ないが、渋川庵寺あるいはその関係遺構の遺存範囲を今回の調査地をも含めて考えるべきであろう。今後の周辺地域の調査に期待したい。

(道)

24. 中田遺跡 (90-412) の調査

調査地 八尾木北2丁目56-2

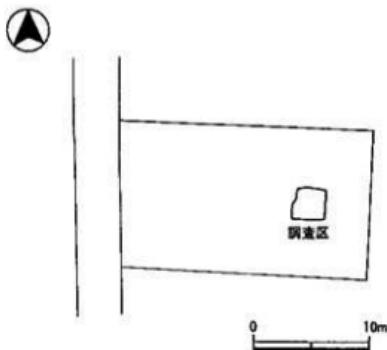
調査期間 平成2年12月11日

1. 調査概要

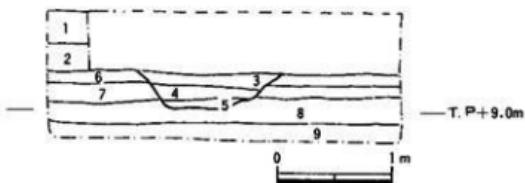
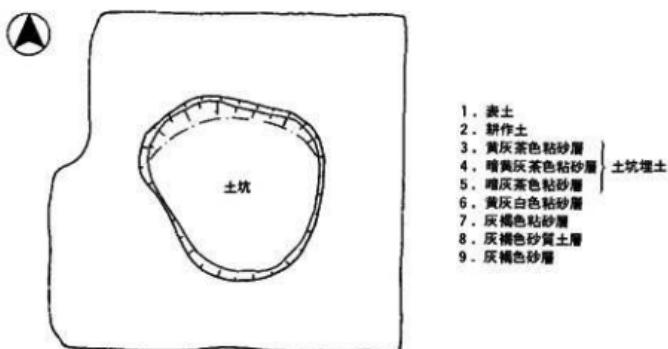
本調査は鉄骨造3階建住宅建設に伴う遺構確認調査である。施行予定地の東側に2m四方の調査区を設定した。地表下0.8mまで重機で掘削したところ、耕作土直下の黄灰白色粘砂層上面、TP9.3m前後で土壤の一部を検出した。このため調査区を北東方向へ拡張して3m四方とし、土壤全体を検出した。土壤は径1.6mの不整円形を呈し、深さは最も深い部分で0.3mを測る。埋土は3層に分かれ、各層から高い密度で土器が出上了した。土器の量はコンテナ1箱分相当である。内容は瓦器、土師器を中心であるが、瓦質土器、東播系須恵器等を若干含んでいる。土器は整理が終了していないため、代表的なもののみ実測図を掲載した。1は瓦器輪すでに高台部は消失している。2は内前に圓線状の暗文を何回かにかつぎたして施している。底部付近と若干高台痕かと思われる粘土塊がみられる。1・2とも外表面は未調整である。3・4



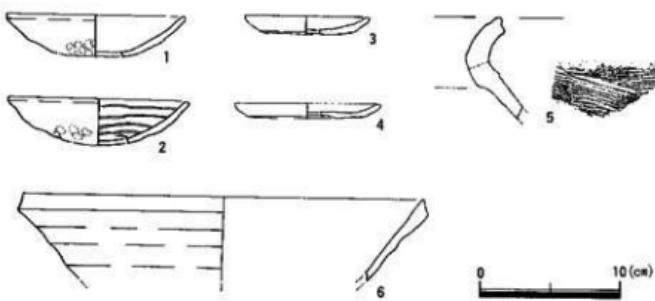
第108回 調査地周辺図 (1/13000)



第109図 調査区設定図 (1/500)



第110図 調査区平・断面図 (1/50)



第111図 出土遺物実測図 (1／4)

は土師器皿、5は須恵器の底である。6は東播系須恵器の鉢である。これらの土器は瓦器輪形態等からおよそ14世紀前半頃に位置付け得る。(図版30)

2.まとめ

土坑出土土器は14世紀前半頃の一括資料として重要である。中田遺跡は弥生時代から中世にいたる複合遺跡であるが、本調査地では14世紀代の遺構が耕作土直下の地表下0.8mという浅い位置で確認された。今後の調査に注意を要する。

(青田)

25. 恩智遺跡 (90-457) の調査

調査地 恩智中町2丁目323・324

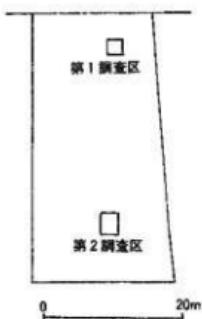
調査期間 平成2年12月18日

1. 調査概要

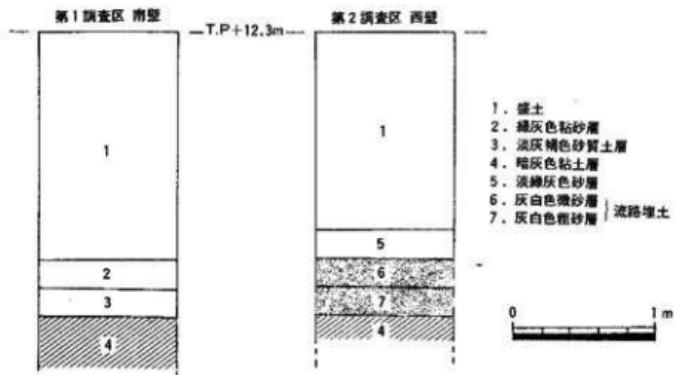
本調査は鉄骨造6階建共同住宅建設に伴う遺構確認調査である。施行予定地の南側に第1調査区を北に第2調査区をそれぞれ3m四方で設定した。第1調査区では地表下2mまで重機で掘削したところ、土器片を若干含む暗灰色粘土層を確認したため、以下地表下2.4mまで人力掘削をおこなった。この結果、この層はTP 9.9m～10.3mに堆積し、弥生土器を含む層であることを確認した。第2調査区では地表下2.2mまで重機と人力を併用して掘削し、断面観察を行ったところ、地表下1.6m～2.0m、TP 10.3m～10.7mで弥生土器を多く含む灰白色砂層を確認した。この層は自然流路の埋土と思われる。またこの下で第1調査区で確認した暗灰色粘土層を確認した。当調査ではコンテナ半箱分に相当する遺物が出土した。(図版31) 内容は弥生土器がほとんどで土師器、須恵器、サヌカイト製石器剝片が若干量である。1～3は広口



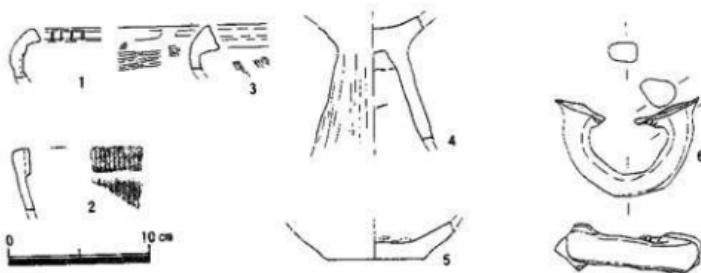
第112図 調査地周辺図 (1/13000)



第113図 調査地位置図 (1/800)



第114図 土層断面柱状図 (1/40)



第115図 出土物実測図 (1/4)

26. 中田遺跡（90—520）の調査

調査地 八尾木北1丁目40・41--1

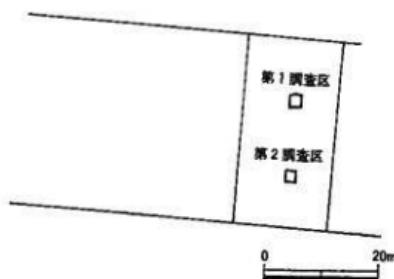
調査期間 平成3年1月23日

1. 調査概要

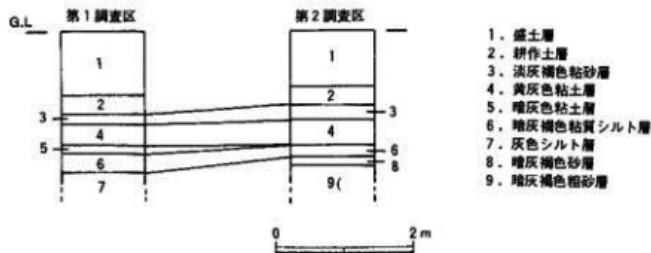
本調査は工場建設に伴う遺構確認調査である。施行予定地の北側に第1調査区を南に第2調査区をそれぞれ2m四方で設定した。第1調査区では地表下2.4mまで人力と併用して重機で掘削したところ、地表下1.65m～1.85m、TP8.95m～9.15mで古墳時代の土器片が多く含む暗灰色粘土層、暗灰褐色粘質シルト層を確認した。この下には灰色シルト層が堆積するが遺物は確認できなかった。第2調査区では地表下1.9mまで重機掘削を行なった。この結果、地表下1.65m～1.8mでTP9.15m～8.8mで第1調査区で確認した暗灰褐色粘質シルト層を確認した。またこの下の地表下1.9m～2.0mで自然流路の埋土と思われる暗灰褐色砂層と暗灰褐色粗砂層を確認した。I・2は須恵器の坏身である。たちあがりはやや内傾し端部は丸く收める。ヘラケズリは器高の3分の1以下である。TK10型式前後に位置付けられる。6世紀中葉前後



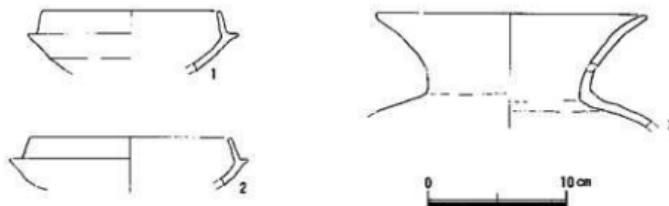
第116図 調査地周辺図 (1/13000)



第117図 調査区設定図 (1/1000)



第118図 土層断面図 (1/80)



第119図 出土遺物実測図 (1/4)

の時期のものである。3は土師器の壺である。

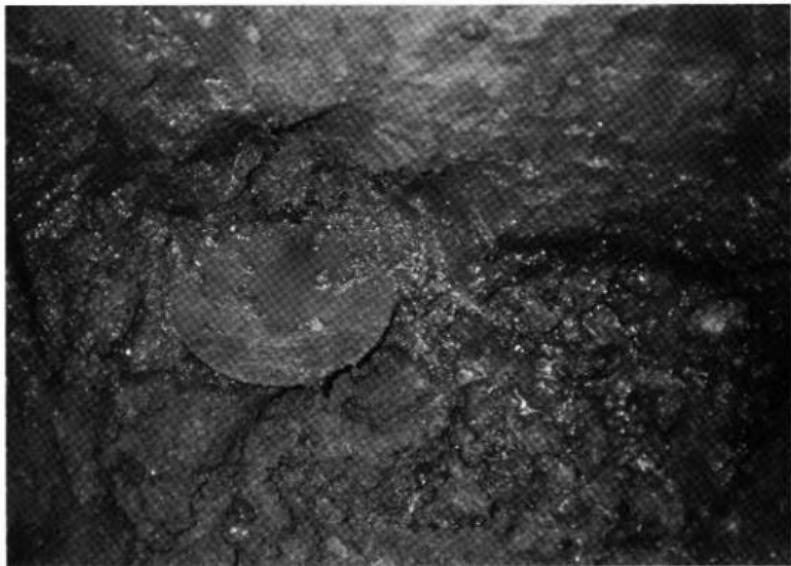
2.まとめ

当調査では古墳時代の良好な包含層を確認した。隣接地でも当期の遺構、遺物が確認されており、調査地周辺の古墳時代の集落跡の拡がりを確認できた。

(吉田)



第7グリット全景



土器出土状況



西側トレンチ



土器出土状況



第1グリット 南から



第2グリット 北から



第2グリット 東から



グリット 東から



第1次調査区 西から



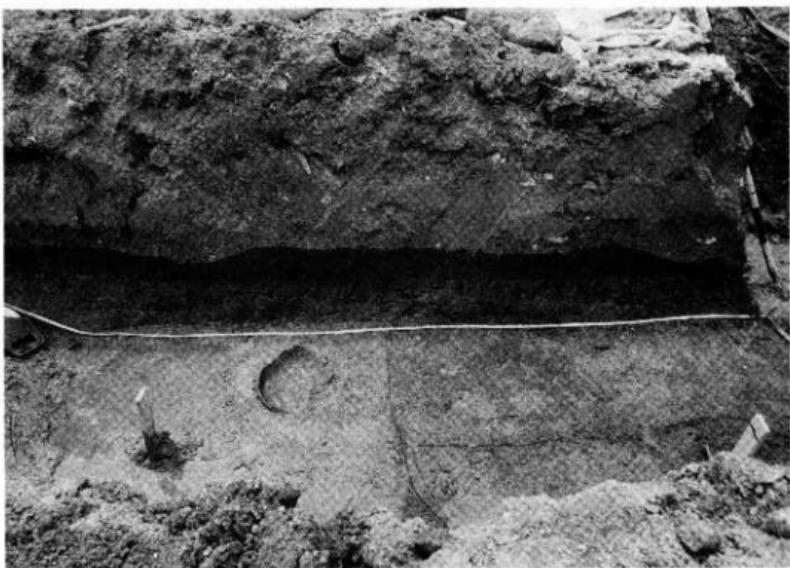
第1次調査区 SD02



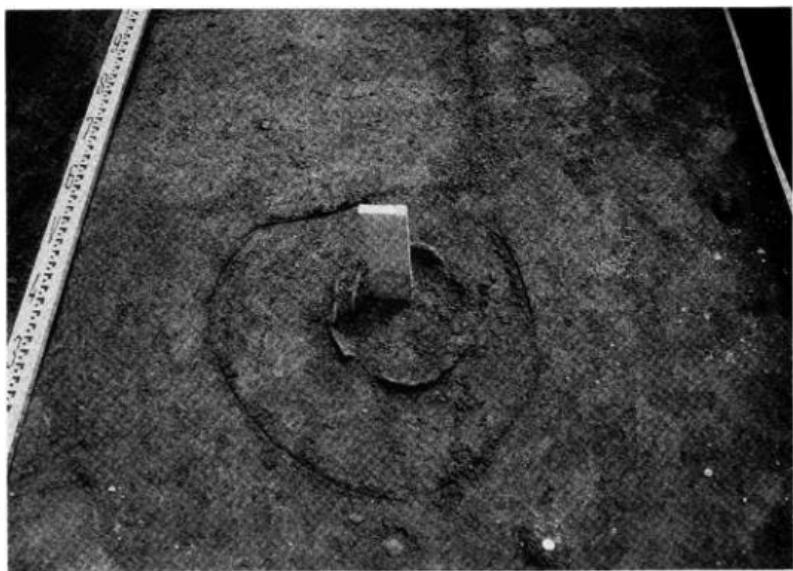
S D 02 出土土器



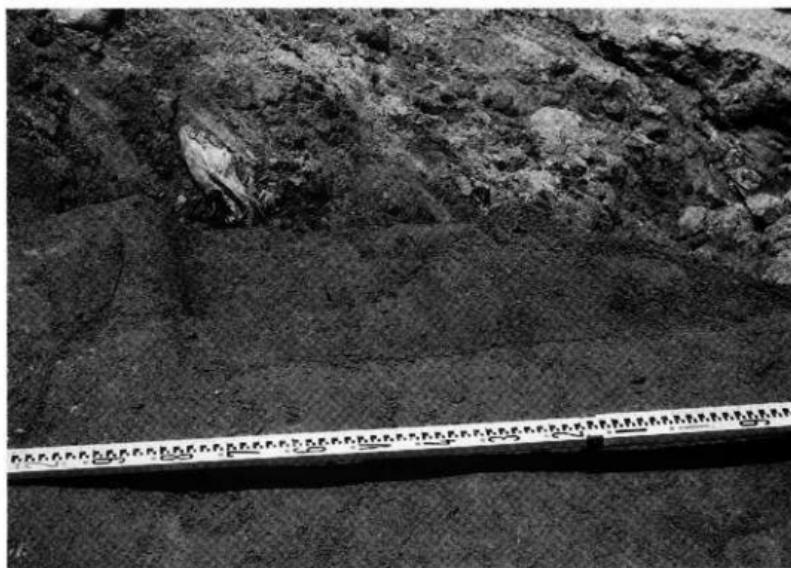
第2次調査区 第3グリット西から



第2次調査区 第3グリット 北から



第2次調査区 S P01西から



土坑



土坑斷面



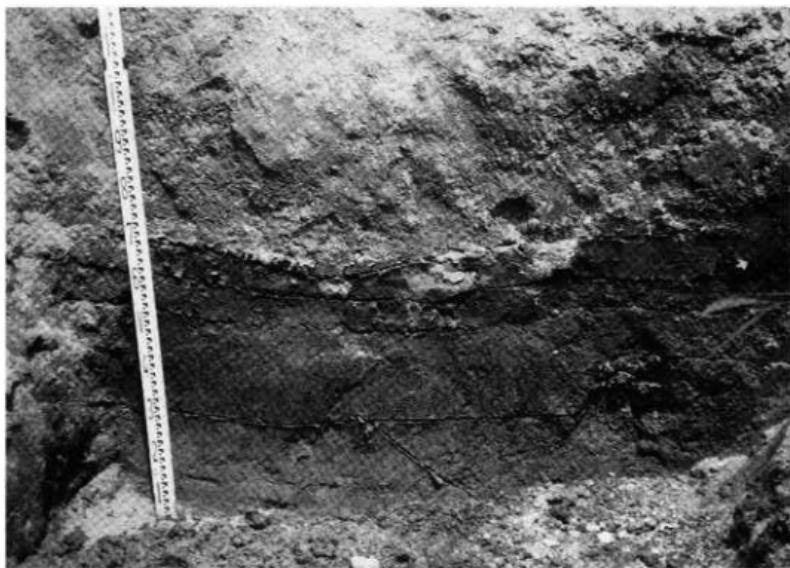
石室出土状況 南西から



石室 北東から



土器出土状況



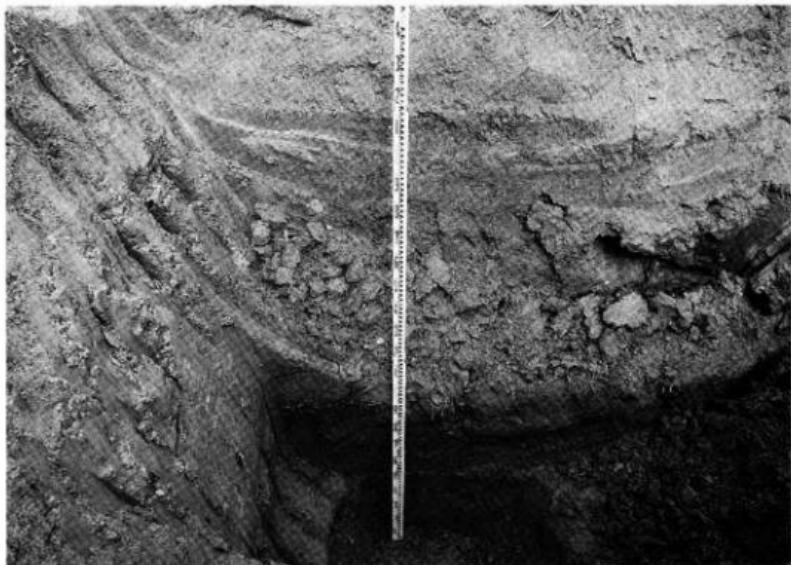
第1グリッド



第1グリット ピット



第2グリット 土坑



第2調査区 炉伏遺構



日宝寺墓地 3号墳 東から



日宝寺墓地 3号墳 トレンチ東から



日宝寺墓地 4号墳 トレンチ北東から



日宝寺墓地 4号墳 出土石材南西から



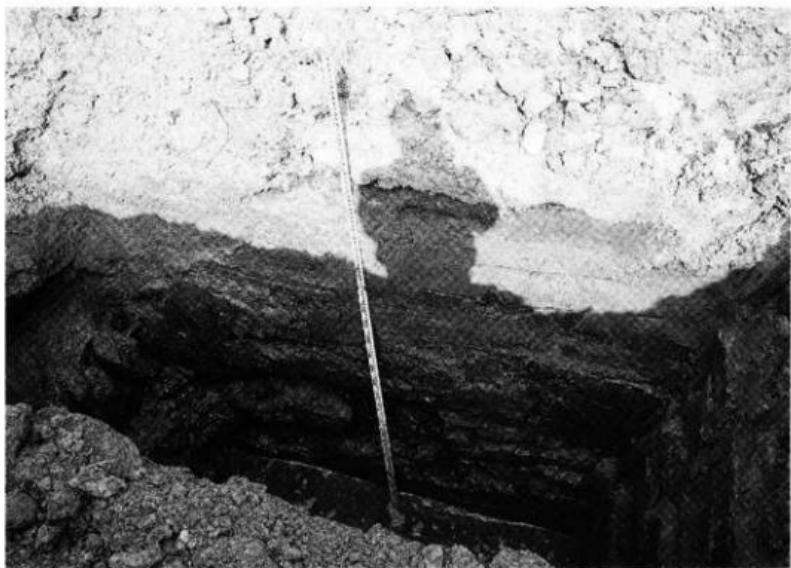
日宝寺墓地 4 号墳 出土須恵器一



日宝寺墓地 4 号墳 出土須恵器二



第1グリット

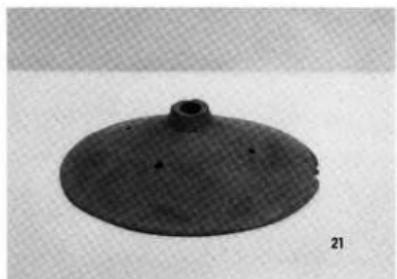


第1グリット

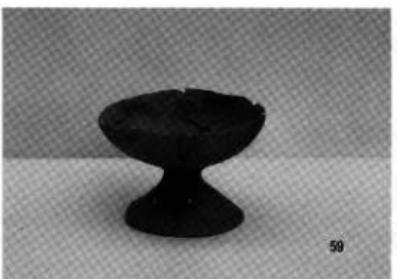
図版 17 中田遺跡（90—427）・澁川廃寺（90—431）



土器出土状況



21



59

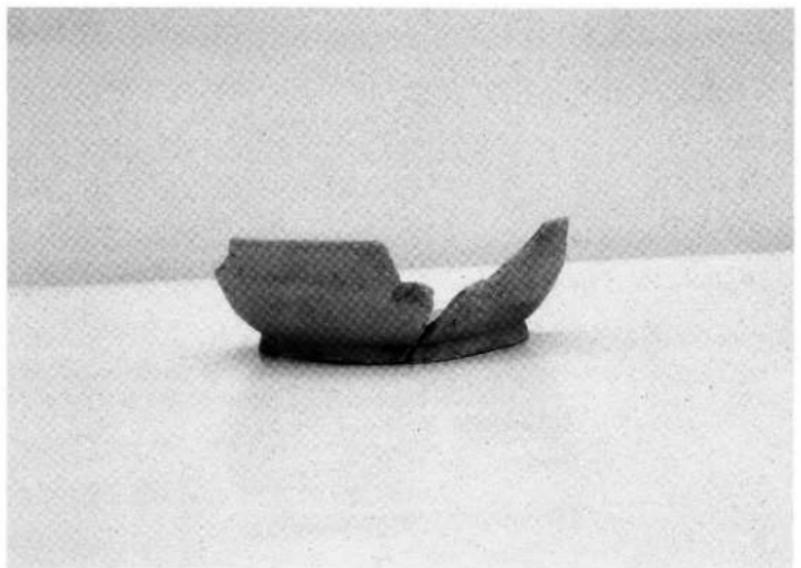


10



11

89—478 · 89—593



90—260



90—005



2



7



6

90—005・90—246



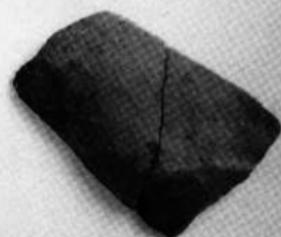
1



3



5



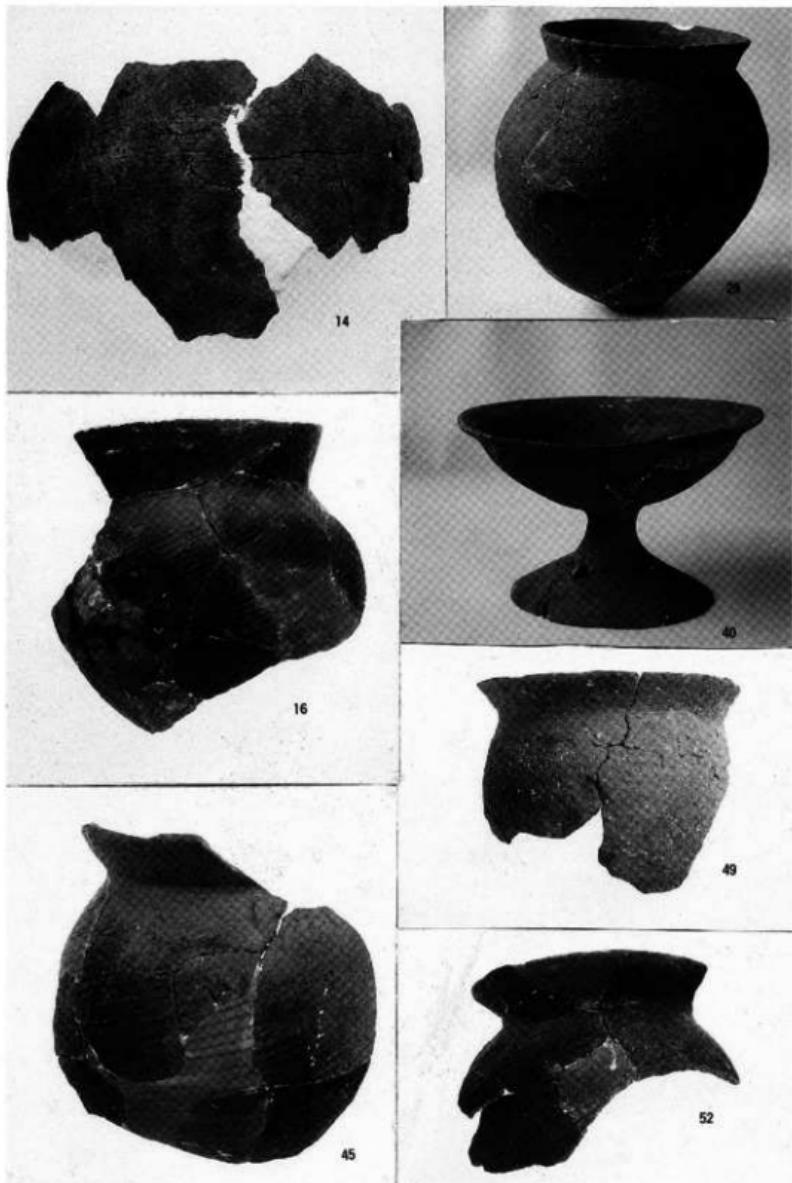
90—246

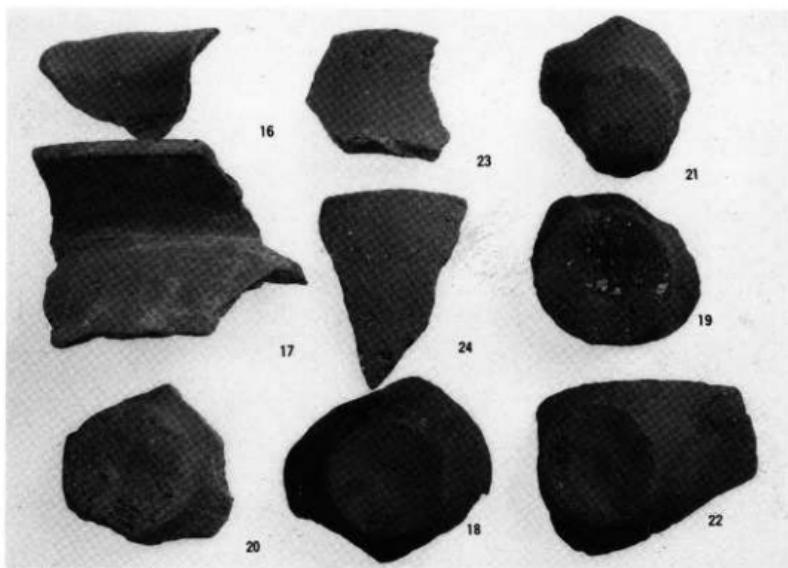
圖版20 水越遺跡 (89—59)



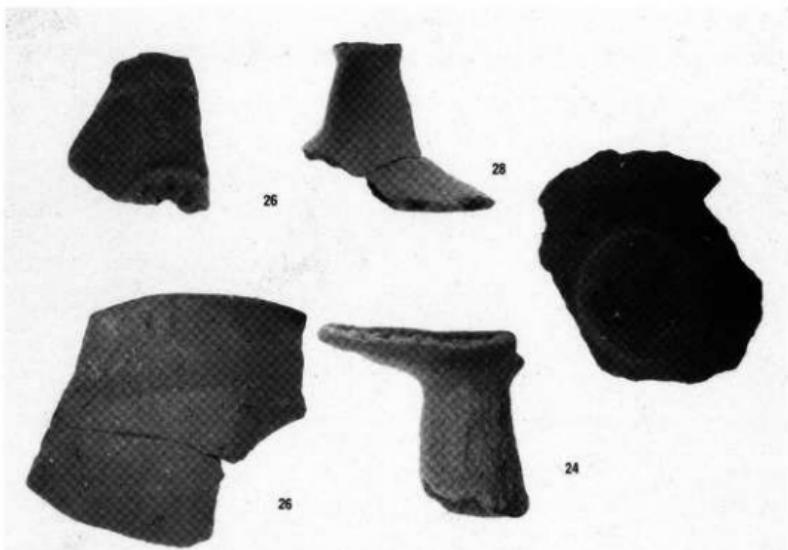
S D01 出土遺物

圖版 21 水越遺跡 (89—559)

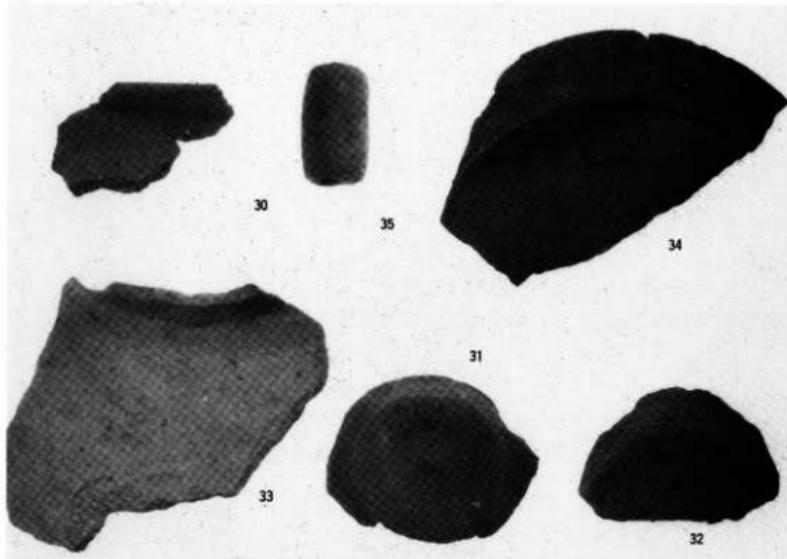




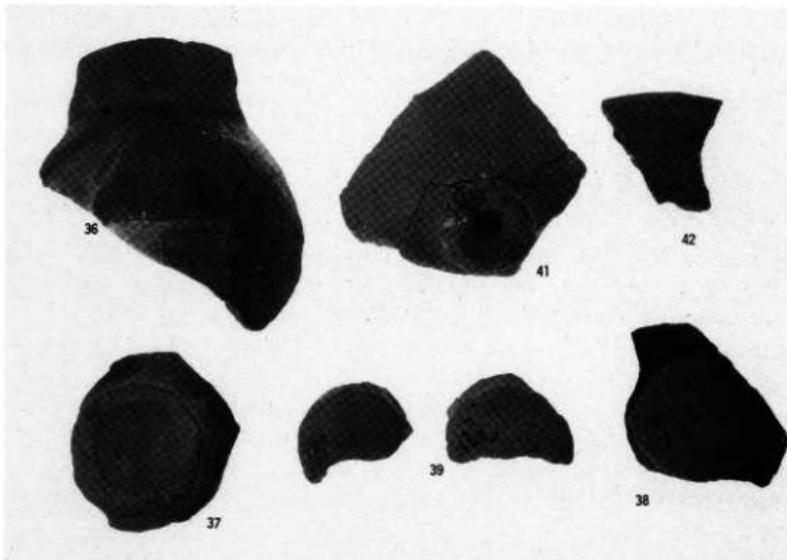
第1次調查区 暗灰褐色粘砂層出土遺物—1



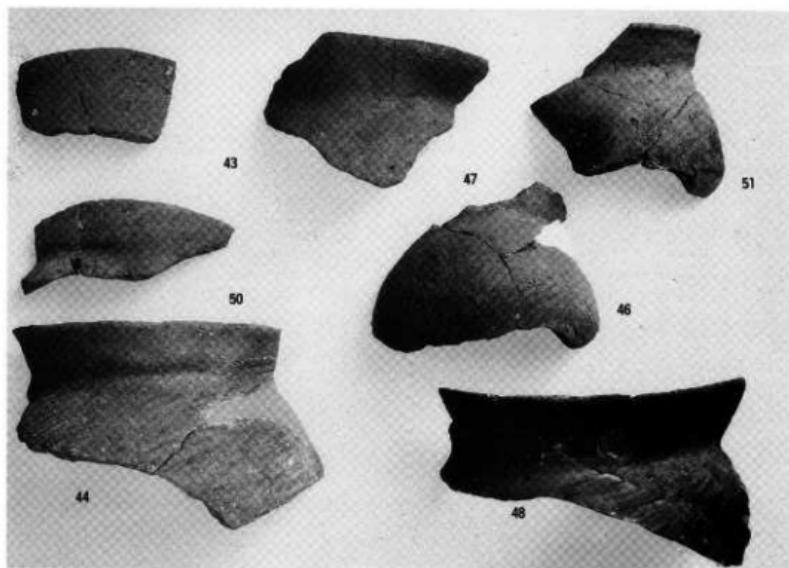
第1次調查区 暗灰褐色粘砂層出土遺物—2



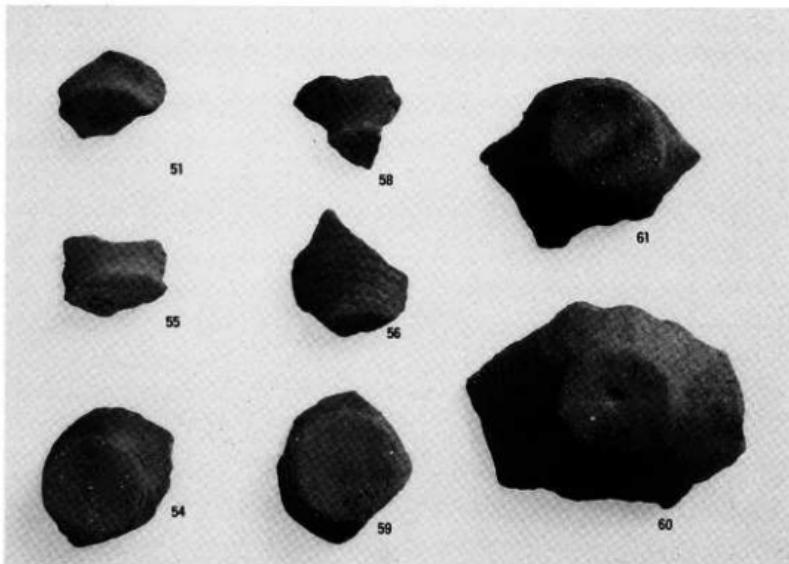
第2次調査区 喰灰褐色粘砂層出土遺物



第1次調査区 S D 02付近他出土遺物

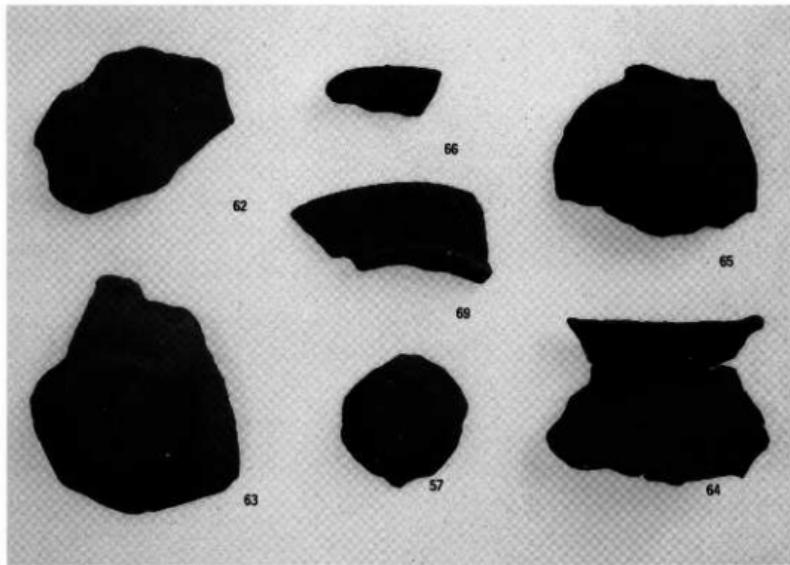


第1次調査区 出土遺物—1

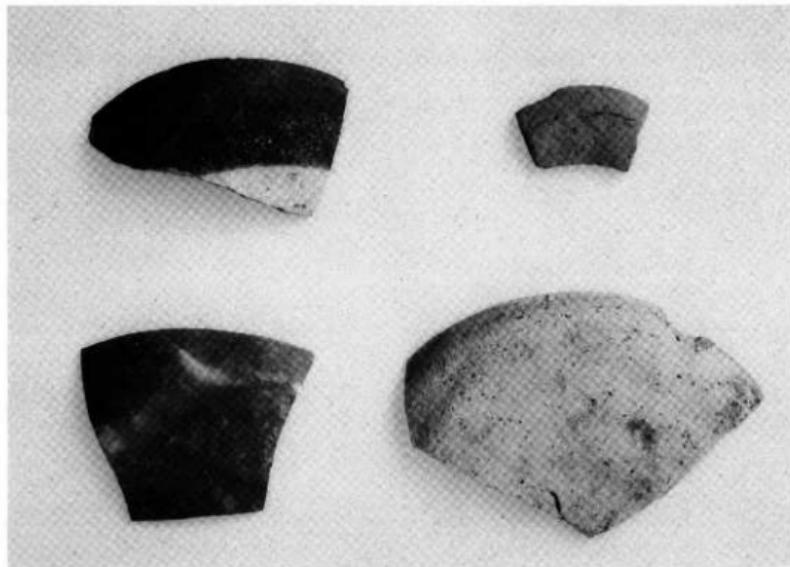


第1次調査区 出土遺物—2

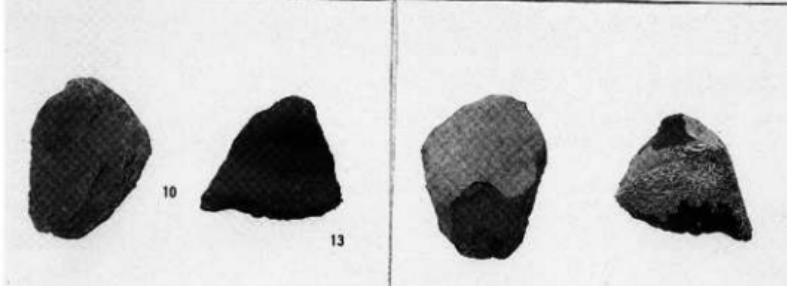
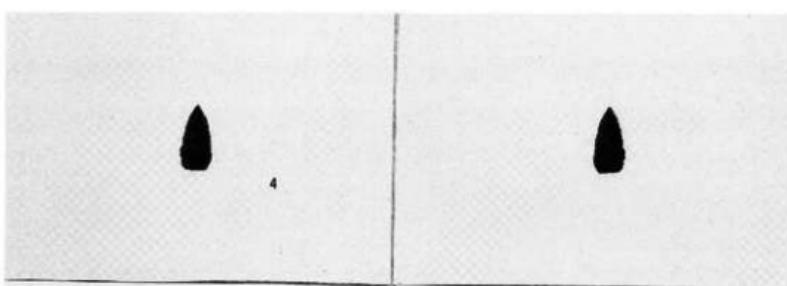
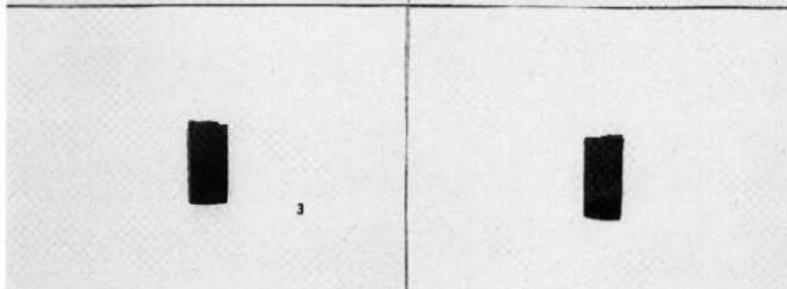
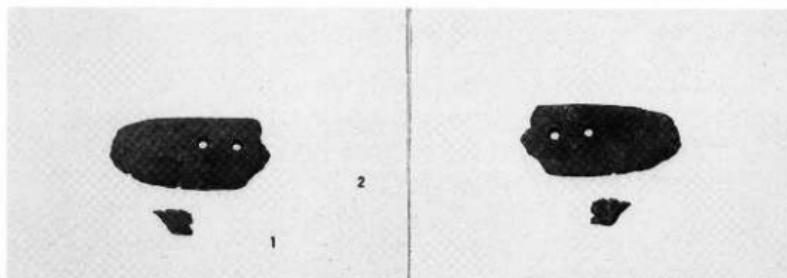
圖版 25 水越遺跡（89—58）・東郷遺跡（90—353）



第1次調査区 出土遺物-3

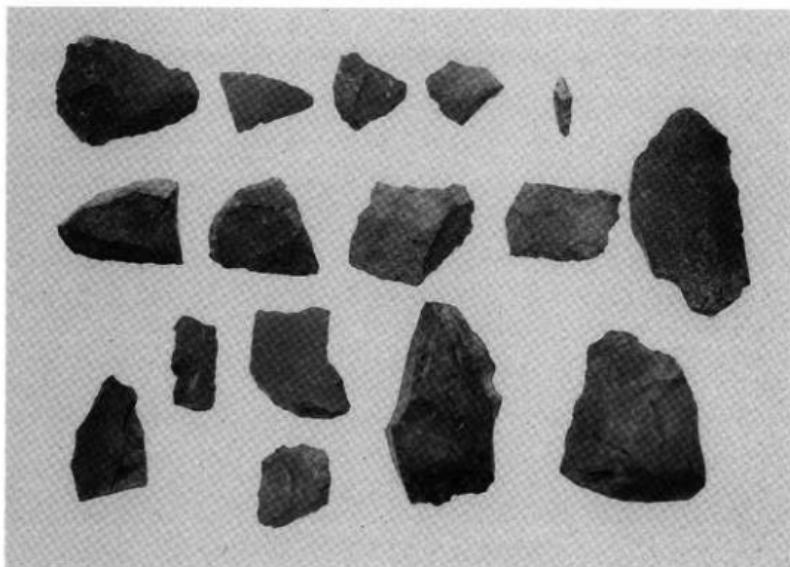
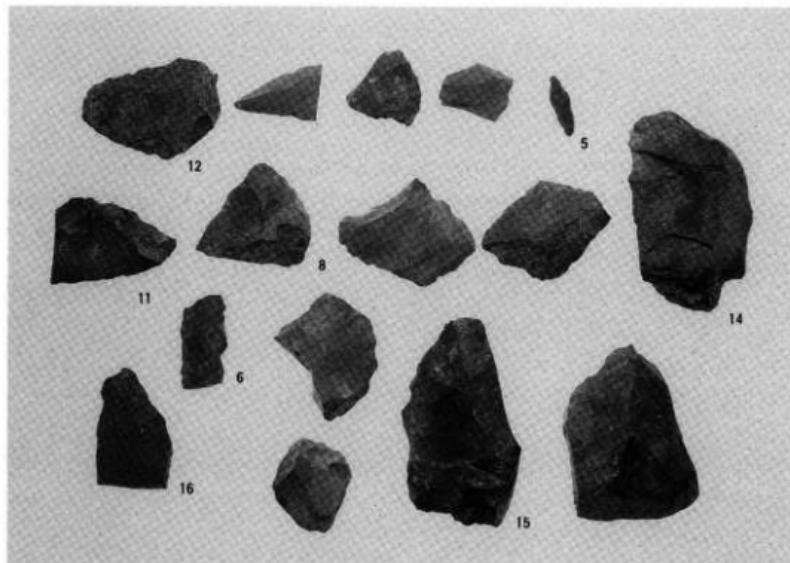


90—353



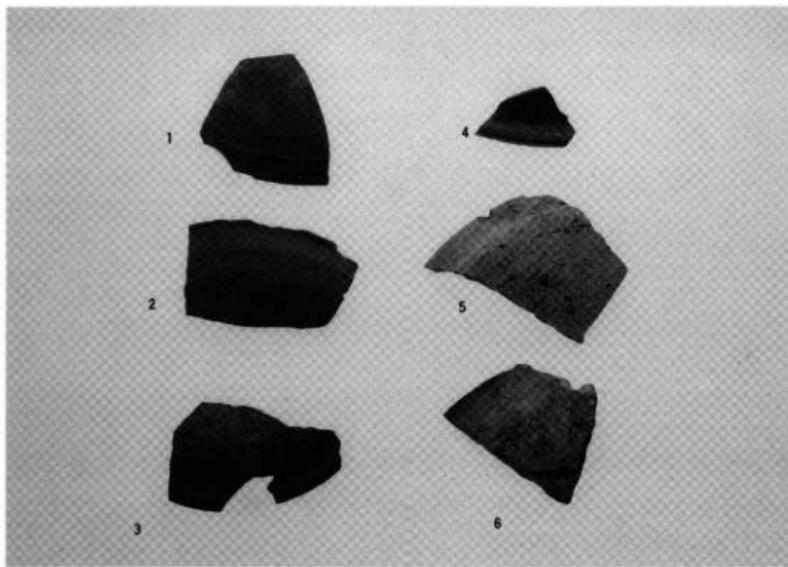
圖版
27

恩智遺跡 (90—22)

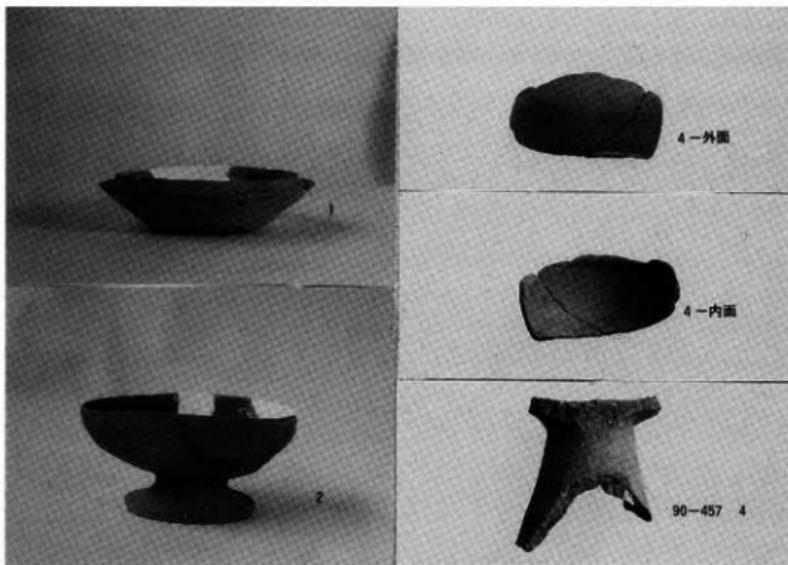


中田遺跡 (90—330) · 高安古墳群 (90—331)

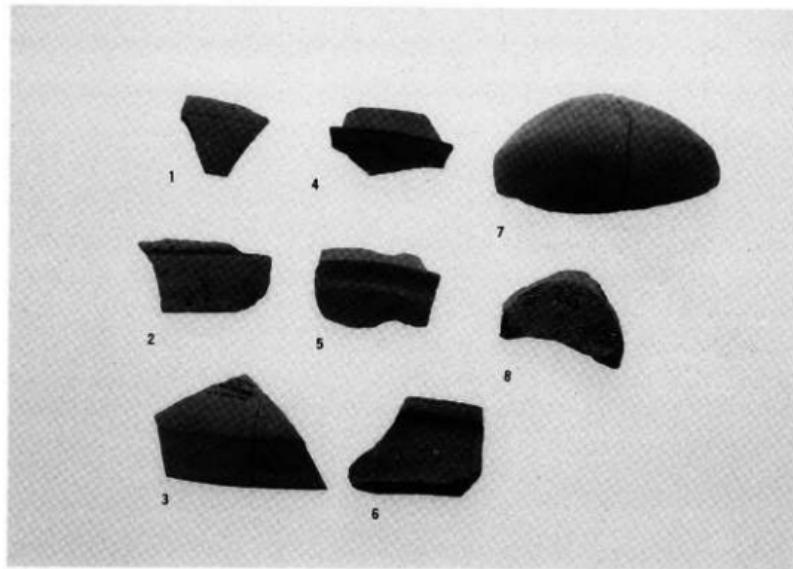
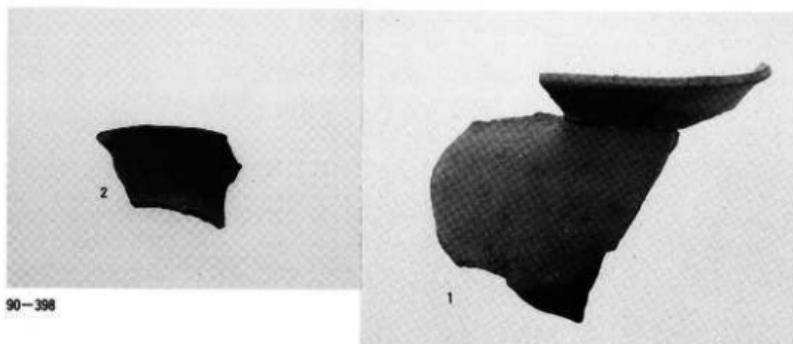
· 恩智遺跡 (90—381) · 457

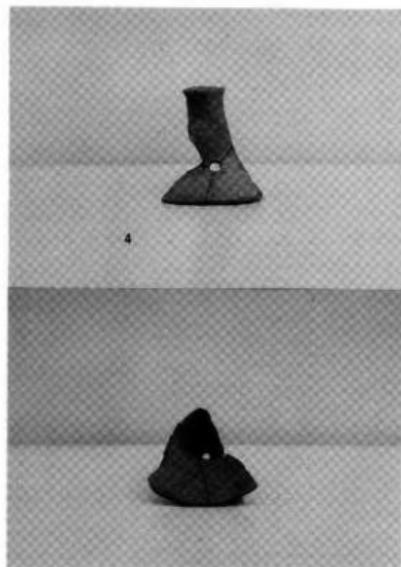


90—330

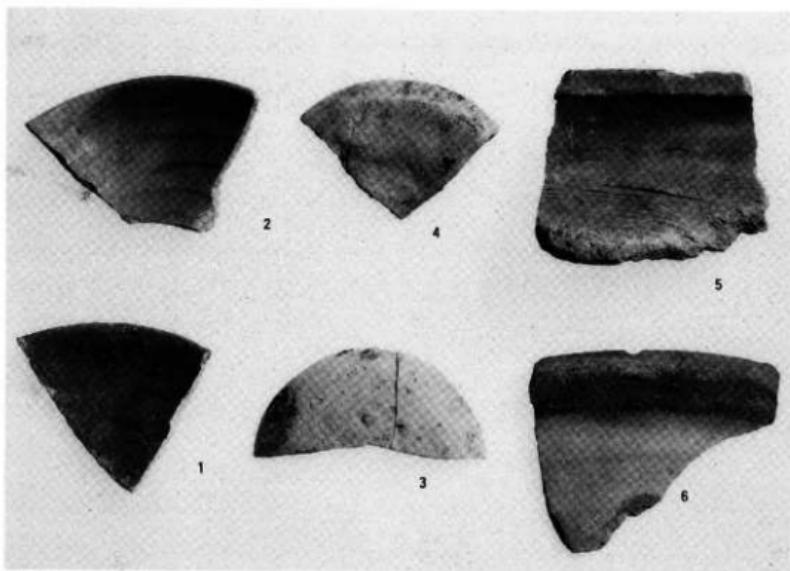
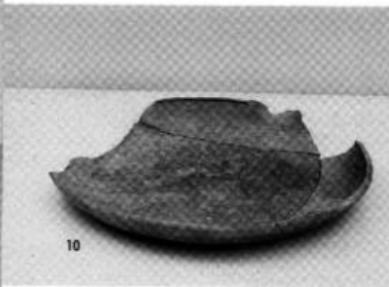


90—381 · 90—457

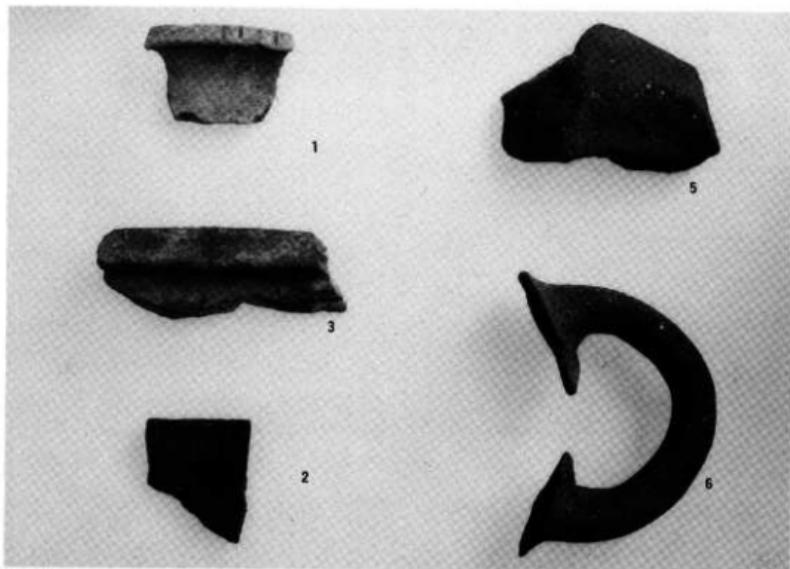




90—431



90—412



90—457

**八尾市文化財調査報告22
平成2年度国庫補助事業**

八尾市内遺跡平成2年度発掘調査報告書Ⅰ

発行日 1991年3月

発行所 八尾市教育委員会

印 刷

